殿富門ニ妖怪出ヅ

〔古今著聞集〕十七 變化　同(延長八年)七月五日夜、右近衛下野長用(周イ下同ジ)殿富門よりまいりて、武徳殿に至る程に、さきにくろき物きて、太刀はきたる者、人をとらへて、ひとり行けり、長用追付て見ければ、此ものみかへり、玄ろき笏をそもたりける、扨るもんの陣にいたりぬ、陣の内より三位一人出あひたり、供のもの火をともしたりけり、三位光臨を相待とて、他事をもかたらひけり、火をともしたるものは、すりきぬをきたり、長用鬼神にこそとおそれ思ひて、先かへりて、殿富門のもとに至りて、さきの所を見るに火百あまりともしたる物見えけり、やゝひさしく有てそきえける、

衛門ノ陣ニ鬼神現ハル

人魂

八日、己巳、月、晝見ル、

〔扶桑略記〕二十四 醍醐天皇下 裏書　七月八日、午刻月見顔(見月イ)、

〔平戸記〕延應二年正月八日、癸酉、○中略月許晝見事、延長八年七月八日午時月影明見云々、

十五日、丙子、流星アリ、是日、御咳病ニ罹ラセ給フ、

〔扶桑略記〕二十四 醍醐天皇下 裏書　七月十五日、酉刻流星差艮方渡、俗云人魂也、

〔古今著聞集〕十七 怪異　延長八年七月十五日、酉の時に、おほきなる流星、東北をさして引けるか、その跡化して雲となりにけり、

〔日本紀略〕醍醐天皇　七月十五日、皇上御咳病發給、

〔東寺長者補任〕一　權律師會理　李部重明、王記云、延長八年七月十五日、主上御惱、

〔醍醐寺雜事記〕一醍醐天皇崩御事 貞信公記、并淑光日記文、

延長八年、從七月中旬不豫、

○慶延記、異事ナキヲ以テ略ス、

二十日、辛巳、風雨雷鳴、龍尾道高欄倒ル、

〔扶桑略記〕二十四 醍醐天皇下 裏書　七月廿日、辛巳、雷鳴風雨殊烈、龍尾道高欄顚倒、

〔古今著聞集〕十七 怪異　同(延長八年七月)廿日、くろき雲にして南より來りて、龍尾壇をおほふ、すなはち風吹て、大虵の五六丈はかりなる、おちかゝりて、高欄やふれにけれと、虵は見えさりけり、

二十一日、壬午、常寧殿ニ五壇法ヲ修ス、是日、御不豫ニ依リテ、延曆寺ニ五大尊像ヲ造ル、

〔日本紀略〕醍醐天皇　七月廿一日、請天台阿闍梨五人於常寧殿、調備五壇修法、

〔扶桑略記〕二十四裏書 醍醐天皇下　七月廿一日、於延暦寺、被造始白檀五大尊、高五寸、依天皇御藥所被行也、

二十四日、乙酉、助教十市部良佐ヲシテ、天文奏ヲ進メシム、

〔類聚符宣抄〕九 進天文奏人事　左大辨藤原朝臣邦基傳宣、左大臣(忠平)宣、奉勅、以助教從五位下十市部良佐、宣令進天文奏者、

延長八年七月廿四日　左大史錦部宿禰春蔭 奉 ○西宮記同ジ、

是月、季御讀經、

〔西宮記〕九月 季御讀經　同(延長)八年七月、御讀經結願、諸卿不參、仍以殿上人令候南殿、○撰集秘記同ジ、

相撲節會ヲ停ム、

〔日本紀略〕醍醐天皇　今(七)月、無相撲、

結願

八月 小 壬辰 朔盡

九日、庚子、御不豫ニ依リテ、度者ヲ給フ、

〔扶桑略記〕二十四裏書 醍醐天皇下　八月九日、庚子、被定度者五百人事、依御藥也、

〔日本紀略〕醍醐天皇　八月十九日、給度者一千人、依御息災之祈也、

度者五百人

度者千人

○十九日、度者ヲ給フコト、便宜合敍ス、

十一日、壬寅、定考、是日、御不豫ニ依リテ、諸社奉幣使ヲ定ム、

〔扶桑略記〕二十四裏書 醍醐天皇下　八月十一日、壬寅、定來十三日諸社奉幣使、依御藥也、准弘仁七年九月、元慶二年三月例也、

〔政事要略〕二十二 八月上 年中行事 十一日定官中考事　同(延長)八年、樂人不召、上宣、不注進挿頭由、

定考ニ樂人ヲ召サズ

十二日、癸卯、陰陽寮ヲシテ、鳩怪ヲトハシム、

〔扶桑略記〕二十四裏書 醍醐天皇下　八月十二日、辨官西戸梁上鳩集、寮占云、凶也、

鳩辨官ノ梁上ニ集マル

十三日、甲辰、中宮、東宮、宣耀殿ニ遷御アラセラル、

〔日本紀略〕醍醐天皇　八月十三日、中宮(穩子)、東宮(寛明)、遷御宣耀殿、

○中宮、常寧殿ニ遷御アラセラルヽコト、九月二十一日ノ條ニ見ユ、

十五日、丙午、東寺ヲシテ、大宰府四王寺ノ四僧ヲ擇ビ補セシム、

〔政事要略〕五十六　定額寺事　交替雜事十六

四王寺ノ由來

太政官牒、東寺

應擇補太宰府四王寺四僧事

右左大臣(忠平)宣、奉勅、太宰府四王寺者、爲攘新羅兇毒、依最勝王經說、去寶龜五年創以所建也、請淨行僧依(使カ)行發願之旨、勅命深重、而歲代推遷、懈緩漸成、選置法師、不必精妙、或府司因緣之者、或部內淫盪之徒、只貪施供、遞成競望、方今恠異屢示、告以兵賊、專仰法力、正是其時、師若非名德、法何致神驗、今須眞言天台兩宗之中、殊擇其人、充補件職、眞言宗受學大法、名望稍高、天台宗同習大法、兼果堅義以上之業、並以修練超倫、呪驗有聞、擢如斯僧、隨闕薦擧、抑不設勸賞、永居外土、人情難進、恐失法器、然則補入之後、六年爲限、准之階業、任國講師、願依持念精勤之新助、將興拂交(災カ)安靜之舊功者、寺宣承知、依宣行之、仍須選定能者、相遞申補、綸旨已重、不得濫擧、但法侶之員、不可暫闕、秩滿之者、得替歸罷、牒到准狀、故牒、

延長八年八月十五日　外從五位下行左大史錦部宿禰春蔭

廢務ニ依リ釋奠內論義ノ博士等ヲ奏セズ

從四位下行左中辨兼參河權守紀朝臣

十七日、戊申、廣瀨、龍田祭ヲ追行ス、

〔西宮記〕八月釋奠事　吏部記、延長八年八月十七日、廣瀨、龍田祭、仍廢務、去七月依穢延也、釋奠博士等參候、左衞門督保忠卿因廢務不奏、廻遣之、

〔扶桑略記〕二十四裏書　醍醐天皇下　八月十七日、戊申、廣瀨社祭、廢朝(務カ)也、去月依穢延引、又釋奠內論議、博士等、依廢務日還遣之、無先例由、外記申云々、

十九日、庚戌、大和信貴山寺ノ僧命蓮ヲ召シテ、聖體ヲ加持セシメ給フ、

〔扶桑略記〕二十四裏書　醍醐天皇下　八月十九日、庚戌、依修驗之聞、召河內國志貴山寺住沙彌命蓮、令候左兵衞陣、爲加持候御前、

〔信貴山緣起〕中　えむきのみかど、こなう、おもくわつらはせたまひて、さま〳〵のおほむいのりとも、みすほう、みと經など、よろつにせらるれど、さらにことをこたらせたまはず、ある人のまうすやう、やまとにしきといふところに、おこなひて、さとへいつることもなき、ひじりさふらふなり、それこそいみしくたうとく、しるしありて、はちをとはせて、ゐなから、よろつのありかたきことゝもをしさふらふなれ、それをめして、いのらせさせたま

藏人ヲ遣ス

宣旨ヲ傳フ

叡ノ護法ヲ修ス

御夢ニ見ユ

護法神ノ形體

はゝをこたらせたまひなむものをと、まうしけれは、さはとて、くら人をつかひにて、めしにつかはす、

ゆきてみるに、ひしりのさま、いとたうとくてあり、かう〳〵せんしにてめすなり、まいるへきよしいへは、ひしりなにことにめすとて、さらにうこき氣もなし、かう〳〵、こなうたいしにおはします、いのりまいらさせたまふへきよしをいへは、それはたまいらすとて、こゝなから、いのりまいらせ候むといへは、さてはもしをこたらせたひたりとて、いかてかこのひしりのしるししるへきといへは、もしいのりやめまいらせたらは、けむのこほうといふこほうをまいらせむ、おのつから、ゆめにも、まほろしにも、きとこらんせは、さらはしらせたまへ、けむをあみつゝけて、きぬにきたるこほうなりといふ、さて京へはさらにいてしといへは、かへりまいりて、かう〳〵とまうすほとに、○繪略ス、

さて三日はかりありて、ひるつかた、ちとまとろませたまふともなきに、きら〳〵とあるものゝみえさせたまへは、いかなる人にかとて、こらんすれは、そのひしりのいひけむ、けんのこほうなめりと、おほしめすより、おほむ心ちさは〳〵とならせたまひて、いさゝかくるしきことも、おはしまさて、れいさまにならせたまひにたれは、人々もよろこひ、またひしりをもたうとかり、めてあひたり、

〔山槐記〕長寛三年六月廿八日、乙巳、或人曰、新院御惱猶不輕、今日石屋聖人密參入、奉灸御胸二所、各廿一草、相模守信保奉灸、□聖人療轉屍病云々、自平中納言被擧云々、□(醍)□(醐)天皇獲麟之時、召信貴山命蓮聖人、令□(醍)□(醐)院崩給之時、召三瀧聖人、雖有先蹤、至于醫療□可不者也、

○命蓮信貴山寺ヲ建立スルコト、延喜年中ノ條ニ見ユ、

二十一日、壬子、御不豫ニ依リテ、御修法ヲ行ハセラル、

〔扶桑略記〕二十四裏書　醍醐天皇下　八月廿一日、壬子、自今日七个日、有御修法事、依御藥也、僧二十三人、

二十五日、丙辰、右大臣定方、延曆寺ヲシテ、御惱平癒ヲ祈ラシム、

〔日本紀略〕醍醐天皇　八月廿五日、右(定方)大臣、於天台山、令讀金剛般若經一百卷、依祈御不豫也、

右近衛權中將藤原實賴ヲ藏人頭ニ補ス、

驗アリ

命蓮ヲ召ス

七箇日ヲ限ル

僧二十三人ヲ請ズ

金剛般若經一百卷ヲ讀マシム

〔職事補任〕醍醐天皇藏人頭　右近中將從四位下藤實賴　延長八年八月廿五日
補、

二十八日、己未、上野駒牽ヲ停ム、

〔小野宮年中行事〕八月　廿八日、牽上野勅旨御馬事、
長保三年、依疫死災、給官、符停牽御馬、延喜八年例、但上野御馬而已、

是月、上野太守重明親王、御惱平癒ヲ長谷觀音ニ祈ラセラル、

〔花鳥餘情〕十二玉鬘　李部王記、延長八年八月、作願文、遙祈長谷寺觀世音、願御病平愈、將造白檀觀音像、又奉鏡一面、灯明十万灯、

御馬ヲ馬寮及ビ親王公卿等ニ賜フ

觀音像ヲ造ラシム

宮主解除ヲ修ス

常寧殿ニ神座及ビ御座ヲ設ク

威儀ヲ整ヘ御座ニ著セラル

九月大辛酉朔盡

一日、辛酉、信濃勅旨駒牽、

〔政事要略〕二十三年中行事二十三日信濃望月御馬事　二十三　八月下　吏部記、延長八年九月一日、引信乃勅旨御馬、依例賜馬寮及親王公卿以下、余（重明）及五七（常明、有明）親王候御前、上曰、親王等須賜之、公家所賜之物、無殊障必參入、賜之爲良、非必爲馬、則是禮也、

〔樗囊抄〕年中行事駒引　人々不參
天曆七八十八、甲斐穂坂、馬頭助不參、延長八例、

三日、癸亥、御燈、

〔西宮記〕九月御燈　延長八年九月三日云々、不被奉御燈、宮主奉仕解除、常寧殿南孫廂西第二間、北向設御座、用半畳　南軒廊北第一間、北向敷羽（茵）薦一枚、神座敷　二間敷祝座、菅座圓　上服直衣、加冠端笏、御々座云々、

〔政事要略〕二十四年中行事二十四　九月三日御燈事　吏部記、延長八年九月三日、有御障、不被奉御燈、辰時宮主奉仕御解除、其儀常寧殿云々、上服直衣、强加冠端笏、御御座、侍臣以大奴佐、昇殿進御、上摩息了、

七日、丁卯、御惱重キニ依リテ、左大臣忠平、右大臣定方等、終夜宮闈ニ候ス、

〔扶桑略記〕二十四裏書醍醐天皇下　九月七日、丁卯、天皇不豫、左右大臣夜居、

八日、戊辰、無位一世源氏ノ座次ヲ定ム、

〔政事要略〕六十九紀弾雑事九致敬拜禮下馬事　吏部記、延長八年八月廿九日云々、一世源氏等祗候、疑無位間、應服直衣否、又疑殿上侍坐次、源氏某聽昇殿、被彈正親王、從容候氣色、上曰、無位一世源氏、出仕公庭之事、近年無其例、仁和以前有此事、須問遇彼時之人、但昔嵯峨太上皇、始賜源氏姓、欲使明朝臣對策、詔曰、若及第時賜三位、當其對策時、可敍六位、則知不殊平人、或賜六位、爾時山田春興、亦奉詔對、學欲對策、未畢其本意、天皇崩、明朝臣賜四位不對策、春興守光麴塵直衣、所未知也、又六位雖雜袍、不能服直衣、可相比定、又座次理應加六位上、雖然就五位上四位下得適歟、抑須問先例、延長八年九月八日、辰時余詣左大臣宿所桂芳房、已尅依諸卿議、被定无位一世源氏座次、可著四位下五位上、

九日、己巳、節會ヲ停ム、

〔日本紀略〕醍醐天皇　九月九日、己巳、無節會、

〔政事要略〕二十四年中行事二十九月九日節會事　吏部記、延長八年九月九日、候御前、不往宜陽殿會座、及晩藏人式部少輔藤原在衡傳曰、所令奏之見參文云、諸親王雖禁中不預會座、故不入見參蒙勅將進退、卽詔令入見參、

十一日、辛未、伊勢例幣、

〔政事要略〕二十四年中行事二十九月九日節會事　吏部記、延長八年九月十一日朝左大臣令奏伊勢御幣宣命文、書青紙、上盥洗、覽了再拜、大臣返賜、捧持罷出後、大納言仲平卿重令奏、誤也、上甚怪不覽、

十六日、丙子、烏ノ怪ニ依リ、陰陽寮ヲシテトハシム、

〔扶桑略記〕二十四裏書醍醐天皇下　九月十六日、丙子、烏咋拔時杭二枚、陰陽寮占凶由、

二十一日、辛巳、中宮、常寧殿ニ遷御アラセラル、

〔日本紀略〕醍醐天皇　九月廿一日、辛巳、皇后遷坐常寧殿、

○中宮、宣耀殿ニ遷御アラセラルヽコト、八月十三日ノ條ニ見ユ、

權律師會理ヲシテ、御惱平癒ヲ廣隆寺ニ祈ラシム、

〔東寺長者補任〕一　權律師會理　九月廿二日、於廣隆寺、令修孔雀經法、御藥御祈也、依爲御神事、於禁中不修之、彼寺當養者方之故也、請僧廿一口、七个日不斷奉仕、李部重明、王記云、延長八年七月十五日主上御惱、自九月廿一日可始行孔雀經法、主上云、發向伊勢幣使、不可出七日、齋日在近、不可於禁法事、

七箇日不斷奉仕ス

右少辨公忠奏曰、事已始行、不可停廢、將廣隆寺令奉修、上件寺當養者故也、其法會、會理律師爲阿闍梨、請僧廿一口、七个日不斷奉仕、第二日退位、結願次日御崩、

二十二日、壬午、麗景殿ニ於テ、御讓位アラセラル、

〔日本紀略〕醍醐天皇　九月廿二日、壬午、天皇逃位、讓於皇太子寛明親王、

〔醍醐寺雜事記〕　醍醐天皇崩御事　眞信公記幷淑光日記文、

延長八年○略中九月廿二日、壬午、天皇有御讓位事、

〔西宮記〕○十一前田家本　臨時戊　天皇讓位事　（裏書）延長八年九月廿二日吏部記云、召左大臣（忠平）被仰傳位太子之由云々、未一刻內侍二人參麗景殿、當御前候簾外、上令藏人二人皆上髮、執劒璽筥、自簾中授內侍、々々劒璽等候、上卽令余（重明親王）詔內侍曰、早參宣耀殿奉之云々、

右大臣（定方）令左中辨淑光奏云、遣固關使、須作勅符、卽先例皆在宣命前、但元慶九年在宣命後、而彼符草無在文（文カ）可有御畫日、木契事仰、非吾所知、須觸左大臣令行、西剋右大臣差遣□□（固關カ）使等、又三司遣勅使云々、

〔西宮記〕○十一前田家本　臨時戊　天皇讓位事　（裏書）延長八年九月廿二日○前田家大永鈔本廿三日ニ、吏部記云、左大臣（忠平）令右少辨公忠奏之、殿上侍時簡、自寛平御時被傳、今可用彼渡、將可候東宮時所造乎、又可有大床子、御座時用何色、上日時一間代々相傳、用彼可宜、抑隨便行了、又螺大床子、是累代物、須奉之、

〔扶桑略記〕二十四醍醐天皇下　九月廿二日、壬午、天皇年卌六、禪位皇太子寛明親王、

〔扶桑略記〕二十四裏書醍醐天皇下　九月廿二日、壬午、有御讓位事、依御藥危、俄有此事、人々拭涙、

〔小右記〕長和五年正月廿九日、甲戌、今日有讓國之事、其儀見新式、○略中寶劒等奉渡之後、相續御衣一襲、○略中持立中門外、（實雅）○略中故殿安和御記云、左府送書云、舊主御袍御笏被奉新主了、延長八年外記日記云、不見此事、

〔公卿補任〕六天祿三年　參議從四位上藤守義、七十七、（延長八年）九月廿二日止藏人、依讓位也、藏人藤原守義等ヲ停ム

〔三十六人歌仙傳〕從四位下源朝臣公忠　（延長）八年九月停藏人、依昇駕也、

御物忌ニ御簾ヲ垂レ給フ

石清水放生會ノ起原

醍醐天皇御代

觸穢ノ日、御拜アラセラル、

〔禁祕抄〕上禁中事恒例毎日次第　御物忌之時、垂御簾、觸穢之時、猶有御拜之由、見延喜御記、

御願ニ依リテ、石清水放生會ヲ行ハセラル、

〔年中行事祕抄〕八月十五日石清水放生會事　石清水神

舊記云、貞觀二年、爲國祈請大菩薩、奉移於石清水宮云々、同七年四月十七日丁卯云々、其詔戶云、天皇我詔旨度、掛毛畏支石清水爾坐八幡大菩薩乃廣前爾申給止申久、新宮構造天、種々神寶、幷禮代乃御幣乎令捧持天、使杢權助從五位下和氣朝臣彝範乎差遣天、奉出給云々者、然則社立始見此詔告文、又同二年始祭ルコト有リ、

舊記云、○略中石清水放生會、依舊御願被行由、載延喜御記、

〔師光年中行事〕八月十五日石清水放生會事　石清水放生會者、依舊御願被行由、載延光卿記、

神事ノ日、荷前使ノ差文ヲ奏スルコトヲ止ム、

〔小野宮年中行事〕十二月十三日點荷前使參議已上奏聞事　古人記云、十二月十三日、若大神祭使出立、及有臨時祭者、今日不可奏荷前使差文者、是延喜御時定云々、〇撰集秘記同ジ、

山城國司ヲシテ、宇治離宮明神ノ下社ヲ造營セシム、

〔醍醐雜抄〕一離宮兩社事　藤原忠文朝臣奉寄附九條右丞相之地也、（藤原師輔）下社者、仲哀天皇御子忍熊皇子（應神天皇御舍兄）離大津之宮、宇治河之汀、留跡御座、依神託、延喜聖代、仰山城國司、神殿已下被致造營、〇略下

〔參考〕

〔諸社根元記〕下　一離宮明神

舊記云、此神者（菟道稚郎子）廢太子云々、又忠文民部卿二人爲彼地主、

〔雍州府志〕三宇治郡神社門下　離宮　在宇治、傳言所祭藤原忠文也、然謬傳乎、

按、譽田天皇崩日、皇太子菟道稚郎、讓位于大鷦鷯尊曰、今我者弟也、且文獻不足、何敢繼嗣位乎、先帝立我爲太子、豈有能才乎、唯愛之而已、〇略中乃自死焉、時大鷦鷯尊、聞太子薨、以大驚、從難波馳而到菟道宮、〇略中素服爲之發喪、仍葬於菟道山上矣、大鷦鷯尊則是仁德帝也、每年五月十五日有祭、奉金銀幣、祭日供

藤原忠文宇治ノ地ヲ師輔ニ寄附ス

菟道稚郎子ヲ祀ル

御墓地

奉人、誤有金銀幣謂義牟賀利々々々々、

〔山城名勝志〕十七宇治郡　離宮明神　宇治橋北二座、五月八日祭之、按、皇極天皇宇治離宮之地、祭此神乎、故稱離宮明神乎、

〔山州名跡志〕十五宇治郡　離宮八幡　在橋寺南二町許、鳥居、西向木柱、拜殿、向午未、宮、同、所祭八幡三所、同石清水、

若宮　在同所東山下、鳥居、同上、拜殿、同、所祭若宮、是譽田天皇御子、菟道稚郎子也、稱若宮、

平等院緣起曰、離宮有川上、應神天皇王子菟道尊、是則當寺鎮守神也云々、宇治御子は、天皇第五御子也、帝位を讓玉へるに、辭して宇治山に閑居し、位を御舍兄大鷦鷯皇子に讓玉へ、り、是も亦、何ぞ君勅を虛くして、卽位すべきにあらずと辭し玉ひ、天子なきこと三年、遂に宇治御子自ら薨ず、依て兄親王卽位し玉へり、仁德帝是也、

離宮號　或說に、此地は、上古、菟道親王の御所也、故號離宮、當宮を以造此地、呼地名號之云々、山崎に有同名宮、於彼所りきうと稱す、於此所りくうと稱す、自然の名目也、右二所宮、相殿、攝社ありといへども、社記不分明、於中有傳

離宮八幡ト稱ス

若宮ト稱ス

離宮ハ舊ト菟道太子ノ御所

傍ニ藤原忠文ノ山莊アリ

記(ヤ、)ありといへども略之、

一説曰、此地の傍に藤原忠文が山莊あり、忠文沒後に、彼靈を此地に祭り鎮む、今號大宮是也云々、

例祭、五月十五日、土人爲產沙神、

石清水八幡宮別當運眞、新堂ヲ建立ス、

〔石清水八幡宮末社記〕一新堂、藥師、奉勸大菩薩御躰、醍醐天皇御宇、第三代別當運眞建立之、當山寺長日例時在之、供料田在之、近年山上執行知行之、

佛體ヲ勸請ス

大和長谷ニ長勝寺ヲ建立ス、

長谷寺ノ別院

〔長谷寺靈驗記〕上　第七　醍醐天皇御宇ニ、始テ當寺ノ別院長勝寺ヲ建立ス、是レ宇多天皇御願、美福門院修造ナリ、其ノ御發願ノ源ヲ云ヘハ、寛平二年三月三日、天皇北野天神ニ詔シ、桃花ノ宴會ヲ押テ、德政ノ計ヲ御尋ネ有ケルニ、天神勅問ヲ受テ、四ケ條ノ事ヲ奏ス、先ツ佛法ヲ崇メ、神明ヲ待ナシ、聖跡ヲ興シ、賞罰ヲ行ヘシト、則チ重ネテ勅ス、聖跡ハ何所ヲカ興ス可シ、爰ニ天神自ラ國家ヲ鎭護スルノ伽藍十八所ヲ勸奏ス、其中ニ當寺ハ、開闢以來ノ勝地、神明發願ノ精舍、濫觴世ニ超ヘ、利益殊ニ勝レ給ヘリ、仍テ同七

宇多天皇ノ御願

菅原道眞德政四條ヲ奏ス

道眞長谷寺緣起祕記ニ卷ヲ上ル

春宮ノ御惱ヲ長谷觀音ニ祈ラセラル

御立願

年七月廿七日、詔ヲ下シテ、當寺ノ靈驗建立ノ次第ヲ御尋ネアリ、同八年二月十日、幷當寺ノ俗別當三綱等、緣起祕記ノ二卷ヲ以、公家ニ奏ス、其後叡信彌々等閑ナラスシテ、朝家泰平ノ佛事、國土靜謐ノ祈禱、偏ニ當寺ニ於テ作ス、中ン就ク、同九年七月五日、天皇位ヲ遁レ、則チ祚ヲ讓ラントスルニ、其日巳尅ノ始ヨリ、春宮(醍醐)俄ニ御靈惱アリ、春宮ハ是レ次ノ祚醍醐天皇ナリ、殆ト危ク見ヘサセ給ケル上、御讓位ノ日ノ御事ナリケレハ、宇多天皇ノ御歎キ斜ナラス、遙カニ香花ヲ備ヘ、當寺ノ觀音ニ立願シテ云ク、若シ春園(春宮唐名)恙ナク、踐祚(帝位ニ登ナリ)障リ無レハ、速ニ長谷山ニ於テ、八大觀音ノ妙像ヲ鑿キ、三十三身ノ御體ヲ顯シ奉ント、爰ニ感應速疾ニシテ、同日申ノ時計リニ、天殊ニ晴テ、四方ニ雲無ト云トモ、禁中春宮ノ坊ノ上ニ、白雲一村アリ、其中ニ姿ハ見ヘスシテ、十一面ノ大呪ヲ、四五人カ程滿テ物ヲ祈ル音アリ、其音幽ニシテ聞ヘカタシ、能々キケハ、呪畢テ後チ、廻向ノ句ト覺ヘテ、天氣通聖、卯位疾速ト云、眼前ノ靈驗、貴賤是レヲ聞キ、耳目ヲ驚ス處ニ、御惱忽チ平愈シ、寢膳本ニ復ス、不日ニ勅ヲ下シテ、此ノ句ノ心ヲ御尋ネアリ、天神字ニ顯シ釋ヲ儲テ、叡慮ヲ驚ス、上句ハ煩ヒ無シ、下句ノ心ハ、十二支ノ中ニハ、卯ハ東

ニ當ル、四季ヲ云トキハ、春ハ東ナリ、是レ春宮ノ、疾ニ位ニ至リ御坐セト云フ心ナリ、父ノ天皇深ク叡感シ、其日ノ酉ノ尅ニ、思ヒノ如ク祚ヲ春宮ニ讓リ在マシ、終ニ居下ニ成ラセ給ヒテ、後チ嚴重ノ靈驗ヲ貴ンテ、昌泰元年二月二日、當寺ニ臨幸、同六日、吉日ヲ以テ、御立願ノ八大觀音幷ニ三十三身ノ像ヲ造リ始ム、同日當山二本椙ノ邊ニ臨幸アツテ、地形ヲ擇ヒ、件ノ本尊安置ノ敷地ト定ム、則チ今ノ長勝寺是レナリ、同九日還御、同二年十月十四日、太上天皇御出家、御法名ハ金剛覺、同三年二月廿二日、重ネテ當寺ニ臨幸有テ、同廿四日ニ、八大觀音幷ニ三十三身ノ像、密儀ヲ以テ開眼シ奉ル、大阿闍梨權少僧都益信、地結ハ權律師聖寶、同廿六日舞樂ヲ調テ御供養、導師天台座主內供奉長意、同廿七日、法皇還御、其後ハ代々此伽藍ヲ御崇重アリト云共、中頃世下リ料所倒失シテ、件院中皆ナ荒廢シ、數體ノ尊像損ス、〇下略

長勝寺ノ所在

御願ニ依リテ建立スト云ノ說

〔參考〕

〔大和志料〕下佛寺　式上郡　長谷寺

堂舍

七大寺巡禮記ニ、〇中略長勝寺　件寺者、在觀音堂東北方川上、昌泰元年二月二日建立、醍醐天皇御願也、

淨行僧十人ヲシテ修セシム

藥師寺ニ法華長講ヲ始ム、

〔藥師寺緣起〕藥師寺、〇中略淳和（諱仁）天皇始一會、爲鎭護國家之基、醍醐天皇拔淨（諱仁）行僧十人、於金堂前每日修法花長講、

親王敍位

敍位、

〔北山抄〕一年中要抄上七日節會及敍位事　正月　敍親王、以參議爲代官、仍留外辨、相引參入、其列在親王次、或在親王前、或列三位下參議上、共爲失誤、見延喜御記、

國司敍位

〔北山抄〕十加階事　吏途指南　又任中敍臨時爵之者、不可預治國加階之由、被定已畢云々、而延喜之間、依有良氏之例、佐渡守良道預加階畢、隨狀可被定行歟、

延喜十年以前定日ナシ

女敍位、

〔師遠年中行事〕正月　同日（八日）女敍位事、記曰、延喜十年以往、不必有此事、隔年行之、或擇吉日行之、近代之例也、

除目、

〔中右記〕嘉承元年十二月五日、

除目ノ日大辨ヲ經タル中納

除目無別事歟、〇中略清書上卿新中納言、顯、藤宰相、顯、此間中納言已有其闕、而

言ヲ清書上卿トス
藏人補任

舍人二人鈴御辛櫃ノ下ニ立ツ

紀長谷雄上卿トナル
參列者菅原淳茂ノ詩ニ感スル

經大辨之上卿、延喜以後連々不絶、

〔禁祕抄〕上藏人事　禁中事　凡補藏人、延喜天曆御記、頭奉勅向大臣亭仰之、又召御前仰之、

雷鳴陣、

〔天延二年記〕天延二年七月六日、雷鳴陣御物忌　雷發大聲、仍左右近衞陣階下、例夾東南階立、而以第□引（明カ）爲中央、若是夫歟如何、可尋知、左右兵衞陣南殿、○中略　當御物忌下格子、可召上卿云々、是當時太政大臣仰也、二舍人相合立鈴御辛櫃下、是延喜□年大將宣云々、見右近陣宣旨云々、

釋奠、

〔中右記〕寛治八年八月八日、丁丑、釋奠也、○中略　詩講及半之間、敦宗參來、滿座屬目、數年籠居之人、初依參仕歟、左少辨有信詩頗以作拔、人々感氣、至敦基朝臣詩、已有意趣、詩云、天曆寛弘寮學後、儒林依舊擅光華、注文及數行、彼維時、忠輔、早出從儒林、已昇於納言、今此座上卿、被追舊跡之由也、昔延喜御宇、有如此事、紀中納言（長谷雄）爲上卿日、菅相公淳茂、詩云、不信諸（讙イ）生廻首見、此筵卿相本何人、滿座詠此句甚以感興、今已叶舊跡歟、

內裏穢アリ

新ニ御衣ヲ調進スル內侍代藏人代ヲ定ム

時平紀長谷雄ヲシテ御製ヲ讀マシム

御製講師ノ根源

鎭魂祭、

〔北山抄〕二年中要抄下　中寅日鎭魂祭事　十一月　延喜御記云、內裏有穢、不可用御匣殿御衣、內藏寮人、夜中皆在內裏饗所、仍仰縫殿寮、受大藏御服帛、忽調御服御衣、宮等、卽彼寮送宮內云々、又內侍藏人皆參侍內裏、仍仰以女史命婦安部靜子爲內侍代、壹志厚子爲藏人代云々、無年月

中殿御會、

〔八雲御抄〕二講師作法部

中殿會講師　臣下四位殿上人、多辨官、御製中納言、參議、

康保三年御記曰、左大臣曰、延喜故左大臣時平、代講師以長谷雄卿令讀御製、後依彼例、以民部卿讀御製、卽召令讀吾詩、是御製講師根源也、

〔撰集祕記〕九月九日宴　九記（裏書）云、天曆四年十月八日、天晴、巳剋參入、○略　天皇授御製、大臣進給之、撤臣下詩等、令讀御製之後、貫首式部卿欲給之間、左大臣進取之、親王大臣遞稱先例、先閤仰云、讀御製之後、第一親王給之者、而延木御製兩三枚在故殿、若此親王早出之時給歟、（忠平）

○宴會ノ日、御製ヲ讀ミ奉ル後、之ヲ藤原忠平ニ賜フコト、便宜合敍ス、

花宴、

常寧殿ノ櫻

〔禁祕抄〕上草木　禁中事　櫻　常寧殿有此樹、延喜有花宴、

飛香舍ノ藤

藤花宴、

〔新古今和歌集〕二春歌下　飛香舍にて、藤花の宴侍りけるに、

延喜御歌

かくてこそみまくほしけれ萬代をかけて忍へる藤波の花

御製

菊宴、

〔玉葉和歌集〕六冬歌　菊の宴せさせ給うける、

延喜御製

秋過きてのこれる色も神無月霜をわけてそ惜むへらなる

殿上ニ於テ、菊合ヲ行フ、

〔新古今和歌集〕六冬歌　うへのをのこども、菊合せし侍りける次てに、

延喜御歌

ゑくれつゝかれゆく野邊の花なれと霜の籬に匂ふ色かな

朝倉、其駒ヲ神樂歌ニ加ヘ給フ、

〔十訓抄〕上第一可施人惠事　天智天皇世につゝしみ給事ありて、筑前國上

朝倉ハモト筑前ノ風俗曲

其駒ハモト催馬樂曲

二曲共ニ風俗拍子ヲ用フ

座郡朝倉といふ所の山中に、黑木の屋を造りておはしけるを、木丸殿と云、圓木にて造故也、今大嘗會の時、黑木の屋とて、北野の齋場所につくる、彼時の例なり、民を煩はさず、宮造も儉約なるへきといふ由なり、唐堯の宮に土のはしを用ひ、萱の軒をきらさりける例也、さてかの木丸殿は用心をしたまひけれは、入來の人かならす名のりをしけり、

朝倉や木の丸殿に我をれは名のりをしつゝ行はたか子そ

是天智天皇の御歌也、これを民とも聞とゝめてうたひ初たりける也、其國國の風俗ともえらひたまひける時、筑前國の風俗の曲にうたひけるを、延喜帝神樂の歌をもくはへられけるに、うたひそへられたりけるなり、其駒も、同御時くはへられたるとそ、

〔吉野吉水院樂書〕一アサクラハ本ハ筑前ノ風俗ナリ、清和水尾ノ御時、神樂ニハ被入之、又其駒ハ本催馬樂ナリ、

延喜ノ御時、神樂ニハ被入之、又其駒ノツヽチ拍子ハ、大宮殿ノウタヒハシメタマヒケリ、祕藏云々、

〔體源抄〕十本下神樂　朝倉、越(筑)前國ノ風俗也、延喜年中ニ、神樂ニクハヘラル、仍

朝倉其駒ハ風俗拍子ヲ打也、朝倉ハ古ヨリ以來相各揖讓シテ、上手ニウタハセントスルナリ、菅撥スルニ拍子取、拍子ヲ打天人ニ讓去ト、拍子ヲ打テ待也、上蔕下蔕ヲイハス、堪能ノ者コレヲ歌フナリ、

右大辨藤原公忠、及ビ藏人所小舍人大和常生ヲシテ、合香ノコトニ勤仕セシム、

〔薫集類抄〕上

侍從亦名拾遺補闕、

秋風蕭颯として、心にくきおりによそへたるへし、

公忠朝臣

沈六兩　丁子三兩　甲香一兩二分　甘松二分　熟麝金二分

占唐三朱皆小、

大和常生

沈四兩　丁子二兩　甲香二兩或本一兩、　麝金二分若無以麝代之、

甘松二分一朱已上小、

沈四兩　丁子二兩　甲香二分　甘松二朱　麝香二朱

常生ノ祕方

公忠ハ薫物合ノ名手

右二方、是藏人所小舍人大和常生之祕方也、件常生、延喜聖代與公忠朝臣同時相竝、奉合香之事者也、

〔河海抄〕十二梅枝　公忠朝臣號滋野井辨、右大辨、從四位下、天曆二年十月廿八日卒、六十、光孝天皇御孫、大藏卿國紀子、高名

薫物合好手也云々、延喜天慶間、右大辨公忠朝臣、藏人所小舍人大和常生、相竝奉合香之役、

竹ヲ禁苑ニ植シメラル、

〔體源抄〕四全上答抄之事　名物等物語〇中略

延喜ノ御門ノ御時、内裏ニ筈笛竹ヲウヘラレタリケルカ、笋ハオサナクシテ、トコロ〳〵ニオヒテアルヲ御覽シテ、前中書王兼明親王、延喜ノ御子也、ツクラセ給ヘル、ツハクメルタカンナハ、イマタ鳴鳳ノ管ヲヌキイテス、ワタカマレル根ハ、ワツカニ臥龍ノ文ヲ點ス、

〔禁祕抄〕上草木　禁中事　南殿櫻、在紫宸殿巽角、是大略自草創樹歟、貞觀此樹枯、自根纔萠、坂上瀧守奉勅守之、枝葉再盛云々、其後延喜御記、群列櫻木東頭有之、〇中略

中殿東庭竹臺二、〇中略

笙笛竹

兼明親王ノ秀句

紫宸殿草創ノ櫻仍ホ盛ユ

清涼殿ノ竹

仁壽殿ノ梅

仁壽殿長角梅、（延喜御時有之、）

○改造ノ清涼殿ニ竹ヲ植エラルヽコト、承平元年十一月七日ノ條ニ見ユ、紫宸殿ノ櫻、仁壽殿ノ梅ノ事、便宜合敍ス、

〔附錄〕

〔禁腋祕抄〕清涼殿

常ニワタラセ給殿ナリ、中殿トモ云、昔ハ仁壽殿ヲ御殿ニシツラハレタルトキモアリ、（○中略）石ハイノ間ノ前ニ、河竹ノ臺アリ、仁壽殿ノ西向ノ北ノ方（間ヵ）ニハ、吳竹ノ臺アリ、御溝水砌ヲ流タリ、

河竹ノ臺

吳竹ノ臺

吳竹漢竹ノ別

〔徒然草〕吳竹は葉ほそく、漢竹は葉ひろし、御溝にちかきは漢竹、仁壽殿の方によりて植ゑられたるは吳竹なり、

野行幸、

〔西宮記〕（臨時野行幸）四　天皇白橡、（延喜御宇、天皇御近馬場改服直衣）右公卿如例、

延長年、大原野行幸時、衞府公卿已下、皆著腹纏、諸衞督將佐已下、著狩衣胡籙腹纏小手行騰、

白橡直衣ヲ著ラセラルヽ公卿腹纏ヲ著ク諸衞督等ハ狩衣ヲ著テ

〔古事談〕（一王道后宮）延喜野行幸之時、被入腰輿之御劔ノ石付落失云々、希有事也、古物ヲトテ大ニ令驚給テ、タカキ岡（山ヵ）上ニテ御覽シケレハ、御犬ノ件石付ヲクハヘテマイリタリケレハ、殊ニ興シテ令悅給ケリ、件劔敦實親王傳給テ、身モハナタス令持給タリケリ、雷鳴之時ハ自脫云々、京（師カ）極大殿傳取テ持給タリケルヲ、白川院聞食テ召ケレハ、被進之後ニハ、自脫事ハナカリケリ、大殿ハ令恐給テ、一度モヌカセ給ハサリケルヲ、知足（忠通）院殿ワカク御坐之時、不堪不審、以或者ヌカセテ御覽シケレハ、頗峯方ニヨリテ、金ニテ坂上實（實カ）劔トイフ銘アリケリ、

御劔ヲ腰ニ入レ給フ

大犬紛失セルヲ求メ來ル

坂上實劔

唐客來朝ノ年期ヲ定ム、

〔帥記〕治暦四年十月廿三日、今日有陣定、（○中略）次被示云、先可定申唐人之事者、僕端笏申云、件商客參來者、延喜之比、被定年記之後、或守彼年記、被從廻却、或優其參來、被聽安置、

唐僧ノ度緣ニ請印ス、

〔北山抄〕（七都省雜事治部度緣請印事）延長之間、唐僧二人度緣、於結政所請印、

結政所

醍醐天皇御代雜載

園韓神祭

祭日ハ春日祭後ノ丑日ヲ用フ

賀茂祭御禊先駈ニ二寮頭内舎人ヲ改メ差ス

延喜以後典侍ノ乘馬ヲ點セズ

侍從代ニ四位ヲ召加フ

神社、

〔年中行事祕抄〕二月上丑日園并韓神祭事　若有三丑用中丑、但春日祭後丑云云、春日祭有故延引、以下申祭之時、至園（韓脫カ）神祭者、以何日可祭哉、延喜御記曰云云、二月大時、朔日當申日、有春日祭、六日、十八日、卅日、竝丑日也、以何日可祭園韓神祭乎、先例不定、或曰、以用春日祭後丑、以六日可祭、或曰、以中丑祭之、以十八日可祭云々、

〔西宮記〕三月定禊日前駈　賀茂祭事　○前田家本　有申障輩者、以侍從馬助、諸司長次官、八省輔、改差、延喜間、諸衛佐、尉有陣、差二寮頭内舎人云々、○中略、未日、藏人、近衛次將、共於右兵衛陣前、點命婦、藏人、闈司馬、院女騎馬不點或於御前點、延喜□年後、不點典侍馬、

公家、

〔後二條師通記〕寛治六年三月十九日、壬寅、○中略　延喜御記云、侍從代者、猶召加四位、六位者不叶者云々、延喜御記可尋見歟、諸家、

〔古今和歌集目錄〕庶人　伊香淳行　子細不分明、

〔伊香氏系圖〕

厚代

厚行　雅樂頭、神祇大副、

厚代一男、寛平延喜人、古今第八作者、（イカゴノアツユキト者）抑當社神幸祭禮者、依菅家御奏達、自昌泰二年己（未脫カ）四月廿四日、被始置之、神幸儀式請菅家之仰、厚行所令行事也、此時同菅家御自筆法華經二部、（各十卷）金光明經被籠置神殿也、寛平七年、事次額同御自筆也、正一位勳一等大社之大明神金剛覺印菩薩、延喜神祇式曰、伊香具神社、三代實錄曰、貞觀元年正月廿七日、京畿七道進階及新敍奉授位記、近江國從五位上勳八等伊香神從四位下、又云、同七年閏七月、近江國從四位下勳八等伊香神從四位上、

厚雄　中務少輔、

厚行一男、承平天（慶カ）長人、

厚方　禰宜次郎、大監物、

橘長盛ノ傳

行包 左京亮、
行基 太四郎、民部大丞、
行忠 神五郎、左衞門尉、

〔勅撰作者部類〕自帝王至庶人之部 淳行(厚)六位、伊香子、 古今集別一、

〔古今和歌集〕八離別歌 あつまの方にまかりける人に、よみて遣はしける、

いかこのあつゆき

思へ共身をし分けねはめに見えぬ心を君にたくへてそやる

〔尊卑分脈〕橘氏

秋實

長盛 長門守、從四下、古今作者、
直幹 正四下、式部大輔、文章博士、東宮學士、大學頭、大內記、後撰、巳下作者、
忠幹 駿河守、從五下、拾遺續古作者、

〔古今和歌集目錄〕庶人 橘長盛

秋篠氏成女、寛平九年二月十四日任大膳少進、昌泰二年四月二日任少監物、延喜六年二月一日任兵部少丞、八年二月廿三日轉大丞、九年正月十一日任

藤原千蔭ノ傳

式部丞、十一年正月十三日轉大丞、十三年正月敍從五位下、十六年任長門守、

〔勅撰作者部類〕自帝王至庶人之部 長盛五位、長門守、尾張守、橘秋實男、至延喜十二年、 古今集雜上、

〔古今和歌集〕十七雜歌上 朱雀(ママ)院の帝、布引の瀧御覽せむとて、ふん月の七日の日おはしましてありける時に、さふらふ人々に歌よませ給ひけるによめる、

主なくてさらせる布を棚機にわか心とや今日はかさまし

橘長盛

〔尊卑分脈〕藤氏眞楯孫

淑幹

千蔭 大藏丞、能書畫、母、
致爲 母、
慶幸 母、

〔勅撰作者部類〕自帝王至庶人之部 千景五位、筑前守、千蔭越前守(介)、藤原崇幹男、至延長七年、 拾遺集春一、

〔拾遺和歌集〕春一 賀の御屏風に、

藤原千景

咲そめていくかへぬらむ櫻花色をは人にあかす見せつゝ

〔扶桑名畫傳〕二十五位 内藏頭千蔭 姓は藤原、諱は千蔭、内藏頭に任す、内

書畫ヲ能クス

藏頭淑幹の男なり、書畫に長すといへり、延長頃の人といへり、○略中

畫工便覽卷二七右云、千蔭號內藏頭、淑幹男、長于書畫、々上好贊、

按に、作者部類に、千蔭の父を、崇幹に作る、崇恐らくは、淑の誤寫なるべし、

服飾、

延喜ノ比公卿ノ時服質素ヲ旨トス

〔江談抄〕二雜事　延喜之比、以束帶一具經兩三年事

又談曰、延喜之比、上達部時服、不好美麗、朱雀院御時、或公卿遣消息於內裏女房許令奏云、先朝恩賜御襲、年月推移、處々破損、御下襲一領可被申下者、大略調束帶一具、兩三年之間、節會公政之庭著用歟、何況近代之例、諸國受領、不濟封物、無賴公卿、可類乘下之人云々、

束帶一具ニテ兩三年ヲ經過ス

文藝、

延喜初日記

〔西宮記〕臨時三召名宣旨事　延喜初日記云、式部丞挿笏給宣旨、入自日花門、返上大臣、訖退出云々、而近代未見其例、

〔西宮記〕正月下給官除目　公卿子二合人、任京官三分以上、外國介後、任六位受領、人々停兼國、申自顯官預爵者、守介、近衞將監去年預爵者、諸王權守、王卿已下兼國、依外記勘文及臨時

延喜延長大間抄

恩、以上延喜延長大間抄所注、

延喜ノ比仍ホ琴ヲ彈ズル人アリ

音樂、

〔河海抄〕三若紫　僧都、琴をみつからもちまいりて、○略中

此器曲、上古渡來本朝之條勿論、允恭天武以下、令彈給之由、見日本紀、其後延喜の比までも、間彈人在之歟、中古以來、樂曲斷絕云々、此器今相殘當家者也、

〔河海抄〕四花宴　花苑といふまひを、いとおもしろくまひ給へは、御そ給はりて、めつらしきれいに人おもへり、

或記云、此樂舞圖、波羅門僧正將來女形也、其姿如吉祥天女、舞躰柔々靜々而已云々、

舞人ニ御衣ヲ賜フ

賜御衣、延喜延長例也、

〔花鳥餘情〕十三初子

延喜踏歌圖

延喜踏歌圖

歌頭　歌頭

歌頭　歌頭

歌頭　歌頭

歌掌　舞人　舞童は舞人の列にあり、

和琴踏掌　琴引以下の十二人は列人とも云也、此中九人は樂人也、

琵琶樂人

新羅琴樂人

、、横笛、百支、、

、、篳篥、笙、、

位袍、熨斗、銅拍子

同、袋持　振桙

朱雀天皇

延長八年庚寅

九月大辛酉朔盡

二十二日、壬午、宣耀殿ニ於テ、御受禪アラセラル、左大臣忠平ヲシテ、政事ヲ攝行セシム、尋デ、弘徽殿ニ遷御アラセラル、

〔日本紀略〕醍醐天皇　九月廿二日、壬午、天皇遜位、讓於皇太子寛明（朱雀）親王、詔曰、左大臣藤原朝臣（忠平）保輔幼主、攝行政事、內侍執劔璽、參宣耀殿、（醍醐）先帝御春秋卅六、今上八、

〔日本紀略〕朱雀院　九月廿二日、壬午、先帝遜位、讓皇太子、年八、左大臣藤原朝臣攝政、內侍執劍璽、參宣耀殿奉之、申刻警固、酉刻召固關使、卽日補藏人等、

〔公卿補任〕四　攝政正二位藤忠平、五十一、九月廿二日、天皇讓位、勅攝行政事、同日止太子傅、

〔公卿補任〕天慶二年　參議從四位上藤敦忠、三十四、同（延長）八九廿二昇殿、踐祚初、〇三十六人歌仙傳同ジ、

〔公卿補任〕天曆六年　參議從四位上藤朝忠、四十三、同（延長）八九廿二昇殿、〇三十六人歌

內侍劔璽ヲ奉ル

御年八歲

警固固關藏人等ヲ補ス

忠平ノ皇太子傅ヲ止ム

藤原敦忠等ノ昇殿ヲ聽ス

延長八年九月二十二日

御受禪ノ儀　宣制ノ後諸門ヲ開ヅ劔璽渡御ノ式　舊主綾綺殿新帝宣耀殿　狹少ニ依リ弘徽殿ニ遷御　先ヅ常寧殿ニ移ラセラル

仙傳同ジ

〔公卿補任〕五天暦八年　參議正四位下源兼忠、五十四、同（延長）八九廿二昇殿、

〔公卿補任〕五天慶七年　參議從四位上藤師氏、三十二、同（延長）八九廿三昇殿、

〔扶桑略記〕二十五朱雀天皇　九月廿二日、壬午、生年八歲、受禪踐祚、同日左大臣藤原朝臣忠平詔爲攝政、時年五十一也、

〔扶桑略記〕二十五朱雀天皇裏書　九月廿二日、壬午、有讓位事、左大臣貞信公（忠平）在陣座、右大臣定方起座、爲內辨、中納言恆佐爲宣命使、依御藥危、俄有此事、人々拭淚、宣制後、大臣已下退下、開諸門、掌侍藤灌子、同明子等、參麗景殿、贈璽綬劔笏幷服御物等、爲忌方角、自常寧殿先還（遷カ）御此殿、參宣耀殿、奉授新帝、爲避方忌先御此殿、亥時事了、新帝自宣耀殿、遷御弘徽殿、

〔山槐記〕治承四年三月九日、辛酉、〇中略　延長八年、朱雀院受禪日、綾綺殿爲舊主御在所、宣耀殿爲新帝御所、內侍持參劔璽等於宣耀殿、件年李部王記云、右少辨公忠、傳左大臣奏曰、宣耀殿迫窄不足備所々、將遷御在所弘徽殿、上允許之云々、亥二剋今上皇后遷弘徽殿、先天子遷御於常寧殿、不鋪緣道、右兵衞佐藤原朝臣師輔抱御、左兵衞佐藤原朝臣敦忠持御衣後、左大臣及大納言仲平卿在後陣、女藏人次之、殿侍下（臣カ）亦次之、左權中將藤原伊衡朝臣、右權中將藤原實賴朝臣秉燭前行、內侍二人持劔璽在御前者、遷御他舍儀如此、爲見先跡聊注之、

藤原師輔主上ヲ抱キ奉ル

〔踐祚部類鈔〕朱雀天皇　延長八年九月廿二日、受禪、

新主宣耀殿、遷依狹少、後弘徽殿、舊主麗景殿、〇註略ス、

上卿右大臣右大將藤原朝臣定方公、

上卿

內辨右大臣右大將藤原朝臣

內辨

宣命使中納言右衞門督藤原恆佐卿

宣命使

劔璽使或記云、上髮藏人二人、日向命婦取璽授之、內侍藤原朝臣明子、藤原朝臣灌子取劔璽出簾中、內侍二人、藤朝臣明子、同灌子取之、參宣耀殿云云、或記云、陸奧命婦取劔、酉刻右大臣遣固關使三箇國、

劔璽使

首書廿二日、警固、固關、勅授帶劔如舊、又定殿上人及藏人等、亥刻今上皇后遷御弘徽殿、

勅授帶劔

〔北山抄〕五讓位事　所司裝束南殿、〇註略ス、式部省立行立標、中務省置宣命版、儀式略　內侍二人〇註略ス、持神璽寶劔候前後、

宣命版ヲ置ク

群臣拜舞ス、內侍劔璽ヲ持シテ前後ニ候

〇中略、延長八年等例如之、〇中略　宣命使就版、宣制二段、群臣再拜舞蹈、〇中略、清涼抄有拜舞、延長八年例又如之、〇中略

スル儀ナシ

幼主時无此儀、宣命了、内侍參御殿、給御劔等、奉新帝御在所、延長例也、

固關ノ儀

〔北山抄〕四（固關事）拾遺雜抄下　内記覽勅符草、大臣參上令奏、復座返給、内記清書進之、書黄紙之由、見延長八年開關記、其狀舊例、勅符、其國司某等云々、而式无符字、又案事理、不可有此字也、○中略大臣令召内豎、○註略ス、入自敷政門候小庭、仰云、召少納言、○註略ス、少納言一人、率中務輔一人、○註略ス、内記二人、○註略ス、主鈴二人、○註略ス、入自日華門著座、○註略ス、大臣召近衞府、○註略ス、將監稱唯、進候小庭、仰云、印、次召少納言、稱唯候膝著、仰云、印、○註略ス少納言引主鈴出印、○中略使大夫等、○中略入自日華門、列立軒廊前、○註略ス、大臣宣、參來、第一人稱唯進候、○註略ス、大臣授勅符木契、宣云、罷其國、（其イ）衞其關云々、還立本所、一々如此、畢乃退出、延長八年○中略例、同音稱唯、一々進給云々、

勅符ヲ黄紙ニ書ス

（頭書）「延長八年、貞信公不被仰少納言、仰將監少納言起座令出云々、」

忠平内印ヲ將監ニ仰ス

固關便等同音ニ稱唯ス

延長八年九月廿五日、參議於結政所請印云々、依無内印歟、

結政所ニテ請印ス

〔大鏡〕一（朱雀天皇）次の御門朱雀院天皇と申き、御いみなひろあきら、これたいこのみかどの御十一の王子なり、御母皇太后宮穩子と申き、太政大臣基經おとゝの御四つのむすめ也、

〔神皇正統記〕朱雀天皇　外舅左大臣忠平（昭宣公の三男、後に貞信公と云、）攝政せらる、寛平に（基經）昭宣公薨してのちには、延喜御一代まで攝關なかりき、此君又幼主にて立給ふによりて、故事に任せて、萬機を攝行せられけるにこそ、○上略下

忠平故事ニ依リテ萬機ヲ攝行ス

〔河海抄〕四花宴　貞信公元慶四年誕生なれは、延長まてすてに四代也、于時左大臣なり、尤比擬するにたれり、又彼公は延長八年九月廿二日、朱雀院の受禪日、蒙關白詔とあり、此引入大臣も澪標卷以前は攝政の號なき歟、延喜御代も、内覽臣はかりにて、無關白號也、

忠平關白ノ詔ヲ蒙ルトノ説

○一代要記、皇代記、東寺三代記等、異事ナキヲ以テ略ス、

二十五日、乙酉、右近衞權中將藤原實頼ヲ藏人頭ニ補ス、

〔職事補任〕朱雀院藏人頭　右近中將從四位下藤實頼　延長八九廿五補、（先朝頭、補任同ジ、）○公卿

二十六日、丙戌、麗景殿ニ拜覲シ給フ、太上天皇、御遺誡アラセラル、

〔日本紀略〕醍醐天皇　九月廿六日、丙戌、（未後）新皇拜覲先帝御所、

〔日本紀略〕朱雀院　九月廿六日、天皇拜覲後太上天皇於麗景殿、（醍醐）

〔北山抄〕五讓位事　今上奉辭讓表、○中略明日重上表、○中略幼主无上表儀、後日參上、有御拜舞、延長略○中略例也、

〔西宮記〕十一臨時戌　○前田家本　天皇讓位事　延長八年九月○中略廿六日同（史部記）（裏書）云、

鋪設

藤原師輔抱キ奉ル

拜舞アラセラルル

太上天皇几帳内ニ請入レ五事ノ御遺誡アラセラル

上召在衛詔曰、今日令渡御云々、未四點、今上觀謁、先御前長押下、鋪土鋪二枚、上加八幅袷帛、不及四邊時用、四角置麟形銅鎮子、御前裝束如常、惟褰御前几帳下帷、又几帳裏、近御帳鋪茵云々、爰今上參麗景殿、師輔御也、抱内侍持璽、（欠脫カ）分前行、右權中將實賴持御笏、笏上圓、□□（左大カ）臣、大納言隨御後、女藏人次之、今上進於帛上拜舞、了還出、上請入几帳内、命以可聽左大臣（忠平）訓、及哀舊人之由、或云、今上還語左大臣曰、太上皇命我五事、朕屈指數之、唯忘一事、其四時（事カ）分明、敬神祇、（任法皇間）□□□□□大臣訓、哀舊人、對觀之時、上不冠帶云云、此時女藏人候麗景殿侍所、近衛中少將候□□宮□□□廊、有須今上還御本殿、

〔河海抄〕五賢木　李部王記云、延喜御門、最後御藥之間、春宮朱雀院也、七褥御時、御舅貞信（忠平）公、于時左大臣、爲御供御參内、主上御對面之間、有五个條之仰、一者可專神事、二者可仕寬平法皇、三者可聞左大臣公、訓、四者可哀古人、其外一个條御忘却、春宮御退出之時、左大臣被奉問之、非記正文、取意、

○太上天皇更ニ三事ヲ御遺詔アラセラルヽコト、本月二十九日ノ條ニ見ユ、

二十七日、丁亥、太上天皇、御惱重キニ依リテ、右近衛府大將曹司ニ移御アラセラル、

朱雀院ニ遷幸アラセラレントス

〔日本紀略〕醍醐天皇　九月廿七日、丁亥、先帝欲遷坐朱雀院之間、御病甚重、移坐右近衛府大將曹司、

大漸彌留

〔日本紀略〕朱雀院　九月廿七日、丁亥、先皇依不豫、欲遷幸朱雀院之間、大漸彌留、仍移坐右近衛府大將曹司、

御車ニ乘セ奉ル

〔醍醐寺雜事記〕醍醐天皇崩事　貞信公記并淑光日記文、

延長八年、○中略九月、○中略廿七日、丁亥、亥三刻、先皇御車、遷御於右近衛府大將曹司、

〔續古今和歌集〕十六哀傷歌　延長八年九月、右近府大將曹司に出てさせ給ひける時、女御、更衣みなまかりいて侍りけれはうへの局の障子にかきつけ侍りける、

延喜女御

秋風にたくふ木葉の今はとて己かちり〳〵なるそ悲しき

〔扶桑略記〕二十五朱雀天皇　九月廿七日、丁亥、先帝出宮、移御於右近衛府大將曹司、

○皇代曆、皇代略記等異事ナキヲ以テ略ス、

二十八日、戊子、法皇、右近衛府ニ幸シ、太上天皇ヲ御慰問アラセラル、

〔日本紀略〕醍醐天皇　九月廿八日、戊子、太上法皇幸右近衛府、即日還本院、

〔日本紀略〕朱雀院　九月廿八日、戊子、申刻法皇幸右近衛府、

〔醍醐寺雜事記〕醍醐天皇崩事　貞信公記井淑光日記文、

延長八年、○中略九月、○中略廿八日、戊子、是夜太上法皇、爲勞問先皇、留宿于右近府、

即日本院ニ還ラセラルトノ説

法皇御一宿アラセラル

〔河海抄〕十四柏木　李部王記云、延長八年九月廿八日、申剋法皇御加持院奉訪上、先是上詔侍臣、令辨備法皇御座、用大床子二脚、鋪物上加褥了、奉詔被止、法皇臨御座傍脇息、及誘靈、

法皇御加持アラセラルル

法皇ノ御座ヲ設ケフ

二十九日、己丑、太上天皇ノ御病大漸ニ依リテ、天下ニ大赦ス、

〔日本紀略〕醍醐天皇　九月廿九日、己丑、今日依太上皇不豫、大赦天下、

〔日本紀略〕朱雀院　九月廿九日、己丑、依上皇不豫、大赦天下、

〔醍醐寺雜事記〕李部王記云、延長八年九月廿九日、丑時院御病大漸、右大臣承詔、令藏人所於七寺修御諷誦、

諷誦ヲ七箇寺ニ修ス

〔政事要略〕五十九　赦書事　交替雜事十九

勘解由使勘判抄　信濃

神社○中略

延長八年九月廿九日詔書偁、自延長八年九月廿九日昧爽以前、大辟以下、罪無輕重、已發覺、未發覺、已結正、未結正、繫囚見徒、私鑄錢八虐、强竊二盜、常赦所不免者、咸皆赦除之、且未得解由之徒、不論僧俗、同皆赦免、

太上天皇ノ皇子章明ヲ親王ト爲シ、皇女靖子、英子等ヲ以テ内親王ト爲ス、

〔日本紀略〕朱雀院　九月廿九日、己丑、以上皇第十三皇子章明爲親王、年七、以第十二靖子、第十六英子皇女等爲内親王、

〔一代要記〕醍醐天皇子　章明親王　延長八年九月廿九日、爲後太上天皇親王、年七才、

〔一代要記〕醍醐天皇女　英子内親王　延長八年九月廿九日、爲内親王、年十才、

靖子内親王　延長八年九月廿九日、爲内親王、年十六、

法皇、右近衛府ニ御幸アラセラル、是日、太上天皇御出家、尋デ崩御アラセラル、

〔日本紀略〕醍醐天皇　九月廿九日、己丑、卯刻法皇幸右近衛府、未一刻太上皇崩御、天下諒闇、法皇還御、天下諒陰、法名寶金剛、見重明記、

〔日本紀略〕朱雀院　九月廿九日、己丑、未刻太上天皇崩、天下諒陰、

〔慶延記〕三下醍醐雜事記三　一醍醐天皇崩御事紀淑光記、

延長八年、○中略九月、○中略廿九日、上皇受於山座主三歸、三聚淨戒等、未尅崩於右近府、春秋四十六、

〔醍醐寺雜事記〕李部王記云、延長八年九月廿九日、丑時院醍醐御病大漸、○中略巳時、上令奏英明朝臣參六條院、申受給三歸戒之由、昨日、余語左大臣授奉三歸戒可宜之由、左大臣、即仰遣尊意法師用意、其間日晩、法皇臨御、故不果奏、此曉、左大臣奏剃御頭髮可宜之由、余即奏左大臣昨日之意、故有此事、英明朝臣未報命之間、御病彌困、即令彈正親王以早可受戒由、仰左大臣、尊意法師則進、奉授三歸戒及三聚淨戒、上强洗授受之、余授持之、尊意又三剃御頭髮、奉進法名、曰寶金剛、○皇代略記、皇年代略記、一代要記、歷代編年集成、元亨釋書等、金剛寶ニ作ル、乃詔余書之、有頃法皇又臨訪、即令彈正親王御

未一刻崩御天下諒闇

御年四十六

御臨終ノ御模樣

尊意三歸戒等ヲ授ケ御髮ヲ剃リ奉ルル

御法名金剛寶

左大臣早還大内、日中法皇出御座、進齋供、左大臣進御所請遺詔、及請還啓陣、上不許還陣、乃命以不可上諡號、及以左大臣爲太政大臣、醍醐寺施入供米、充年分度者之由、又召彈正親王及余同承之、又急召左大臣、去左右命密事、大臣還宮、大赦天下、八虐以下悉原之、祈聖行、是例、四刻上西首右脇登霞、春秋卅有六、

〔西宮記〕十二臨時已凶事天皇崩事○前田家本　延長八、九月廿九日吏部記云、午四剋上西首右脇登遐、春秋四十有六、余云々、自内裏有仰、令僧廿口、晝讀法華經、夕侍念佛、即念尊勝陀羅尼、此夕日供御洗一度膳、及燒名香戸内名香五處、戸外云唯有四口、後漸滿數、鑪燒沈淺香一處、云々、

〔政事要略〕二十八年中行事二十二月上御佛名事　吏部記、承平二年十二月廿一日、○中略到左近齋院住處、謁中務親王、諮云、先皇大漸之間、余等三人預奉顧命三事、而二事已行、唯以左大臣爲太政大臣之事、公家未被行、年來謂右大臣可奉行、而大臣已薨、其事未行、

〔扶桑略記〕二十四裏書醍醐天皇　九月廿九日、己丑、依御惱危、遂落飾歸眞、未刻崩于右近衛府、御年四十六、

御遺詔三事

諡號ヲ辭シ給フ

醍醐寺ニ施米度者ヲ給フ

忠平ニ密事ヲ仰セラル

西首右脇ニテ登遐アラセラル

朝夕讀經セシム

日供一度膳

重明親王等顧命三事ヲ奉ズ

崩後ニ依リテ尊號院號ナシトノ御說

九日節會ノ停マコトマラフ惜セ給チ

左衞門陣ニテ放ツ鳥

成明親王御哀悼ノ歌

〔小右記〕寛弘八年七月廿二日、辛巳、○中略内府云、一日頭辨傳仰云、可有故院尊號之詔書、其事可行者、崩給後、被行奉尊號之例、以大外記敦賴、令尋勘、申無所見由、延長例可相准、然而彼間日記已無所見云々、左府云、猶可被尋彼時例者、又可有院號者、令尋問延長八年例、申無所見之由、爲之如何者、内府云、院號無詔書歟、余答云、官符宣旨間歟、抑是不令崩給之時事也、崩後例不知事也、内府云、件事等見故殿(實賴)御日記乎、若有所見可示□(之カ)者、引見故殿延長八年例、被註他事、不被註件兩事、依崩後無尊號、院號等歟、

〔大鏡〕八九月九日節止事　われ(藤原)いかてかふつきなかつきにしにせし、すまひのせち、九日のせちのとまらんかくちおしきにと、おほせられけれと、九月にうせさせ給て、九日のせちはそれよりとまりたる也、其日左衞門陣のまへにて、御たかともはなたれしは、あはれなりし物かな、とみにこそとひのかさりしか、

〔夫木和歌抄〕三十六哀傷　雜部十八　延喜御門の御服にならせ給ひける時、天暦(村上天皇)御製

墨染の身にむつましくなりしよりおほつかなきは佗しかりけり

藤原定方ノ奉悼歌

藤原兼輔ノ返歌

御返し

黑染のいろたになくはほのかにも覺束なさ(きカ)は知らすやあらまし

よみ人しらす

〔後撰和歌集〕二十哀傷歌　先帝おはしまさて、世中を思ひなけきてつかはしける、

三條右大臣(定方)

儚くて世にふるよりは山階の宮の草木とならましものを

兼輔朝臣

山ゑなの宮の草木と君ならは我れは雫にぬるはかりなり

輔卿集同ジ、○權中納言兼

〔權中納言兼輔卿集〕たいこの帝うせ給て後、三條右大臣、

人の世のおもひにかなふ物ならは我身は君におくれさらまし

帝うせ給て又(承平二)の年の正月の朔日に、三條のおとゝ、

いたつらにけふやくれなんあたらしき年の始は昔なからに

返し

なく泪ふりにし年の衣手はあらたまれともかはらさりけり

是もおとゝ、

都にはみるべき君かなき物を常に思ひて春やきぬらん

〔新古今和歌集〕八哀傷歌　醍醐のみかどかくれ給ひて後、彌生（承平二年）のつこもりに、三條右大臣に遣しける、　中納言兼輔

櫻ちる春の末にはなりに鳧あまゝも去らぬ詠めせしまに

〔續古今和歌集〕十六哀傷歌　延長八年九月、右近府大將曹司に出てさせ給ひける時、○中略おなし諒闇の頃、よみて遣しける、　中納言朝忠

夢かとそ侘ては思ふ邂逅に問ふ人あれやまたやさむると○下句、權中納言朝忠卿集、こふ人あり又やさめぬるニ作ル、

返し　參議好古

哀とも思ひそわかぬうは玉の同し夢にてまとふ身なれは○夢に權中納言朝忠集、夢ちにニ作ル、

〔權中納言敦忠卿集〕たいこのみかとに、をくれたてまつりて、

君なくてたつ朝霧は藤衣いきさへきるそかなしかりける

〔公忠朝臣集〕

兼輔ノ奉悼歌

藤原朝忠ノ奉悼歌

小野好古ノ返歌

藤原敦忠ノ奉悼歌

藤原公忠ノ奉悼歌

おりのほりみるかひもなし白雲の山とたのみし君もなければ

この歌、延喜の御門かくれ給ひて、殿上もせさりけるほとに、出に雲のかゝりたるをみやりてよめる、

〔本朝皇胤紹運錄〕

第五十九　宇多天皇

第六十　醍醐天皇　諱敦仁、本名維城、治三十三年、仁和元正十八降誕、寛平元十二廿八爲親王、同五四三立太子、九、同九七三元服、同日受禪、十三、同十三日卽位、同年十一廿三大嘗會、延長八九廿二遜位、同廿九日出家、四十六、十座主尊意爲御戒師、法諱金剛寶、同日崩、母贈皇太后胤子、內大臣高藤公女、

御系統

皇子

- 克明親王　本名將順、二品、兵部卿、母舊鑒女、
- 保明親王　本名宗象、延木四立太子、廿三三廿一薨、年廿一、諡文彦、母皇后穩子、昭宣公女、
- 代明親王　本名將觀、三品、中務卿、母更衣藤鮮子、伊與介連永女、
- 重明親王　本名將保、二品、式部卿、母昇女、
- 常明親王　本名將明、三品、刑部卿、母女御和子、光孝女、
- 式明親王　三品、中務卿、母同、
- 有明親王　三品、兵部卿、母同、

時明親王　三品、兵部卿、母唱女更衣源周子、

長明親王　四品、母更衣從四位上藤淑姬、參木菅根女、

雅明親王　雅明親王ハ法皇ノ御子　無品、寛寛平御子、依御出家後爲延木御子、母從二位褒子、時平公女、京極御息所是也、

朱雀天皇　○御事蹟略ス、

行明親王　行明親王ハ法皇ノ御子　四品、上總大守、寛宇多子、母同雅明、

章明親王　三品、彈正尹、兵部卿、母更衣藤桑子、兼輔女、

村上天皇　○御事蹟略ス、

盛明親王　四品、上野大守、初賜源姓、敘正四下、任大藏卿、後爲親王、寛和六薨、母唱女、

兼明親王　二品、中務卿、元左大臣、從二、賜源姓、號御子左、後爲親王、前中書王是也、母同長明、

勸子內親王　四品、爲子內親王、光孝女、母同長明、

宣子內親王　齋院、母同克明、

恭子內親王　齋院、母同代明、

慶子內親王　配敦固親王、母同常明、

勸子內親王　四品、配師輔公、母同時明、

皇女

都子內親王　無品、母同、

婉子內親王　三品、齋院、母同代明、

修子內親王　無品、母更衣滿子女王、民部大輔相輔女、

敏子內親王　無品、母同代明、

雅子內親王　齋宮、配九條殿、恒德公母、

普子內親王　配三木源清平、後配和泉守俊連、母同修子、

靖子內親王　配師克卿、母同克明、

韶子內親王　賀齋、配大納言清蔭并河內守惟風等、母同常明、

康子內親王　一品准三宮、配九條殿、仁義公母、母中宮穩子、

齊子內親王　母同常明、

英子內親王　母同長明、

源高明　左大臣、正二、輦車、號西宮左大臣、安和二左遷大宰權帥、同日出家、母同時明、

源自明　三木、正四下、右兵督、母同長明、

源允明　從四上、播磨守、

源爲明　正四下、刑部卿、母伊衡女、

賜姓ノ皇子

賜姓ノ皇女　源兼子（從四下、母同時明、）

源嚴子

嵯峨隱君子　童子（號嵯峨隱君子、白髮童形云々、）

〔一代要記〕（醍醐天皇後宮）

皇后　中宮藤穩子　延喜二十年□月爲女御、延長元年四月二十六日癸酉爲皇后、年三十九、從二位昭宣公女、

妃　妃爲子內親王　光孝天皇女、宇多同產、寬平九年七月三日、太子元服受禪、其夕新帝納爲皇后、同廿五日敍三品爲妃、同二年三月十四日薨、二十一日贈一品、

女御　女御正三位藤和子　光孝源氏、

正三位藤善子（仁號カ）　右大臣定方女、

正五位下藤能子　延喜十四年十月八日補之、元更衣、右衞門督定方女、

正五位下藤和香子　延喜三年十二月補之、承平五年十一月卒、左大將定國女、

更衣　更衣源封子

更衣滿子女王

更衣藤子

更衣藤淑姬

更衣源固（明）子

更衣源疋子

更衣滋野幸子

更衣源柔子

更衣源泛子

更衣平光子

更衣源清子

更衣源暖子

更衣藤桑子

皇子二十人　皇女十八人

〔皇代記〕（醍醐天皇）

皇子　克明親王（○外十九皇子略ス）

皇女　勸子內親王（○外十七皇女略ス）

御子三十八人　御母女御更衣二十一人

藤原温子チ皇太后トタ爲ス法皇先例ナキノ由チ申サル御事蹟

已上卅八人男廿人、女十八人、

〔簾中抄〕上帝王御次第　醍醐天皇〇中略　宇多院太子、御母贈皇太后藤原胤子、内大臣高藤女、〇中略　延喜の御門と申、女御、更衣廿一人、御子卅六(?)人、此内源氏六人、

〔百練抄〕七條院二　應保元年十二月十六日、以無品内親王　嗣子、爲八條院、伊通公申狀

帝王養母之儀、元始自延喜事也、所謂溫子九條殿女、也、貴爲皇太后、寛平法皇令申無先例、仍不可然之由、然而不可依例、令存母儀給之由被仰之、〇下略

〔皇年代略記〕醍醐天皇藤諱敦仁、御本名維城、宇多長子、母贈皇太后藤原胤子、贈太政大臣内大臣藤原高藤女、在位三十三年、仁和元年乙巳正月十八日誕生、寛平元年十二月廿八日爲親王、五、二年十二月十七日、改御名字維城爲敦仁、五年四月二日庚午立太子、九、九年丁巳七月三日、於清涼殿簾前加元服、大夫藤原卿時平加冠、權大夫菅原卿加手、左中將定國理卿髮、即日受禪、十三、同十三日丙戌即位、大極殿、同十月廿五日丁卯御禊、三條末、節下大納言、左大將時平卿、同十一月廿日辛卯大嘗會、近江、丹波、昌泰元年正月廿八日御書始、延喜四年二月十日、立保明親王、本名崇象、母皇后藤原氏、諱穩子、大臣基經公女、諱日氏、文彦太子、太政爲皇太子、二、廿三年三月廿一日、皇太子保明薨、廿一、延長元年四月廿九日、立慶賴親(綱カ)王爲太子、三、三年乙酉六月十八日、太子慶賴薨、五、八年九月廿二日壬午逃位、同廿七日、出移右近府大將曹司、同廿九日、己丑座主尊意爲御戒師、剃御頂、奏御法名金剛寶、四十六、崩于右近府、十月十日、葬後山科陵、〇皇代略記異事ナシ、

法皇第一皇子御諱あつきみ

皇子十六人

寛明成明兩皇子即位アラセラル

〔榮花物語〕一月宴　世はしまりて後、この國のみかど、六十餘代にならせ給へき、世中に、宇多の御門と申みかとおはしましけり、そのみかとの、御子たちあまたおはしましける中に、一のみこあつきみの親王と申けるそ、位につかせ給けるこそは、醍醐の聖帝とまうして、よの中に、あめの下めてたきためしにひきたてまつるなれ、くらゐにつかせ給て、卅三年をたもたせ給ひけるに、おほくの女御たちさふらひ給けれは、おとこみこ十六人、女みこ(經子)あまたおはしましけり、〇中略　その基經のおとゝの御女の女御の御はらに、醍醐の宮達あまたおはしましけり、十一のみこ寛明の親王と申ける、みかとにゐさせ給て、十六年おはしまして後に、おりさせ給ておはしけるをそ、朱雀院の御かとゝは申ける、其つき、おなし女御の御はらの十四のみこ、成

幼時ヨリ聰明叡哲ニアラセラル

御一失

明の親王（村上天皇）と申ける、さしつゝきて御門にゐさせ給にけり、天慶九年四月十三日にそ居させ給ける、

〔神皇正統記〕第六十代第三十三世醍醐天皇、諱は敦仁、宇多第一の子、御母は贈皇太后藤原の胤子、内大臣高藤の女也、丁巳（寛平九）の年卽位、戊午に改元（昌泰）、大納言左大將藤原時平、大納言右大將菅氏兩人、上皇の勅をうけて輔佐し申されき、後に左右の大臣に任せて、共に萬機を內覽せられけりとそ、御門御年十四にて位につかせたまへり、おさなくまし〳〵しかと、聰明叡哲にきこえ給ひき、兩大臣天下の政をせられしかは、右相（ナシイン）（損亡）は年もたけ才も賢くて、天下の望所也、左相（時平）は譜代の器なりけれは、すてられ難しと云さためありて、すてに召仰玉けるを、或時上皇の御在所朱雀院に行幸、猶右相にまかせらるへしとさためありて、すてにめし仰せ給ひけるを、右相かたくのかれ申されてやみぬ、其事世にもれけるにや、左相いきとをりを含み、さま〳〵の讒をまうけて、終にかたふけ奉りし事こそあさましけれ、此君の御一失と申傳え侍りし、但菅氏權化の御事なれは、末世の爲にもや有けん、はかりかたし、善相公淸行朝臣は、此事いまたきさゝさりしに、かねてさとりて、菅氏

十四歳ニテ親ラ政ヲ知ラセ給フ

時平及ビ其黨ノ凋衰

德政上代ニ越ユ　仁德ノ聖代ニ擬セラレ給フ

に災をのかれ給へきよしを申けれと、さたなくて此事出來にき、さきにも申侍りし、我國には幼主の立給ふ事むかしはなかりしに、貞觀、元慶の二代、はしめて幼にて立給ひしは、忠仁公（良房）、照宣公（昭カ）（基經）攝政にて天下を治めらる、此君そ十四にて、うけつき給ひて、攝政もなくて、御みつから政をしらせましましける、猶御幼年のゆへにや、左相の讒にもまよはせ給ひけん、聖も賢も一失はあるへきにこそ、其趣き經書にみえたり、されは曾子は、我日三省吾躬といふ、季文子は三思ともいふ、聖德のほまれましまさんにつけても、いよいよつゝしみますへき事なり、むかし應神天皇も讒を聞せ給ひて、武內の大臣を誅せられんとしき、かれはよくのかれてあきらめられたり、此度の事凡慮をよひかたし、程なく神とあらはれて、今にいたるまて靈驗無双なり、末世の益を施さんためにや、讒をいれし大臣は、いのち後なくなりぬ、同心ありけるたくひも、皆神罰を蒙りてけるにや、此君久しく世をたもたせ給ひて、德政を好みおこなはせ給ふ事上代にこえたり、天下泰平民間安穩にて、本朝仁德のふるき跡にもなそらへ、異域堯舜のかしこき道にもたくへ申き、延喜七年丁卯のとし、もろこしの唐滅て、梁と云國にうつりにけり、

御在位三十三年　我朝ノ賢主　律令ニ通セサセ給フ　神祇ヲ敬ヒ佛法ヲ崇メ給フ　勸修寺ニ御願堂ヲ建テサセラルル　法皇ノ御爲ニ多寶塔ヲ建テラル　柔子內親王遺詔ニ依リ造營ノ功ヲ遂ゲラル　御本名維城　御弱年ノ御製　相者天皇ヲ相シ奉ルル

打つゝき後唐晉、漢、周となん云五代ありき、此天皇天下を治め給ふ事三十三年、四十六歳おまし〳〵き、

〔勸修寺緣起〕延喜の聖の御門とそ申なる、我朝の賢王におはします、〇中略延喜の聖主、ことに律令にあきらかに、格式をさためあめのしたおさまれり、神祇をうやまひ、佛法を崇給事むかしにもこえたりけり、かの南山科の大領（宮道潔淵）の跡をは寺になされけり、今の勸修寺これ也、この寺いまた造はしめさりける時、渤海國の使斐裒（裴頌）といふ人、この國にわたれりけるか、越州つるかの津につきて、山科をめくりて羅城門へゆくとて、南山のかけ道をとをりけるか、馬よりをりて、北にむかひて拜してとをりけるを、人そのこゝろをしらす、あやしひて問けれは、渤海客申けるは、此處にちかく伽藍いてき侍へし、地形龜の甲（の脫カ）ことし、佛法の命長久にして、貴人たゆへからす、このゆへに拜する也とそ申ける、はたして寺となりて後、聖主御願堂をたてさせ給て、五大明王を安置せらる、是鎭護國家のためなり〇寬平八年六月三十日ノ條參看、又寬平法皇の御ために、多寶の大塔をたてらる、其功いまたならさるに晏駕ありしかは、御いもうと柔子內親王と申は、六條の齋宮とも申にや、遺詔をうけ給はりて、造營功をゝへて供養をとけ、五佛會とて、やむことなき法會をそとりおこなひ給ける、この寺をは、余寺の眞言をむねとして、三論宗をかねならふとかや、はしめには、廣澤のなかれをくみて、のちには、小野の風をそつたへける、

〔京都御所東山御文庫記錄〕宸翰掛引繼第三十五號之內一

「醍醐天皇御諱字　壹通」（包紙）

醍醐天皇御諱字敦仁之外、官底所見不詳、雖然紹運錄御本名維城之由、慥見候上者、不能左右候歟、可足因准之先規候歟之由存候、

雅久

甘露寺殿

〔續後撰和歌集〕二十賀歌

亭子（宇多）院位におましし〳〵ける時、いまたみこにて、正月初子の日、（龜）こてうして后の宮の御方に奉らせ給ふとて、かき附けさせ給ひける、

延喜御製

二葉より今日を松とは引かるとも久しき程を比へても見よ

〔大鏡異本陰書〕左大臣時平　又古人口傳云延喜御時、相者狛人參來、天皇

寒夜ニ御衣ヲ脱ガセラル

温顔ヲ以テ臣下ニ接シ給フ

御于簾中、聞御聲云、此人爲國主歟、多上少下之聲也、叶國體、天皇耻給不出御、

〔大鏡〕八幡臨時祭始事　同しきみ（みかさ）と申せと、その御時に生れあひて候けるは、あやしのたみのかまとまて、やむことなくこそ、大に寒きころほひ、いみしう雪ふりさえたる夜は、諸國の民百姓いかにさむからんとて、御衣をこそよるのおとゝよりなけいたしおはしましけれは、をのれらまても、めくみあはれひられたてまつりて侍身とをもたゝしうこそは、されはそのよに見給へしことは、なをすへまてもいみしきことゝおほえ侍そ、〇中略お ほかた延喜帝、つねにえみてそおはしましける、そのゆへは、まめたちたる人には物いひにくし、打とけたるけしきにつきてなん人はものはいひよき、されは大小事きかんかためなりとそ仰せ事ありける、

〔續古事談〕一王道后宮　帝王ハ、人ヲアハレミ、民ヲハクヽム心オハシマスヘキ也、シカレハ〇中略延喜御門モ、ザムクサユル夜ハ、御衣ヲヌキテ、夜御殿ヨリナケイタシ給ケルトイヒツタヘタリ、〇平家物語同ジ、

〔政事要略〕六十七雑物等事　男女衣服　井資用　（催定公方）祖父常語曰、先帝御代、有寵幸之女、字内匠

延尉ヲ御寛恕アラセラル

深夜婦女ノ哭聲ヲ聞食シテ其奸計ヲ観破シ給フ

藏人、容顔美麗、好色之者也、奏云、白馬之節、久不見大場之儀、給假將見彼儀、勅聽之、出大場惕（所カ）見物、檢非違使止車之間、内匠乘車、多出火色、源中正爲廷尉、乞出件衣、欲破之處、内匠招中正、小舍人童贈和歌云、大雷爾照留日乃色遠禁天波、天乃下爾波、誰加住倍支、中正雖行有限之法、不忍無情之思、諸臣相議、不破返之、其夕歸參大内、勅問雜事、具奏此事、帝曰、婦女衣裳、不破有情、時聞之者、以爲美談、聖代之事、難以緩法、爲降寵幸、自有寛恕歟、中正亦有譽無謗、後中正密通於匠（内脱カ）云々、

〔今昔物語〕二十九本朝付惡行　九條堀河住女煞夫哭語第十四

今昔、延喜ノ御代、天皇夜ル清涼殿ノ夜ルノ殿ニ御マシケルニ、俄ニ藏人ヲ召ケレハ、藏人一人參タリケルニ、仰セ給ヒケル樣、此ノ辰巳ノ方ニ、女ノ音ニテ泣ク者有リ、速ニ尋テ參レト、藏人仰セヲ奉ハリテ、陣ノ吉祥ヲ召シテ、火ヲ燃サセテ、内裏ノ内ヲ求ムルニ、更ニ泣女无シ、夜深更ニケレハ、人ノ氣色タニ无ケレハ、返テ其ノ由ヲ奏スルニ、天皇尚吉ク尋ネヨト仰セ給ヘハ、其ノ度ハ、八省ノ内ヲ清涼殿ノ辰巳ニ當ル所ノ官々ノ内ヲ尋ネ聞クニ、何ニモ音スル者无ケレハ、亦返リ參テ、八省ノ内ニハ不候ヌ由ヲ奏スルニ、然ラハ八省ノ外ヲ尚尋ネヨト、仰セ有ケレハ、

藏人忽ニ馬司ノ御馬ヲ召テ、藏人其レニ乘テ、吉祥ニ火ヲ燃サセテ前ニ立テ、人數具シテ、內裏ノ辰巳ニ當ル京中ヲ行テ普ク聞クニ、京中皆靜マリテ、敢テ人ノ音不爲ス、況ヤ女ノ泣ク音无シ、遂ニ九條堀河ノ邊ニ至ヌ、一ノ小家ノ有ルニ女ノ泣ク音有リ、藏人若シ此レヲ聞食ケルニ奇異ク思テ、藏人ハ其ノ小家ノ前ニ打立テ、吉祥ヲ以テ令走テ、京中皆靜マリテ、女ノ泣ク音无シ、但シ九條堀河ナル小家ニナム女ノ泣ク一人候フト奏シケレハ、卽チ吉祥返リ來テ、其ノ女ヲ慥ニ搦テ可將參シ、其ノ女ハ心ノ內ニ謀ノ心ヲ以テ泣ク也ト宣旨有ト云ヘハ、藏人女ヲ搦サスルニ、女ノ云ク、己カ家ハ穢氣也、今夜盜人入リ來テ、我カ夫既ニ被煞ニタリ、其ノ死タル夫家ノ內ニ未タ有ト云テ、音ヲ擧テ叫フ事无限シ、然レトモ宣旨有限リニ依テ、女ヲ搦テ內ニ將參ヌ、其ノ由ヲ奏スレハ、卽チ內裏ノ外ニシ檢非違使ヲ召テ、女ヲ給ヒテ、此ノ女大キナル僞有リ、而ルニ內ノ心ヲ隱シテ、外ニ泣キ悲ム事有リ、速ニ法ニ任テ勘問シテ、其ノ過ヲ可行シト、仰セ給ヒケレハ、檢非違使、女ヲ給ハリテ罷出ヌ、夜明テ此レヲ勘問スルニ、暫ハ不承伏サリケレトモ、責メテ問ケレハ、女落テ有ノママニ申ケリ、早ウ此ノ女ハ、密夫ト心ヲ合セテ、實ノ夫ヲ煞シテ也ケリ、態ト此レヲ歎キ悲ムト人ニ聞セカ爲ニ泣ケル女遂ニ否不隱サテシ落ニケレハ、檢非違使此ク聞テ、內ヘ參テ此ノ由ヲ奏シケレハ、天皇聞食シテ、然レコソ其ノ女ノ泣ツル音ハ、內ノ心ニ違タリト聞シカ、強ニ尋ヨトハ被仰シ也、其ノ密夫慥ニ尋ネ搦メトヨ仰給ケレハ、密夫ヲモ搦テ、女ト共ニ獄ニ被禁ニケリ、然レハ心惡シト見ム妻ニハ、心ヲ不免スマシキ也トソ、此レヲ聞見ル人皆云ケル、亦天皇ヲソ、尙只人ニモ不御マサリケル人貴ヒ申ケルト語リ傳ヘタルトヤ、

〔古事談〕一　王道后宮　延喜聖主、臨時奉幣之日、出御南殿、本自有風、把笏差欲拜之間、風彌猛、御屛風殆可顚倒、被仰云、穴見苦ノ風ヤ、奉拜神之時ニ、何有此風哉ト云々、卽刻風氣俄止云々、

〔西宮記〕臨時十　白馬列見事　延喜御宇、法(宇多)皇御遠所、以近衞將爲御訪使被奉向、

〔伊呂波字類抄〕六　付菩薩名號　諸寺　勸修寺○註略ス、

御願堂　五大尊等身綵色如意輪

件堂、奉爲延喜天子、母后(藤原胤子)、以外祖父宮內少輔宮道彌益所被造立也、

〔金峯神社文書〕金峯山創草記　○大和　一代々被送御震筆幷御經佛等事

醍醐天皇御自筆法華經奉送寶印井嶺御使長意、法花經八部奉納持金剛降(燈カ)井嶺御使石崎上人御自筆法華經奉納般若ハラ蜜井嶺御使聖寶

諸人天皇ノ御願ニ服ス　神拜ノ時暴風ヲ止メ給フ　父帝ノ遠所御幸ニ御訪使ヲ發セラル　母后ノ御願ニ爲ヲ建立セラル　震筆寫經ヲ金峯山ニ御奉納ル

藏人ノ機敏ヲ叡感アラセラル

神泉苑ノ鷺ニ宸筆ノ宣旨ヲ賜フトノ説

御衣ノ蠅ヲ御覽ジテ世ノ陵遲ヲ歎カセ給フ

僧正、

〔古事談〕五　神社佛寺　延喜御時、藏人失其名不參內居家、其母奇問之、藏人云、天氣常不快、母云、早可參內、我將祈鞍馬寺云々、藏人參拜主上、於大床子御座召御膳、於石壇庖丁、有大風燈消、此藏人歛甲折櫃、置燈於其內、三方風不能消、自此朝恩日新云々、

〔源平盛衰記〕十七　藏人取鷺事

延喜帝ノ御宇、神泉苑ニ行幸アリ、池ノ汀ニ鷺ノ居タリケルヲ叡覽有テ、藏人ヲ召テ、アノ鷺取テ參ト仰ケレハ、藏人取ラントテ近付寄ケレハ、鷺羽ツクロヒシテ既ニ立ントシケルヲ、宣旨ソ、鷺マカリタツナト申ケレハ、飛去事ナクシテ被取テ、御前ヘ參ケリ、叡覽アリテ仰ケルハ、勅ニ隨ヒ、飛去スシテ參ル條神妙也トテ、御宸筆ニテ鷺ノ羽ノ上ニ、汝鳥類ノ王タルヘシト遊ハシテ、札ヲ付テ放タレケレハ、宣旨蒙リタル鳥也トテ、人手ヲカクル事ナシ、其鳥備中國ニ飛至テ死ニケリ、鷺森トテ今ニアリ、

〔東齋隨筆〕鳥獸類　延喜聖主、御衣の上に蠅の一居たりけるを御覽して、仰られて云、世こそ無下に陵遲しにけれ、我運も亦末に成にけり、かくはなか

御歌人
御歌什

りしものをとなん、

〔二中歷〕十二　倭歌歷　拾遺抄歌人　延喜御製

〔勅撰作者部類〕自帝王至庶人之部　醍醐天皇諱敦仁、亭子院御子、

拾遺集夏一、雜戀一、　後撰集春中一、秋中一、戀二、御延喜製、

新古今集春下一、戀三、雜戀一、　續後撰集春中一、春下一、戀三、雜中一、賀一、　新勅撰集冬一、戀四、御製、

玉葉集冬一、賀一、戀二、戀四、御製、　續古今集春下一、秋上一、戀四、哀一、雜中一、御歌、

秋下一、　新後拾遺集戀三、　續後拾遺集戀四、　新千載集秋上一、戀二、　新拾遺集

新續古今集冬一、

〔古今和歌集隱名作者次第〕春上

おりつれは　延喜天皇

春下

いまもかも　延喜天皇御うた

夏

けさきなき　延喜天皇御うた

秋上

物ことに　延喜天皇御うた

しら雲に　延喜天皇御うた
みとりなる　延喜天皇御うた

戀一

かりこもの　延喜天皇御歌
春たては　延喜天皇御歌

戀五

山しろの　延喜御歌

東歌　いせうた

おふのうらに　延喜天皇御歌

〔續古今和歌集〕四秋歌上　藤壺の女御の前栽合の歌を判せさせ給ふとて
よませ給ひける、　延喜御歌

花の色は此方彼方に見ゆれとも秋の心はひとつなりけり

〔續古今和歌集〕十八雜歌中　亭子院より、世々をへてたえしとそ思ふといふ
御歌を奉らせ給ひたりける御返事に、　延喜御歌

末たえぬよし野の河の水上や妹背のやまの中を行くらむ

（藤壺女御ノ前栽合ノ歌ヲ判ジ給フ）（宇多法皇ト御贈答アラセラルル）

〔新千載和歌集〕十二戀歌二　女御に給はせける、　延喜御製

風吹けは岸のまに〳〵打寄する浪の間もなく思ほゆる哉

〔拾遺和歌集〕十九雜戀　延喜の御時、按察の御息所、久しく勘事にて御乳母に
つけてまゐらせける、

世中を常なき物と聞きしかとつらきことこそ久しかりけれ

御返し

つらきをは常なき物と思ひつゝ久しきことを頼みやはせぬ

〔新古今和歌集〕十五戀歌五　辨の更衣久しくまゐらさりけるに賜はせける、
延喜御歌

雲居なる雁たになきて來る秋になとかは人の音信もせぬ

〔萬代和歌集〕十一戀歌三　延喜御時、やしほの衣とおほせられて侍ける御か
へし　更衣源清子

紅のやしほはかりに染けれは色ともみえすうすきなりけり

〔新古今和歌集〕八哀傷歌　更衣の服にて參れりけるを見給ひて、

（御製ヲ女御ニ賜フ）（御製ヲ辨更衣ニ賜フ）（按察御息所ト御贈答アラセラルル）（更衣清子ト御贈答アラセラルル）（服ニテ參レルル更衣ニ御製ヲ賜フ）

女藏人ノ歌ヲ御覽ジテ詠マセ給フ

年ふれは斯もあり鳬墨染のこは思ふてふそれかあらぬか　延喜御歌

〔續後拾遺和歌集〕十四戀歌四　女藏人二條、數ならぬ我身を海の濱千鳥跡はかなくもおもほゆるかなとかきて御硯に入れて侍りけるを御覽せさせ給うて、　延喜御製

濱衙行くへも知らぬ跡なれや文つけつらむ知へたになき

密ニ御製ヲ童女ニ賜フ

〔大和物語〕下　（疑脱）先帝の御時に、あるみさうしに、きたなけなきわらはありけり、みかと御らむして、みそかにめしてけり、これを人にも云らせ給はて、ときく〳〵めしけり、さてのたまはせける、

あかてのみふれはなるへしあはぬよも逢夜も人を哀とそ思

信濃ニ赴ク人ニ御衣及ビ御製ヲ賜フ

との給はせけるを、わらはこゝちにもかきりなくあはれにおほえてけれは、忍ひあへて、友たちに、さなんのたまひしとかたりけれは、この主なる御息所きゝて、をひいて給けるものか、いみしう、

〔續古今和歌集〕九離別歌　信濃國に侍りける親の許へ罷り下りける人に、御衣を賜はすとて、　延喜御歌

御製ヲ諸臣ニ賜フ

故郷のもみちみにゆく旅人は錦をきてやひるはこゆらむ

〔續古今和歌集〕十四戀歌四　人にたまはせける、　延喜御歌

人ことの頼みかたさに難波なる葦の裏葉の恨みつるかな

人々ト御贈答アラセラルル

〔續後撰和歌集〕十二戀歌三　人にたまはせける、　延喜御製

世々を經て絶えしと思ふ吉野河なかれて落つる瀧の白糸

〔玉葉和歌集〕十二戀歌四　人にたまはせける、　延喜御製

秋風も吹立ちに鳬今よりはくる雁かねの小羽をこそ待て

〔新古今和歌集〕十四戀歌四　久しくまゐらさりける人に、　延喜御歌

霜さやく野邊の草葉にあらねともなとか人目の枯增る覽

御かへし　讀人志らす

淺茅生ふる野へやかるらむ山賤の垣ほの草は色も變らす

〔萬代和歌集〕十三戀歌五　延喜御時たてまつりける、

しのはるゝことをかたみにから衣たつやとぬるゝ袂なりけり　よみ人しらす

御かへし

から衣きてなくさめぬ人よりもいつれかつらきことの増らむ　延喜御製

〔菟玖波集〕九戀連歌上　女御のさうしよりかたちよき女のいてきて、物おもひすかたにてなくを御覽して、

なくを見るこそ悲しかりけれ　延喜御製

とおほせられけれは、

思ふらん心のうちは知らねとも　源公忠朝臣

〔二中歴〕十二詩人歴　帝王　延喜

御詩人

〔菅家後集〕見右丞相（菅原道眞）獻家集　御製

御製ノ詩

門風自古是儒林、今日文華皆盡金、唯詠一聯知氣味、況連三代飽清吟、琢磨寒玉聲々麗、裁制餘霞句々侵、更有菅家勝白樣、從茲拋却匣塵深、（平生所愛、白氏文集七十卷是也、今以菅家、不亦開帙、）

平生白氏文集ヲ御愛讀アラセラル

〔江吏部集〕中人倫部　近日蒙綸命、點文集七十卷、夫江家之爲江家、白樂天之恩也、故何者、延喜聖代、千古維時父子、共爲文集之侍讀、○中略　爰當今（條天皇）盛興延喜天曆之故事、匡衡獨爲文集之侍讀、

大江千古父子ニ白氏文集ヲ學バセラル

〔類聚句題抄〕春色伴花來　延喜御製

結託嬌容爲益者、合和喜氣豈香同、知音兼待遷喬鳥、媒介須憑解凍風、

梅近香入牖　醍醐御製

和雨洗時香更烈、暖風吹處氣□長、瑠璃扉薄雖相邀、翡翠簾疎又（亦イ）不妨、

〔和漢朗詠集〕上夏　蓮

緣何更覓吳山曲、便是吾君座下花、（亭子院法皇御賀、吳山千葉蓮華屏風詩、延喜御製、）

〔和漢兼作集〕一春部上　早春　醍醐天皇御製五八

風入室梅紅粉碎、雨催庭草翠煙鋪、

〔春記〕長暦三年十月廿八日、己酉天晴、督殿命云、故左大辨存日相語云、延木御日記廿卷、自故朝經卿息基房（經賴聟也）許、借取書寫了、件御記、絶世之記也、世間流布御記之中、不被記之事等、皆在此御記中、外人所不知其由也、又關白同不知給事也、一本書猶有畏、密々可書寫者、而忽々間、思而渉年之間、彼大辨薨逝

御著書御日記二十卷

了、而後家依少將緣、近來密々借送之、仍十一箇卷書寫了、而只今源圓、爲彼北方使來云、隆國卿、只今來向、稱關白命、欲運取文書等、其中有此御日記事、仍早可返給者、卽付源圓返進了、件事隆國謀略也、此御日記事、是執柄不知給之由、頭辨所語也、至于今無答、仍早返了者、只今少將云、件御記、去夜隆國不取運、此間早々可令書寫給者、卽遣取了、

廿九日、丙戌、天晴、督殿命云、彼延木御記、今朝廿卷持來、今明日可營書也、一卷可書者卽給預了、

延喜二年ヨリ延長七年ニ至ル

〔記錄異同考〕夕之部　醍醐天皇宸記一名延喜御記、歷代殘闕日記二、

延喜二年　三、五、
同　三年　正、六、
同　四年　正、二、閏三、四、八、十一
同　五年　正、四、
同　六年　正、二、六、十一、
同　七年　正、二、四、六、七、九、十一、
同　八年　正、二、四、五、
同　九年　二、十一、
同　十年　春、四、
同　十一年　十一、十二、
同　十二年　正、七、
同　十三年　正、十、十二、
同　十五年　四、十二、
同　十六年　正、七、八、十、十一、
同　十七年　春、四、
同　十八年　春、十、
同　十九年　正、二、四、八、九、十一
同　二十年　正、六、九、十二、
同　二十一年　正、
同　二十二年　三、
延長元年　正、三、七、八、十一
同　二年　三、四、

同　三年　正、五、九、冬、
同　四年　正、夏、七、八、十二、
同　五年　七、
同　六年　十二、
同　七年　正、

〔皇字沙汰文〕下　一内宮禰宜○中略申狀云、○中略如長寛二年勘文者、延喜御記中、有太神宮與豐受宮如君臣之文云々、

〔建内記〕永享十一年二月二日、庚辰依召參御前、御學問所、被預置淨花院御文書内、御記一合ッヽ、次第々々可被御覽也、以何先可被御覽哉之由被仰下之、延喜天暦御記以下、次第々々可有叡覽歟、○下略

〔禁祕抄〕上禁中事　一清涼殿○中略黑漆日記御厨子二脚、近代不納二代御記、只雜文書等、及女孺坏指油不可説次第也、

〔貫首祕抄〕執柄若職事、能知主上御作法、公事之條備顧問、或又幼若之主奉敎訓、仍○中略二代御記、○中略常可見之也、

〔台記別記〕久安四年七月十一日、丙申、今日乞入内、日記於人々、○中略

延喜天暦御記

二代御記

師安、二代御記、

〔玉藥〕嘉禎四年二月七日、癸未、前博陸云、○中略又日記御厨子被納二代御記以下、近代不見、自何比不被宿納哉、彼是持疑、後朱雀院代始之日、舊主被渡之目錄中所見分明也、又後三條院可有沙汰之由議定乎、○下略

〔花園院宸記〕正和二年九月廿五日、壬子、天晴、今日自新院給二代心(御カ)記幷抄、

〔大鏡〕一醍醐天皇　この御時そかし、むらかみか朱(ナ)雀院かむ(シヽ)まれおはしまし、たる御いかのもちゐる殿上にいたさせ給へるに、これひらの中將和謌つかうまつり給へるとそおほゆめる、

ひとゝせにこよひかそふる今よりはもゝとせまでの月かけを見(もカ)ん

とよむそかし、御かへし、みかとのしおはしましけんかたしけなさよ、

いはひつることたまならはもゝとせの後もつきせぬ月をこそ見め

御しうなと見給ふるにそ、いとなまめかしう、かやうのかたさへおはしまける、

宸筆ノ白氏文集

御集

〔醍醐天皇宸翰〕○京都御所東山御文庫所藏

陰合藤連架、○白氏文集、藤連架ヲ連藤架ニ作ル叢香近菊籬、壁宜藜杖倚、門稱萩○白氏文集、萩ニ作ル、

簾垂、窓裏風清、○白氏文集、風清ノ下、夜字アリ、簷間月更好時、流○白氏文集、流字ナシ、連留○白氏文集、留連ニ作ル、嘗酒客、勾引僧坐前僧、○白氏文集、前僧ニ作ル、

延喜聖主宸筆也、尤可貴重本也、（別雷）（伝見天皇）（御花押）

〔扶桑鐘銘集〕四追加　畿内部附録　醍醐山鐘銘在于喜多院守覺御記、

宸筆御製鐘銘

曉驚雪卯之老眠　夕役日沒之梵行

延喜帝御製　同御宸筆也、

宸筆ノ金泥法華經

〔慶延記〕三下　醍醐雜事記三

一三昧堂一宇朱雀院御願、三間四面、寶形造、檜皮葺、天歴二年三月廿日宣下、

延喜御本尊　聖觀音、十一面、如意輪、奉安置之、委在口傳、又阿彌陀三尊、同安置之、○略中

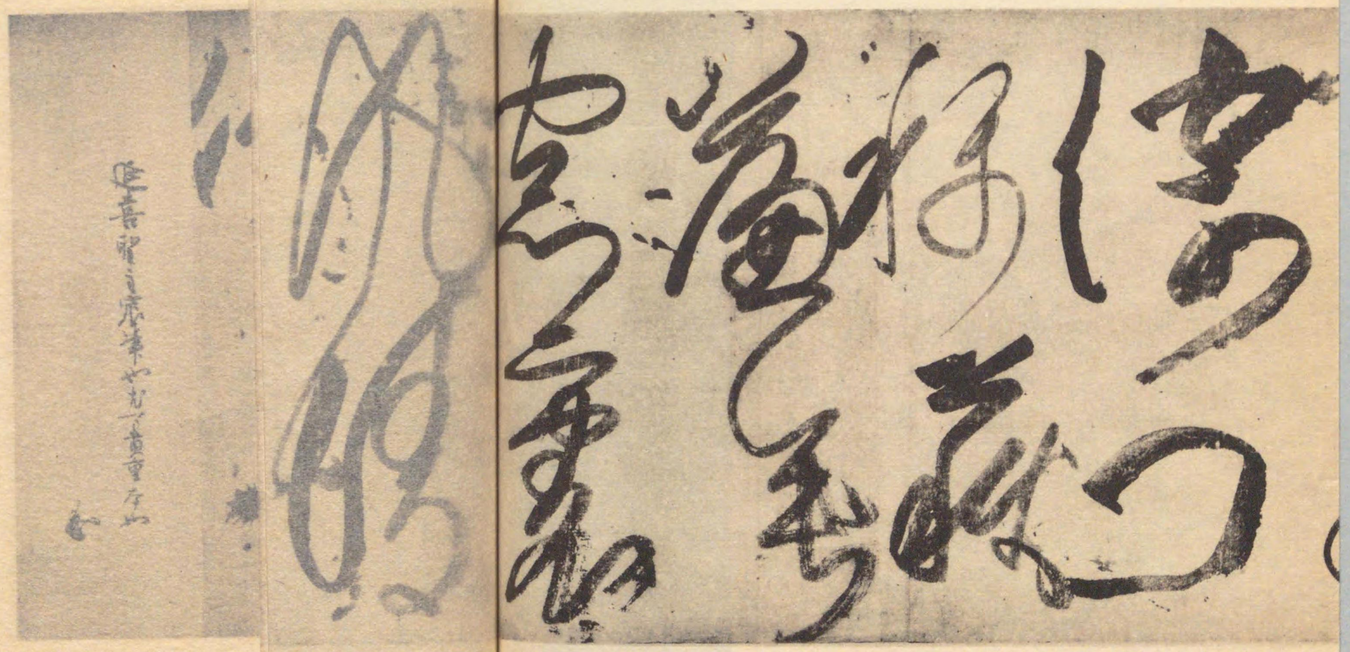
宸筆ノ繪詞

延喜帝御筆金泥法花經員四卷、又御持經法花經一部、道風自筆、同奉安置之、

〔源氏物語〕繪合　院にもかゝる事聞かせ給ひて、梅壺に御繪とも奉らせ給へり、年の内の節會ともの面白く興あるを、昔の上手とものとりとりに書けるに、延喜の手つから事の心書かせ給へるに、又我か御世の事も書かせ給へる卷に、かの齋宮の下り給ひし日の大極殿の儀式御心に考みてお

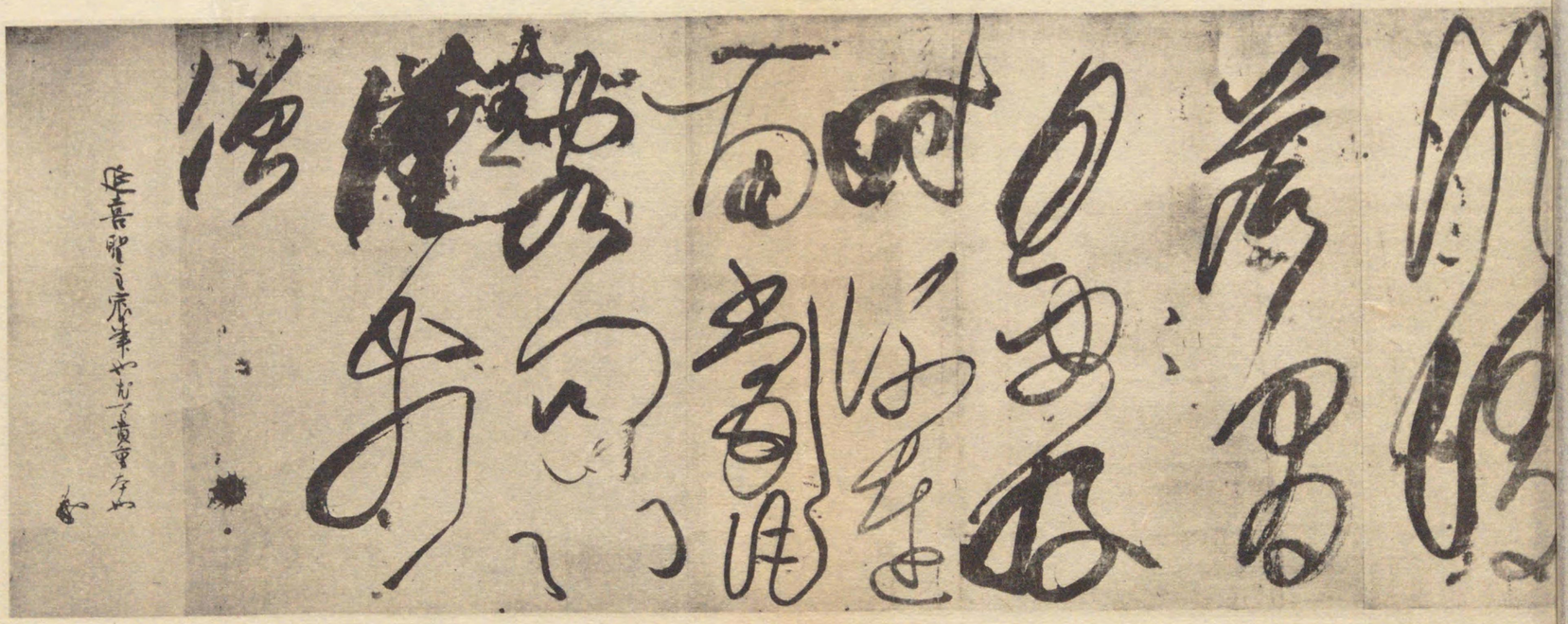
醍醐天皇宸翰白氏文集　京都御所東山御文庫御所藏

原寸　縦〇・三一八　横一・七七六



東京博文館印刷所謹製

東京寫眞印刷株式會社謹製



東京寫眞印刷社謹製

ほしけれは、書くへきやう委しく仰せられて、公茂か仕う奉れるかいとい
みしきを奉らせ給へり、

〔體源抄〕十一本下　帝王管絃御沙汰之事次第不同、

延喜琴、琵琶、　箏琵琶ヲ能シ給フ

〔西宮記〕臨時八藤花宴　臨時宴遊　天暦三四十二、於飛香舍有藤花宴、○中略召公
卿侍臣堪歌者、奏絲竹、大臣納言渡西、大臣取御杖、机イ源朝臣取御琴譜、藤原朝臣
又取杖、進御前奏云、延喜御時、御琴譜云々、　御琴譜

〔秦箏相承血脈〕　箏ノ御師ト御弟子

左大臣時平昭宣公男、號本院、母人康親王女、
醍醐天皇宇多皇子、延喜、母贈皇太后胤子、
皇太子保明號文彦太子、母穩子皇后、
重明親王式部卿、母大納言源昇女、
長明親王母更衣藤原淑姫、
雅明親王
兼明親王二品中務卿、元源氏、母同長明、

延長八年九月二十九日

御物ノ箏　秋風

山陵ニ納メ奉ル

勤子内親王　号女五宮、此内親王事歟、母更衣源周子、

伊勢　伊勢守繼蔭女、号伊勢更衣、依父受領号云々、

從三位博雅　醍醐孫、克明親王男、母左大臣時平女、

關白實頼　貞信公男、清慎公小野宮、母宇多天皇源氏、

〔體源抄〕八本上　箏系圖

醍醐天皇

清慎公　實頼、

〔拾芥抄〕上末　名物　樂器部三十五　箏

秋風　延喜聖主御箏也、崩御之後、籠山陵、

〔絲竹口傳〕箏名物

大螺鈿、小螺鈿、秋風、鹽竈也、秋風ハ延喜帝ノ御箏也、ヤカテ陵ニ籠ラレケリ、

○十月十日ノ條ニ引ク所ノ古今著聞集參看、師子丸ト云ハ小野宮殿ノ箏也、（藤原實頼）コノ箏ハ一代ヲヘタテヽナルト云フ、一代ハナラス、殊ニメテタクカサリタリ、シトヽメハ金ヲ入タリ、

〔體源抄〕八本上　愚聞記云、秋風ハ延喜ノ御箏也、ホウキヨノ時、同コレヲ

獅子丸　鬼丸

秋風ノ構造

和琴ノ御師ト御弟子

御物ノ琵琶　玄象　牧馬

ウツメラル、シラ（シカ）丸ハ同御箏也、コカヲノシトヽメ也、コウハ槻トカヤ申セトモ、不分明、鬼丸同御箏也、

〔樂家錄〕四十一　箏　音樂珍器　秋風　舊記曰、延喜帝御物也、此器崩御之時、被納之山陵也、槽雖以槻作之、不分明也、鵶目黄金也云々、

〔和琴血脈〕

貞保親王　清和御子、作案譜、

醍醐天皇

權中納言敦忠　從三位博雅　依朱雀院仰、又受敦實親王説、

重明親王

敦實親王

〔江談抄〕三　雜事　玄象牧馬本縁事

予問玄象牧馬、元者何時琵琶哉、答云、玄象牧馬者、延喜聖主御琵琶歟、件御時、（藤原實兼）（大江匡房）

琵琶上手玄上ト云モノアリ云々、予又問云、然者依件名令付歟、被命云、委不覺也、

〔禁祕抄〕上　禁中事　一玄上

玄象ハ藤原玄上ノ獻品

御物ノ箏篥皮古丸

累代寶物也、置中殿御厨子、根源樣人不知之、○略中或云、玄象呑青鉢之水、所謂號玄象、又玄上宰相獻延喜帝、仍號玄上、兩說也、但妙音院入道付玄上說歟、

〔續教訓抄〕十一上吹物部　第二篳篥○略中　同名物

海賊丸或海賊逃　鷽　眞野丸　皮古丸　筆丸○略中

名物等物語○略中

皮古丸ハ、延喜ノ御門ノ御時、唐ヨリ諸ノ重寶ヲ入テ奉ラレタリケル皮古ノ足ニ、立タル竹管ノヨキホトナリケレハ、取テ彫タリケル、最上ノモノナリケルナリ、當時ツタハリテ宇治ノ寶藏ニアリ、○略中

敦家、篳篥ヲ用光ニナラヒケルニ、臨調子ヲサツケヽリ、弟子光枝ハ、臨調子アリトイフ事ヲシラス、嘲リテ云ク、師ナカラ甚タ非常ノ人ナリ、篳篥ニハ、小調子ト云物ヲコソ、祕スル調子ニテハアレ、臨調子ト云モノハ、全クキカサルトコロナリ、新少將ニサツケムレウニ作出スナリト云ケリ、用光此事ヲ聞テ云ク、光枝ハ弟子ナリ、用光タトヒ狂トイフトモ、アナカチニアサケルヘカラストハカリ云テ止ニケリ、少將モ、時ノ人モ、用光カ作出スヨシヲ存シテ止ヌ、用光早世ノ後、年序ヲクリテノチ、六條內裏中院ニシテ御遊アリ、樂人多ク參會ス、光枝其中ニアリ、○略中新少將語テ云ク、先達ノ物ヲ祕スル、幽玄ノ事也、大般若ヲ讀ンタメニ、山僧ヲ請シ下シテ、轉經ノ間、數日止宿、面談ノ次ニ語テ云ク、先年ノ比、思カケヌ古物ノ中ヨリ、物語トモヲヱリイタシテ、無益ノ物タルニヨリテ、皆障子ノウラニハリ畢ヌ、其中ニ黃紙ノ書一卷コソ、ハラスシテヲキタレトイフ、取寄テミレハ、延喜ノ御時ノ篳篥ノ譜也、其中ニ臨調子ヲカキノスルトコロナリ、光枝コレヲ聞テ顏色ナシトイヘリ、先達ノ物ヲ祕スル、凡ソ其名字ヲタニモ、ヽラサヽリケルナリ、

御放鷹ヲ好マセラルヽ鷹ヲ鳥曹司ニ養ハル

名鷹白兄

〔嵯峨野物語〕一　いにしへ代々の御門、此道(放鷹)をこのましめ給き、○略中延喜御門は、又ことに御興行ありし也、鳥の曹司の鷹も、此時數十連つなきをかる、野行幸、延喜、延長數度ありき、

〔白鷹記〕抑上古の名鷹は、天智天皇の磐手野守、延喜聖主の白兄鷹、○略中等也、

〔寶物集〕醍醐ノ御門ノ御時モ御狩侍ケリ、白尾(兄カ)ト云御鷹ノ、夕日ノカカヤキケル程ナルニ、紺青色シタル雄ヲ取テ、鳳輦ノ御輿ノ上ニ居タリケルカ、面白カリケルナント申傳テ侍ヌレハ、貞信公ノ御犬飼ノ皮袴ノ下ニ、タウ(フ歟)

醍醐天皇御等身佛

後世延喜聖代ト稱ス

延喜聖主ト稱ヘ奉ル

延喜天曆等ノ先例ヲ重ンズ

藤原兼實ノ醍醐天皇評

政權分立ノ弊

慈鎮ノ醍醐天皇評

大寶以後ノ聖代ト稱ス

サキヲカキテ、桂川渡リニ高名スル、其日ノ事ニテソ有ケル、

〔慶延記〕四下 醍醐雜事記四　一中院地藏堂、本佛者、延喜御本尊等身像六躰也、仍二月八講之僧供奉曳之、

〔小右記〕長德三年六月廿五日、丁巳、○中略 偸見先例、以大將不越先任人、延喜聖代、定國大將、○下略

七月九日、丁卯、今日大臣召、○中略 延喜聖主、以定國大將、外舅、不被越國經、○中略 延喜聖代、以貞信公被抽任也、

〔水左記〕承曆四年九月九日、戊戌、未時許勘解由次官知綱、爲博陸御使來云、源氏爲長奉送使之事、仁和以往已無所見、就中延喜、天曆、一條院、後一條院御時之例、尤可信受也、

〔玉葉〕文治元年十二月廿七日、丙子、

醍醐帝者、雖我朝無双之聖代、以菅丞相事爲失、是則其權分二之故也、

〔愚管抄〕一皇帝年代記　醍醐六十○中略 コノ御トキ、彗星タヒ〳〵イテケレトモ、メテタク德政ヲ行ハレケレハ、事モナクテノミスキケルト申ツタヘタリ、大寶年號始マリテ後、タヽ此御時ヲノミアフクナルヘシ、北野ノ御事モ、權者ノ末代ノタメトテノ事ト心得ヌルウヘハ、イヨ〳〵メテタシ、

荻生徂徠ノ醍醐天皇評

伴蒿溪ノ醍醐天皇評

湯淺元禎ノ延喜天曆聖代評

藤原氏私ニ聖代ト稱ストノ說

中將更衣ノ傳

〔南留別志〕一延喜帝を聖人なりといふは、天子を尊める詞なりといふ事をしらで、延喜の聖代とかきたる文を誤り會したるなるべし、

〔閑田次筆〕二考古　又、延喜帝は寒夜に貧民の寒きに堪ざらんことをおぼし召て、御衣を脫せたまひしも、叡慮忝きことなるを、其貧民を救せ給ひし御政は聞えず、仁心おはしましても、仁政なくはかひなきことにや、もし此時に天下の政、聖意のまゝならざりし歟、おほつかなし、一のみこの御位につかせ給ざりしことをおもへば、其權執政家に歸したるゆゑ歟、寬平上皇、菅公を頻に登庸まし〳〵しも是がための叡慮と聞ゆ、

〔文會雜記〕三上　一日本ニテ延喜天曆ノ聖代ト云コト、其時ノ文人ノ云出シタルコトナルベシ、二代サセルヨキ政モナケレドモ、其時ナルホド帝室ノ文物ハ盛ナル故ナリ、獨リ文物ノミナラズ、藤氏ノ權ヲ得タルモ亦此時也、故此二代ヲ以テ盛世トスルハ、藤氏ノ私ニ諛フタル稱ナリ、

〔尊卑分脈〕藤氏眞作孫　○中將更衣ノ事蹟、便宜左ニ附載ス、

伊衡

女子（延喜更衣、歌人、高明公母、後撰集作者號少將御息所、少將御息所ト號ス）

〔皇胤系圖〕

醍醐天皇

源爲明（母參議藤伊衡女、刑部卿、正四下、源爲明ノ母、歌什）

〔勅撰作者部類〕女部　中將更衣（參議伊衡女）　後撰集（戀二、）

〔後撰和歌集〕（十戀歌二）　まかり出て御文遣したりければ、　中將更衣（伊衡女、）

今日過きはしなまし物を夢にても何處をはかと君かとはまし

御かへし　延喜御製

現にそとふへかりける夢とのみ惑ひし程や遙けかりけむ

〔新古今和歌集〕（十一戀歌一）　中將の更衣に遣しける、　延喜御歌

むらさきの色に心はあらねとも深くそ人を思ひそめつる

齋院韶子內親王、御退下アラセラル、

〔日本紀略〕（朱雀院）　九月其日、退賀茂齋院韶子內親王、

〔賀茂齋院記〕　韶子內親王　醍醐天皇第十三皇女也、母女御和子、光孝之女也、延喜二十一年二月二十五日卜定、（時四歲、）延長八年九月廿九日廢之、

○日本紀略、日ヲ闕ク、今賀茂齋院記ニ據リテ掲書ス、

十月 小 辛卯朔盡

一日、辛卯、夜、醍醐天皇御入棺、

〔西宮記〕十二 天皇崩事 臨時 ○己 前田家本 延長八、○中略（裏書） 吏部記云、○中略 十月一日、朱雀院於御在所西曹司、造御棺兩重云々、御輿長二人 右中將英明、左中辨淑光、奉仕御浴、供奉御服、綾冬直衣、綾袴、紅絹下襲等一襲、加御冠、烏犀革帶、鞋、襪及金平麿御劔、蘇芳枕、々劔是平生所御也、又錫紵一襲、河渡衣等也、宗城、洪仲連、維時推御棺云々、著服日、孝子、侍臣、皆不改夏服、卷纓云々、

〔明月記〕建久三年三月廿九日、今日於內裏源少納言云、延長例、九月廿九日崩御、十月、侍臣（一日脫カ）不改夏衣、皆卷纓、其夜御入棺者、

二日、壬辰、囚人ヲ放免ス、尋デ、飼鳥ヲ放タシム、

〔扶桑略記〕二十五 朱雀天皇 裏書 十月二日、見徒罪人、皆悉放免、人別給錢云々、左右衞門尉鑒之、

〔西宮記〕十二 天皇崩事 臨時 ○己 前田家本 延長八年十月三日、朱雀院、令藏人橘實利、從右近埒邊、放御鷹四聯、大二聯、鶴二聯、六日、令實利、於船岡邊、放先日所放之遺、御鷹二聯、鷹各一、鶴二聯、八日、令御厨子所預主殿允藤原國實、藏人所備前掾甘南雅道、放藏人所御鶴六十八（脫カ）率於淀河云々、

御棺ヲ二重ニ造ル　御浴ヲ奉仕ス　御服ハ侍臣皆夏服ヲ改メズ　卷纓　人別ニ錢ヲ給フ　鷹鶴各三聯ヲ放ツ　鶴六十八ヲ放ツ

大行皇帝御遺詔ニ依リ儉約ニ從フ百官素服　御葬裝束事始出御ノ後宮門ヲ閉ヅ　御素服ヲ著ケ給フ　侍從扈從大舍人內豎御輿ニ候ス　威儀御馬御穴內ニ地敷ヲ鋪ク　御棺ヲ陵中ニ安置ス　御硯倭琴等ヲ納ム　壙戸ヲ閉ヂ復土ス　山作所行事

十日、庚子、醍醐天皇ヲ山城宇治郡小野郷後山科山陵ニ葬リ奉ル、

〔日本紀略〕醍醐天皇 十月十日、庚子、奉葬大行皇帝（醍醐）於山城國宇治郡山科陵、醍醐寺北、笠取山西、小野寺下、依遺詔從儉約、

十一日、辛丑、辰刻御輿到山陵、百官素服、

〔扶桑略記〕二十五 朱雀天皇 裏書 同五日、乙未、於右兵衞府、有御葬裝束事始、十日、庚子、太上天皇（醍醐）、出右近衞府、奉葬醍醐寺邊山陵、出御之後、閉宮城諸門、但開陽明、朔富門、左大臣（忠平）及兩三諸卿候內裡、天皇及近侍者著素服、

〔西宮記〕十二 天皇崩事 臨時 ○己 前田家本 延長八年十月○中略 八日、○中略 法皇、令仰右大臣云、御葬依先志、可從薄儉之由、先日示了、今如聞、侍從可扈從、大舍人、內豎可候御輿、又威儀御馬可候云々、延長八十十一吏部記云、云々、御穴內鋪地敷等事、勘先例、侍臣所供奉也、其後復土事、臣等可奉仕之、導師呪願了、御輿長舁御棺、安置陵中、先是陵中安御硯、書、樂毅論、蘭亭集序、贏（マヽ）、等三卷、丹治 并色紙一筥、所召倭琴、笛等、內藏助義方（良望）倭琴、允是（マヽ）毗調箏、樂所預良名調琴、皆調平調倭琴律調之、皆安袋上、唯入袋 闔壙戸了、右衞門尉阿刀常基復土、先例用納言以上、而山作所行事中納言兼輔、治部卿當幹辭病、中宮

大夫伊望、彈正大弼公頼可奉仕、而不申故障竊逃、故常基奉仕、凡山陵事多闕禮、初穿陵地事、先例用四位、而大夫不奉仕、令役夫奉仕、開闔御墳事用木工頭、而辭病、故助常生奉仕之、初未遷御陵中之前、陵上設輕幄、闔墳戸、了建黄幡、々初安御輿小屋形中、仰木工作幡竿、勢祐法師建之、右中將英明朝臣、持幡端、先例孝子執之、而行事所、不令告知、故失之、是間左衞門尉時忠、右衞門尉成國、預御上物、於陵長地燒之、唐匣御膳、及御便具等也、又燒椰小屋形、須々利、大輿云々、上物辛櫃八合、扈從時在歩障後、御膳辛櫃二合、在歩障前、復土事了、徹(撤)喪庭内外墻門、廻刺柴垣、々外刺釘貫、依右大臣命、分配近邊諸寺、又淑光朝臣來孝子幕、右大臣問山陵事、答云、復土事、先塡石御穴戸、次埋土而後復土、大夫等可奉仕之云々、了淑光、英明朝臣、更奉仕復土、右少將中正、示右大臣云、山陵事了、啓陣候否如何、大臣宣返之、六衞皆同、英明朝臣、申大臣云、自宇多院有仰、召醍醐、勸修寺僧數口、候山陵、聟奉仕念佛云々、日入孝子等還、余於幄拜呪之、還往朱雀院西廊倚廬、繞施調布、幕内鋪葉疊之、十二日、山作所、於山陵立率都波(婆)三基之、是日、孝子等、聟脫商布衣、每七日著之、其間著鈍色布直衣、唯九親王源氏服獨衣、侍臣服之、而孝子著之失也、

〔西宮記〕十二臨時○己凶事天皇崩事○前田家本　延(寛)長吏部記云、天漸明、孝子等、著檜小笠、侍臣服裝

定方索帶ヲ著ス　親王檜小笠ヲ著ク　天明後燎ヲ滅セズ　左陣右陣前後ヲ警衞ス

商布帶、尋常冠、藁履、白杖、右大臣著索帶、甚○前田家大永本ハ作ル、親喪者也、[illegible]

〔西宮記〕十二臨時○己凶事天皇崩事○前田家本　延(寛)長吏部記云、天漸明、孝子等、著檜小笠、加商布帷云々、雖明不滅燎云々、

延長吏部記云、左近、左兵衞、左衞門陣、供奉御前、右陣在御後、近衞陣半傍歩障云云、服商布衣袴、

〔醍醐寺雜事記〕帝皇系圖云、延長八年○中略十月十日、葬山科山陵、儀隨約素、依遺詔也、

李部王記云、延長八年○中略十月十日、庚子、御葬送、私云、儀式繁多、抄之極略、堯孝子及右大(定方)臣、從御輿後、皆在行障内、御前僧四十口、在行障前、天台西塔院主仁照、奉仕御導師、基繼僧都、奉仕呪願、

十一日、天漸明、辰四刻、到醍醐寺北山陵、諸寺念佛僧、○念佛僧ノ三字、慶延記ヲ以テ補フ、八十六所、夾路設幕、撃鐘念佛、英明朝臣申右大臣、自宇多院有仰云、醍醐勸修寺僧、數召候山陵、奉仕念佛、并臣暫陪陵邊、行其事者、爰濟高律師、仁皎、元方、壹定法師候陵、三日奉仕念佛云々、

醍醐天皇崩事貞信公記、并淑光日記文、

御葬列　御導師仁照　呪願基繼　諸寺ノ念佛僧傍ニ奉送ス

明日曉天山陵ニ著御御倉ニ入レ奉ル

延長八年〇中略十月十日、庚子、亥四刻奉葬於醍醐寺北、笠取山西、〇中略一說云、十一日、寅二刻令著於山陵、同日、戌二刻奉入於御倉云々、

〔慶延記〕三下醍醐雜事記三　一醍醐天皇崩御事紀淑光記、

御壙ノ構造

延長八年〇中略十月十日、庚子、亥四刻奉葬於醍醐寺北笠取山西方、四面八十町、東西八町、南北十町、穴深九尺、方廣三丈、校倉高四尺三寸、縱廣各一丈、堯孝子及右大臣、從御輿後、皆在行障內、御前僧卌口、在行障前、天台西塔院主仁照、奉仕御導師、基繼僧都、奉仕呪願、諸寺念佛僧、八十六所、夾路設幕、擊鐘念佛、英明朝臣申右大臣、自宇多院有仰云、醍醐勸修寺僧、數召候山陵、奉仕念佛、幷臣甄陪陵邊、行其事者、爰濟高律師、仁皎、元方、壹定法師候陵、三日奉仕念佛云々、

校倉ヲ設ク

念佛僧

念佛僧、僧綱、齊高、會理、凡僧十八人、恩訓、貞崇、定慧、清祐、行譽、定助、定延、延性等也、十二日、山作所、於山陵立牽都波(婆)三基、〇中略

御陵四至

御陵四至

東南者、足形里卌六坪、西南者、下足形里卌五坪、東北者、椿市里十三坪、西北者、大鍬里十四坪、

已上南北十町　東西八町

〔醍醐寺要書〕上〇山城

御陵域八十町

彼御陵八十町者、東西八丁、南北十丁、定置、淑光日記文、

四角　巽、足形東里卌六坪、坤、同西里卌五坪、

艮、椿市西里十三坪、乾、大鍬里十四坪、

御在所上小野里十六坪

御在所者、上小野里十六坪用之、醍醐寺、勸修寺、願興寺、此之三箇寺中所安治、有其故事也、

延長八年十月十一日、辛丑、於山陵著之、

〔慶延記〕十三下醍醐雜事記十三　免除證文

一東安寺

太政官符治部省

應爲醍醐寺別院東安尼寺事

御陵ヲ小野郷字小野寺ニ定メラル

在山城國宇治郡小野郷字小野寺、

右得散位新良貞雄去年十月廿五日解偈、件寺、是貞雄先祖也、子孫相承、知

寺家務、申成定額、申官位司、代々相傳來、於今月十日、先帝山陵被安斯地、○中略

承平元年五月七日

〔古今著聞集〕十三哀傷　延長八年九月廿九日、延喜聖主崩御、十月十一日、醍醐寺北山陵にわたし奉りけるに、御硯、御書三卷、黑漆筥一合、琴、青眼、秋風、吏部王記には風聲と注せられたり、和琴、中宮弘徽殿御賀に獻ぜられけるに、御笛など入られけり、內藏介良峯義方和琴をゑらふ、樂所預丹治良名琴をしらふ、みな平調にしらへけり、和琴をは律調にそしらへたりける、今は土にこそなり侍ぬらめ、あはれ成事也、

御物ヲ御棺ニ斂ム

〔台記〕久壽二年十二月十七日、庚寅、○中略傳聞、今夜亥刻、高陽院入棺、○中略後日勘延長八年李部王記、無前火、依此故、知土葬無前火、後通語曰、於福勝院有上物事、御車同燒、後日勘延長八年李部王記、有上物、若據彼例歟、尤可然、但彼例、御物或燒、或納陵中、而今日皆燒云々、如何、

御土葬ノ時前火ナシ　御車ヲ燒ク　御物或ハ燒キ或ハ陵中ニ納ム

〔中右記〕嘉承二年七月廿四日、戊申、○前例槨ハ入御輿也、而今度乍安置御□（棺カ）於槨、奉置貴所、違例也、槨ハ本置御輿中、舁出御棺之時ハ、槨留於御輿、爲擧御棺ヲ舁出ス時槨ヲ御輿ニ留ム

物之由、見彼延長八年重明御子記云々、

〔政事要略〕二十九年中行事二十二月下荷前事　醍醐山陵、號後山階、寄陵戶五烟、傜丁廿五人、

後山階陵ト號スル陵戶五烟傜丁二十五人

〔江次第〕十一荷前事　十二月　後山階納言以下、此使或兼宇治三所、人數四人時、延喜天皇在醍醐寺北、路或（頒カ）自北山階車、或踰阿彌陀嶺乘馬、曼羅（陀脫カ）寺艮角也、

御陵所在

〔拾芥抄〕下本十陵　十陵部三　後山階醍醐天皇在醍醐寺北、曼陀羅堂丑寅、○後山階山陵ニ荷前ヲ奉ルコト、十二月九日ノ條ニ見ユ、

〔參考〕

〔雍州府志〕十宇治郡陵墓門　醍醐天皇陵　在醍醐山東北麓、天皇慕外祖父母宮道彌益夫婦之所出、故依遺勅、而築陵於茲處云、

遺勅ニ依リ御陵ヲ醍醐山東北ニ築ク

〔山州名跡志〕十四宇治郡　醍醐天皇陵　在同（醍醐）所北、人家東、去一町餘平林中、是延喜帝の陵なり、江次第曰、醍醐天皇陵、在醍醐寺北、曼荼羅寺艮云々、卽此所也、記曰、天皇諱敦仁、宇多帝第一子、人皇六十代主上、在位三十三年、延長八年九月二十九日崩、御年四十六、十月十日、庚子、亥四刻奉葬於醍醐寺北、笠取山西方ニ葬リ奉ル

笠取山ノ西方ニ葬リ奉ル

西方、四面八十町、穴深九尺、方廣三丈、校倉高四尺三寸、縦横各一丈、一説云、十一日、寅二刻、令著於山陵、同日戌二刻、奉入於御倉、貞信公記幷淑光卿日記、

〔山陵志〕二　醍醐陵　在醍醐寺北、笠取山西、略八記、貞信公記、十町、穴深、貞信公記云、四五尺、方三尺、校倉高四尺三寸、縦横各一丈、校倉蓋其爲兆域、則似甚廣、恐乃八町、而衍十字也、蓋其壙中所藏、而安梓宮者四面八十町、是擬北山陵、故小野寺地也、略記、江次第、以陵所爲曰曼陀羅寺也、更據眞言傳、仁海僧正建曼陀羅寺于小野、併觀之、所謂小野寺、卽曼陀羅寺是也、以山其寺中、故要記、永正年代記、竝稱小野帝也、是爲後山科陵、拾芥抄、山槐記、按今陵地平坦、草莽穢蕪、然而從檢之、固非墾傷而然也、蓋嘗塔其上、而塔爲兵亂之間所除去歟、

〔山陵圖誌〕六十代醍醐帝　山城國宇治郡醍醐村三寶院寺領之内畑中之森ニ而、惣廻リ堀切有之、先年被仰付候竹垣損シ無之候、

〔山陵考〕三　後山階陵　醍醐天皇の御陵なり、山城國宇治郡山科郷醍醐村北の畑中笠取山の西のかた、小野隨心院曼陀羅堂の東方にあり、字を御陵とよふ、山形なく、たゝ平地に圓く小隍を廻らして圍ひたり、その廻り五十丈許あり、木立生茂りていと神さひたり、醍醐寺雜事記に、貞信公記幷淑光日記文として引載たる

醍醐村三寶院領内畑中ノ森ニ在リ

小野隨心院曼陀羅堂ノ東方

を見るに、延長八年十月十日、庚子、亥四尅奉葬於醍醐寺北笠取山西方、四面八十町、南北十町、穴深九尺、方廣三丈、校倉高四尺三寸、縦横各一丈、一説云云々、同日、戌二尅奉入於御倉云々とみえて、此御葬は陵山を作らず、平地に穴を掘り、その内に校倉を置き、その倉内に御棺を納奉り給ひたりし趣知られ、その陵上の御表には、卒都婆を三基立置給ひたりしこと、同雜事記に引載たる李部王記の文にて知られたれは、秀實(備生)か山陵志に云へる如く、陵山を墾傷(アバキクツ)して、かく平坦になれるにあらす、儉約の御遺詔にて、もとより丘陵の形は、築立給はさりしにそありけむ、又その御表の卒都婆は、石にてありしなるへけれと、何の年頃失たるにか、今はたゝ木立の外に物も無し、さてこのめくりの隍は、承平元年十一月に、左衞門尉源添に仰せて掘しめ給ひしこと、類聚符宣抄の宣旨に見えたれは、御葬の翌年に成たる隍なり、

〔諸陵要記〕十　醍醐天皇後山階陵　按、今山城國宇治郡醍醐村大字醍醐の村落の北、勸修寺の巽の方にありて、字を御陵といふ、山のかたちなく、平地に圓く小隍を回らしたり、是醍醐寺雜事記に、貞信公記竝淑光日記文と

元ヨリ丘陵ノ形ハ築カズトノ説

字御陵

て引載たる、延長八年十月十日、○中略、前掲ノ山陵考所收ト同ジ、とみえたるを以ておもへは、陵山を作らす、平地に穴を掘り、その内に校倉を置き、その倉内に御棺を納奉り給ひしなるへし、又陵上に卒都婆を三基立置れしこと、同雜事記に引載たる李部王記の文、延長八年十月十日、庚子、御葬送、本云、儀式繁多、抄出極略、堯孝子及右大臣、從御輿後、皆在行障内、御前僧卌口、在行障前、天台西塔院主仁照、奉仕御導師、基繼僧都、奉仕呪願、十一日、大漸明、辰四剋到醍醐寺北山陵、諸寺八十六所、夾路設幕、撃鐘念佛、十二日、山作所、於山陵立卒都婆三基とあるにて知られたり、玄かるに、その御表の卒都婆、何の頃失たるにか、今はその跡たになし、さて小隍のめくりたるは、類聚符宣抄の宣旨に見えたる、承平元年十一月に、左衞門權少尉源添に仰て、掘らしめ給ひたる趣にてあきらかなり、かくて此御陵につきては、他に異論もなく、あきらかに知られたれは、今猶いふへきかことさらになし、

今案都婆ナシ

後ニ小隍ヲ設ク

〔陵墓一覽〕醍醐天皇陵　京都府山城國宇治郡醍醐村

〔歷朝山陵圖〕○宮内省圖書寮所藏圖　醍醐天皇　後山科陵

○歴朝廟陵考、歴帝陵考、山城名勝志、山陵考、山陵記、陵圖記、御室志、陵墓一隅抄等、異事ナキヲ以テ略ス、

講師基高ハ平舜死殁ノ替

興福寺維摩會、

〔維摩會講師研學堅義次第〕八年、庚寅、講師基高年六十八、薦五十、（延長）（延長）（宋書）「去年十二月十六日宣」縣氏、大和國宇陀郡人、興昭僧都弟子、傳法院基繼僧都弟子、平舜十年七五、法相宗、興福寺、薦冊七、宗、東大寺、三論、蒙講師宣旨、其後死去、仍其替被請補基高云々、研學延珍年四十、薦廿三、

〔三會定一記〕一　同八年、去年十二月十六日　講師基高六十八、興福寺、法相宗、　堅義四十延珍、　次常圓、

其儀初七日ノ如シ

十二日、壬寅、醍醐天皇ノ御爲ニ、二七日ノ御諷誦ヲ修セラル、

〔醍醐寺雜事記〕李部王記云、延長八年○中略十月○中略十二日、○中略是日、公家修御二七日諷誦、如初七日云々、

十三日、癸卯、左大臣忠平、上表シテ攝政ヲ辭ス、

〔公卿補任〕四　攝政正二位藤忠平、五十一、十月十三日辭攝政、

〔本朝文粹〕四　表上　攝政關白辭職表　爲貞信公（忠平）、辭攝政第一表、　後江相公（朝綱）

第一表　作者大江朝綱

臣忠平言、伏奉去月廿二日先帝讓位詔命、陛下未親萬機之間、臣某保輔聖躬、攝行政事者、寵溢身涯、聽出意外、反覆思之、知其非任、臣某中謝、臣初蒙綸言、即錄辭表、未能悃懷之入參漏、忽逢晏駕之赴九泉、鼎湖悲深、山陵事急、跼蹐流汗、自〔過〕浹辰、臣孕非空桑、器是鑄（壽カ）木、猥以萎朘之身、謬承崇重之寄、譬猶拂跛鼈之首、戴以蓬萊之山、褰焦僥之裳、涉其渤澥之海、弱質難學毫毛、何勝雲巖之萬仞、短脛不滿尺寸、還迷花浪之千里、臣已自知、況於物議、謹檢史冊、少帝繼體、太后臨朝、訪舊風於漢家、和熹之蹤不墜、尋故實於晉室、崇德之制已明、伏願陛下停此攝籙、依彼前脩、早思宗社安全之謀、莫遺微臣亢滿之悔、不任憂國之至情、謹奉表、陳讓以聞、臣某誠惶誠恐、頓首頓首、死罪死罪、謹言、

延長八年十月十三日　左大臣正二位兼行左近衛大將藤原朝臣上表

勅使實賴ヲシテ第一表ヲ返

十六日、丙午、左大臣忠平、再ビ上表シテ、攝政ヲ辭ス、

〔公卿補任〕四　攝政正二位藤忠平、五十一、同十月十六日、重上表、第二度、

〔本朝文粹〕四　表上　攝政關白辭職表　爲貞信公（忠平）、辭攝政第二表、　後江相公（朝綱）

第二表

臣忠平言、中使左（右）近衛中將從四位下藤原朝臣實賴、至臣第返臣章、丹魂所祈、

サシム

陵邊ノ庵ニ二僧ヲ住セシム

盡於前表、白日不照、改以何詞、臣某中謝、臣聞、君猶天也、死生無逃命之義、臣是水也、方圓有隨器之誠、然而分(脱カ)過涯、盈而易溢、身不足用、進而難堪、以臣謂之、不其然乎、臣無才無藝、非舊非勳、應對易迷、汗浹於周勃之背、陰陽難理、牛喘於邴吉之前、況當四海改觀之朝、荷百官揔己之任、尋古思今、心迷魂慄、昔周公旦之大聖、未免流言、霍子孟之英雄、難避謗議、或親或賢、招咎如此、雖慎雖畏、塞責若何、猶以社稷之重、强託庸昧之質、於公危多、爲私辱至、不啻思微臣忘身之憂、兼恐損先帝知人之德、伏願陛下曲賜允容、指北辰而抽肝、非東里之潤色、無勝悾欵屏營之至、謹奉表、陳請以聞、臣某誠惶誠恐、頓首頓首、死罪死罪、謹言、

延長八年十月十六日　左大臣正二位兼行左近衛大將藤原朝臣某上表

十八日、戊申、醍醐、太上天皇ノ御爲メニ、醍醐、勸修兩寺ノ僧ヲシテ、念佛ヲ奉仕セシメラル、

〔醍醐寺雜事記〕李部王記云、延長八年略○中十月○略中十八日、是夕法(字多)皇命英明朝臣曰、候朱雀院之念佛僧中、醍醐、勸修兩寺僧、願於本寺近山陵之所、奉仕念佛者、可從所請、又募兩寺沙彌二人、陵邊庵住侶(居カ)、數年移給度者云々、

十九日、配左大臣忠平、更ニ上表シテ、攝政ヲ辭ス、尋デ、勅答ヲ賜フ、

勅使伊衡忠平ノ第ニ至リテ口勅ヲ宣ス

良房基經並ニ攝政ト爲ル

〔公卿補任〕四　攝政正二位藤原忠平、五十一、同(十月)十九日重上表、第三度、

〔本朝文粹〕四表上　攝政關白辭職表　爲貞(忠平)信公、辭攝政第三表、　後江(朝綱)相公

臣某言、頃者上表、再抽中懷、去十六日、左近衛權中將從四位下藤原朝臣伊衡至、奉宣口勅、抑遏臣請、乘膠船而泛疊浪、馭朽索而奔險途、周章之心、商略不足、臣某謝、中伏惟、思切者、觸緒之趣揔深、事急者、發言之旨皆懇、臣謹訪故實、貞觀初忠仁(藤原良房)公、元慶間昭宣(藤原基經)公、保輔幼主、攝行政事、親賢兼茂、才德具高、或追蹤於伊尹、以其君不及堯舜爲慙、或合契於夷吾、以其化不如皐陶作恨、一人待彼雅訓、四海推爲當仁、如臣者、擔重寄於微身、負大任於小材、性之少知、動而多過、已覺階天之難及、兼恐控地之易疲、思國顧身、一夜九歎、又范蠡收責、棹扁舟而逃名、謝安辭功、鞭孤雲而養志、是皆擺寵光於既盛、愼禍胎於未萌者也、人心不同、臣願頗異、何則稅重載於頹輪、免其覆駕之悔、忘再實於散木、除以傷根之憂、暫全暗質、拜聖日初昇之光、更洗愚心、欽明時中興之化也、伏乞鴻慈殊賜哀許、得令臣待罪於止足之下、莫令臣招謗於鎖骨之中、蒼天白日、照此血誠、無任誠懼之至、謹重表以聞、臣某誠兢誠惕、頓首頓首、死罪死罪、謹言、

勅答

名ハ君臣タレドモ志ハ父子ノ如シ

第一二度ハ口勅ニテ返シ給フ

納言ヲ勅使トス

延長八年十月(十)九日　左大臣正二位兼行左近衛大將藤原朝臣上表

〔本朝文粹〕二　勅答　答貞信公辭攝政表勅、　後江相公

勅、省重表、具冲挹之懷、公風神深凝、德宇高聳、近取諸身、則四目之左眼、遠喻於國、則萬里之長城、故先皇寄以朕躬、付以朝政、旣親亦賢、物無異望、況公之於朕也、名爲君臣、志如父子、何嫌何疑、以謙以拒、方今酷罰之身、少未有識、雖聞三讓之高古、猶恨百揆之擁今、上思先帝把臂之託、下知少子抱頸之情、凡厥攝行、一如前詔、縱瀝方赤於公口、何下雌黃於朕脣、悉之耳、

延長八年十月二十日

〔北山抄〕六　勅答事　備忘略記　王卿上表之時、可返給者、新任大臣、第一二度、以口勅返給、第三度有勅答、攝政關白、每度給(有ヲ)勅答、但最初上表、如新任大臣、延長八年略○中例也、○中略

以納言遣勅答、延長八年、攝政上表之時、又略○中有此例、但給本表也、

○忠平、更ニ上表シテ攝政ヲ辭スルコト、承平元年二月二十六日ノ條ニ見ユ、

二十五日、乙卯、法皇、醍醐天皇ノ御爲メ、七箇寺ニ御諷誦ヲ修セラル、

〔醍醐寺雜事記〕李部王記云、延長八年略○中十月略○中廿五日、法皇(寛聞)奉爲先帝

御布施各差アリ御夢想ニ依ル

御拔苦得道、於七个寺修諷誦、天台東塔、調布百五十段、西塔百段、東西寺各五十段、醍醐、勸修寺、及小野寺各卌段、蓋依夢想也、

平座

十一月大庚申朔盡

二日辛酉、擬侍從等ヲ定ム、

〔北山抄〕五 即位事　延長八年十一月二日定擬侍從等、

五日甲子、代始ニ依リテ、官政及ビ外記政ヲ行フ、是日、太政官ノ朝所ニ於テ、十一月視告朔文ヲ進メシム、

〔西宮記〕十二 外記平座政　臨時己 凶事 ○前田家本　延(裏書)長八十一五、太政官、外記局等、初申政事、去床子就平座、内外諸司又如之、又今日官朝廳、令諸司進十二月告朔文云々、

中六條院燒亡ス、

〔日本紀略〕朱雀院　十一月五日、中六條院火災、

〔扶桑略記〕二十五 朱雀天皇 裏書　十一月五日、甲子、午刻太(宇多)上法皇宮中六條院、掃地燒亡、

八日丁卯、諸司諸衞ヲ召シテ、二十一日御即位ノ由ヲ仰ス、

〔北山抄〕五 即位事　延長八年十一月(カ)○略 中八日、外記承左(忠平)大臣宣、召諸司諸衞、仰今月廿八日御即位之由、

十四日癸酉、御即位ノ由ヲ伊勢大神宮ニ告グ、

〔西宮記〕臨時 ○前田家本 御即位 永鈔本　同月十四日(延長八年十一月)貞公御記云、左中辨來云、院(宇多)御消息云、齋(柔子)王明年入京云々、即位之由、告伊勢大神宮、但不奉幣、

○齋宮柔子内親王御退下アラセラルヽコト、十二月是月ノ條ニ、御即位ニ依リテ、大神宮及ビ諸社ニ奉幣スルコト、承平元年三月二十四日ノ條ニ見ユ、

十五日甲戌、中宮、醍醐天皇御七七日ノ法會ヲ醍醐寺ニ修セラル、

〔日本紀略〕醍醐天皇　十一月十五日、中宮(藤原穩子)奉爲先皇(醍醐)、被修中陰齋會、

〔醍醐寺雜事記〕李部王記云、延長八年十一月十五日、皇(穩子)后奉爲先帝御七々日、於醍醐寺設法會、公家仰所司、准御齋會供奉之、傳聞、其儀造白銀阿彌陀佛像、加光及座一尺許、有平文佛殿、寫紺紙金泥、水精軸法華經、有金銀平文經櫃、又有平文花机、又行香散花等具、請七僧、講師尊意、讀師貞崇、呪願基繼、三禮仁照、唄基增、天台、散花濟春、堂達延賀、施法服、三僧紫袈裟、四僧櫨袈裟、講訖又請入堂百僧、

中宮御諷誦、調布五百端、佐士、内親王信濃布百端、同男親王調布百端、左大臣調布百端、公卿以下辨七僧粥齋、講師大納言、讀師左衞門督保忠、呪願左大散花中宮大夫伊望朝臣、三禮左大辨邦幹(基)朝臣、唄右大辨時望朝臣、堂達中宮亮藤原元方朝臣、講讀師乘輿加白蓋、所司導從皆如御齋會、請僧有

布施

布施云々、七僧未入堂之前、加法服施之、

〔西宮記〕臨時御即位○前田家大永鈔本　同月（延長八年十一月）十四日、貞公御記云、○中略中宮於醍醐寺有御態、

〔西宮記〕十二皇后崩臨時己酉事○前田家本　天（寛書）暦八年正月十三日九記云、蒙召參入、左大臣（藤原實頼）同參入著陣座、定奏大后七々日御齋會行事、八々著素服、把笏帶劔參入、而左大臣、著劔不取笏、（明イ）聞其由、是延長八年例也云々、

忠平帶劔笏ヲ取ラズ

〔參語集〕三佛事次第　仁明天皇ノ御時マテハ、崩御ノ後、中陰ノ御佛事ト云事ナシ、只七大寺、十五大寺ニテ御誦經ヲ被行ル、延喜ノ奉爲ニ、醍醐寺ニテ、御子式部卿親王重明、又云李部王、容儀才學天下ニナラフタメシナシ、誦經ヲ行給フ、御布施等ヲ唐櫃ニ納レテ、堂前ニ被安置、是極信ノ作法也、

仁明天皇以前中陰ノ御佛事ナシ

重明親王誦經ヲ行ハル

史生ヲシテ、内記所ニ直セシム、

〔類聚符宣抄〕十内記所可賜上日人々　被左大臣（忠平）宣偈、史生佐伯音行、令書位記間、宜令直内記所者、　延長八年十一月十五日　大外記伴宿禰久永奉

史生位記ヲ書ス

十六日、乙亥除目、

〔公卿補任〕四　參議正四位下藤邦基　左大辨、十月十六日兼民部卿、元、辨如

〔公卿補任〕五承平四年　參議正四位下藤伊衡、五十九、同（延長）八十一十六兼内藏頭、

〔公卿補任〕五天暦元年　參議從四位下小野好古、六十四、同（延長）八十一十六右衞門權佐、

十八日、丁丑、使ヲ六陵二墓ニ遣シテ、二十一日卽位ノ由ヲ告ゲシム、

〔北山抄〕五先山陵告卽位由事　延長八年十一月十八日（六イ）、發使、告山陵以廿一日可卽位由、陵六所、山階（天智）、嵯峨、深草（仁明）、柏原（桓武）、田邑（光孝）、後山階（醍醐）、墓二所、堀川太政大臣（基經）、後贈太政大臣等也、

藏人ヲ補ス、

〔職事補任〕朱雀院五位藏人　右少辨從五位下源公忠　延長八十一十八補、先朝藏人、○三十六人歌仙傳同ジ、

侍　從從五位下藤朝忠　同日補、○公卿補任、三十六人歌仙傳同ジ、

十九日、戊寅、諒闇ニ依リテ、鎭魂祭ヲ停ム、

〔西宮記〕六○前田家本十一月中寅御鎭魂　延長八年諒闇、无鎭魂、

〔北山抄〕二年中要抄下中寅日鎭魂祭事　十一月　諒闇年停否例、延長八年不行、

〔師遠年中行事〕（盛書）十一月中寅日、鎭魂祭事、○中略諒闇年行之、天暦八、康保四例

也、無倭舞、遣白御衣、但延長八年不行之、〇年中行事秘抄同ジ、

二十日、己卯、諸衞召仰、

〔北山抄〕即位事　延長八年十一月〇中略廿日、諸衞召仰如常、

二十一日、庚辰、大極殿ニ於テ、御即位アラセラル、

〔日本紀略〕朱雀院　十一月廿一日、天皇即位於大極殿、〇一代要記同ジ、

〔天祚禮祀職掌錄〕登壇即位事

朱雀天皇　延長八年十一月廿一日即位、大極殿、

官方藏人方　奉行　官方左中辨紀淑光、藏人方頭左中將藤原實賴朝臣、

內辨　右大臣右近大將藤原朝臣定方公、

外辨　三品貞眞親王

宣命

中納言右衞門督藤原恆佐卿

參議彈正大弼橘公賴朝臣

治部卿藤原當幹朝臣

右大辨平時望朝臣

左侍從　左侍從四品元平親王

右侍從　右京大夫從四位下源庶明

少納言從五位上良峯遠視

右侍從四品元長親王

前攝津守從四位下藤原忠文

少納言代右馬助藤原近光

典儀　少納言從五位下源興平

大將代

褒帳　左研子女王故兵部卿(兼)明親王女

右明子女王兵部卿元良親王女、〇京都御所東山御文庫御所藏即位職掌部類鈔ヲ以テ補正ス、

〔西宮記〕臨時御即位〇前田家大永鈔本　吏部記云、延長八年十一月廿二日、今上即位、

即位ノ儀ニ朝賀ノ如シ高御座ノ西ニ皇后ノ御座ノ設ク

其儀、所司供設、一如朝賀禮、唯高座西幄內、設皇后平鋪御座、左右後施屏風、前幔內立几帳、東幔內設攝政大臣座、又平敷天皇出御間、大臣於此座披式校禮、小安殿中戶西設御座、用大床子、施屏風、戶東設皇后御座、平敷施屏風、巳一點、天子與皇后同輿、御小安殿垂帷、云々、次御高座、右兵衞佐師輔奉抱之、皇后服鈍色畫裝、御

式ヲ披キ禮ヲ校ス皇后ト御同乘アラセラル

御座云々、事了還宮、左大臣於殿上侍、召王卿賜飲、入夜仰內藏寮、侍臣疋絹、左右大臣賜白大褂、是夜聽右大臣昇殿云々、（定方）

定方ニ昇殿ヲ聽ス

〔北山抄〕五　即位事　禮服不具、不候列之王卿、或依召參入、供奉行幸、候御後、○中略

忠平御後ニ候ス

同八年、太政（忠平）大臣候御後、（延長）

大極殿前庭ノ鋪設

〔北山抄〕五　裝束　即位事　延長八年（朱雀即位）圖、○註略ス、宣命位南去一丈、東折一丈三尺、立位記ノ案ヲ立ツ

親王位記案、南去一丈、（三尺イ）三位以上案、南去一丈五位以上案、（兵部五位以上案對之、）位記案南去二丈、東折二丈八尺、置親王行立版、南去大臣版、南去大納言版、南去中納言版、南去參議版、南去王四位五位版、南去臣四位版、南去五位版三、南去六位版二、七位版二、八位版三、初位版二、無位版二、（各以一丈二尺（六イ）爲間、）右親王版、又相對、非參議一位二位版、對大臣版、非參議三位版、對大納言版、王四位五位、臣四位以下版、各相對、位記案東去七尺南去二丈、當親王行立位、置擬敍親王版、當大臣位、置一位版、當大納言位、置二位三位版、當參議位、置王四位五位版、當王四位五位位、置臣四位版、當臣四位位、置五位版、當五位第二位、置六位版、（重行、兵部四位五位六位版、各相對、）

版位ヲ置ク

寛平九年ノ日記無キニ依リ

式部記文云、依無寛平九年日記、計便宜立標、左衞門督保忠卿、左中辨淑光、大外記、久永、左大史春蔭等檢盤云、新敍行立標、甚有便宜、以此可爲永例者、但親王以下行立標、相去東西各二丈五尺、是敍人標相比之故也、

便宜ニ標ヲ立ツ

〔北山抄〕五　裝束　即位事　延長八年、設攝政大臣座於西幔後、

攝政大臣ノ座

〔小右記〕長和五年二月七日、（壬午、）○中略今日御即位、○中略寄鳳輿于小安殿、○註略ス、內侍二人執御劒、璽筥等、天皇先降輿、左大將警蹕、○中略（延長外記々云、稱警蹕、）○中略天皇○中略著御高座、○中略左侍從昭通（登）親王進御前、稱禮了退本位、次奉翳垂帳、諸仗稱蹕、

鳳輿ヲ降リ給フ時警蹕ヲ唱フ

〔扶桑略記〕二十五裏書　朱雀天皇　十一月廿一日、天皇於大極殿即位、三品貞眞親王、中納言恆佐、參議公賴、藤當幹、平時望等著禮服、爲外辨、申刻事了、（式云、不稱延長、天慶警蹕、）

申刻式終ル

〔政事要略〕五十九　赦書事　交替雜事十九

勘解由使勘判抄○中略

信濃○註略ス、

神社

○上略同年（延長八年）十一月廿一日詔書偁、延喜廿二年以往、租稅未納、悉免者、○中略

延長九年四月廿五日判

詔シテ延喜二十二年以前未納ノ租ヲ免ズ

〔西宮記〕十二月班幣　荷前　吏部記云、○中略成國去月改補藏人、九親王等、御即位日敍品位也、

〔一代要記〕朱雀天皇後宮　尙侍正三位藤朝臣滿子　延長八年十一月敍正二位、

〔公卿補任〕四　中納言從三位藤保忠　十一月廿一日正三位、

參議正四位下藤邦基　十一月廿一日從三位、即位日、前坊大夫勞、

〔公卿補任〕五承平四年　參議正四位下藤伊衡、五十、九、同廿一日（延長八年十一月）正四下、御即位、前坊亮、

從四位上紀淑光、六十、六、同八十一（延長）廿一從四上、御即位、

〔公卿補任〕五承平七年　參議從四位上藤顯忠、四十、同八十一（延長）廿一從四下、御即位、

〔公卿補任〕五天慶二年　參議從四位上伴保平、七十、三、同八十一（延長）廿一從四下、大嘗會、

〔公卿補任〕五天慶四年　參議從四位下藤在衡、五十、同八十一（延長）廿一從五上、

敍位　九親王ノ敍品

前坊大夫ノ勞

前坊亮ノ勞

〔公卿補任〕五天德二年　參議從四位上藤朝成、四十、二、延長八十一廿一從五下、氏、從四位下橘好古、六十、六、同（延長）八十一廿一從五下、御即位、

〔外記補任〕二　大外記外從五位下春淵良規　十一月廿一日敍、御即位、

〔三十六人歌仙傳〕從五位上行紀伊守藤原朝臣淸正　延長八年十一月廿二日敍從五位下、陽成院御宇（給カ）、

〔中古歌仙三十六人傳〕淸原深養父　八年（延長）十一月廿一日敍從五位下、御即位敍位、諸司勞廿年、○古今和歌集目錄二十二日ニ作ル、

〔北山抄〕五即位事　延長八年、右大臣（定カ）著左仗座、賜位記筥、

〔小右記〕長和五年二月三日、戊寅、○中略定御即位親王已下職掌、○中略攝政與兩□□（憲）定、左大辨道方執筆、諸卿群居攝政出居所、先例與諸卿議定、見故殿（實頼）延長八、○中略御即位間敍位御記、

〔敍位除目執筆抄〕延長八十一月廿一日、內覽（忠平）、

二十五日、申、解陣、開關、

〔日本紀略〕朱雀院　十一月廿五日、詔、解陣、開關、

上卿勅符ヲ奏ス

〔北山抄〕四開關事　拾遺雜抄下　召少納言、給勅符官符、○註略ス、中務輔進令捺印、畢復座、令主鈴印官符、畢少納言奉勅符、取官符著座、目內記、覆奏勅符、加入木契下給、讓位時、上卿加入奏之、延長八年例也、

木契ヲ返ス

延長八年、會坂使歸參由、申左(忠平)大臣家、今日御物忌、明日令參候、參入上卿可奏者、木契等宿置局、明日使參入奉之、恆佐卿奏、此日木契返給、後日留御所、

保忠卿行開關事、

木契ヲ返ス

保忠開關ノ事ヲ奉行ス

內舍人二人左右近衞四人

攝政タルニ依リテ大將ヲ止ム

公卿連署覆奏ス

辭表再三ニ及ブ

十二月大盡　庚寅朔

四日、癸巳、左大臣忠平、左大將ヲ罷ム、勅シテ、隨身兵仗ヲ賜フ、尋デ、之ヲ辭ス、

〔日本紀略〕朱雀院　十二月四日、勅賜左(忠平)大臣內舍人二人、左右近衞各四人、以爲隨身兵仗、

〔公卿補任〕四　攝政正二位藤忠平、五十、十二月十七日(四日)止大將、依攝行政所(事脫カ)停也、勅賜內舍人二人、左右近衞各四人、爲隨身兵仗、勅授、件勅授、從殿上給大臣云々、○一代要略同ジ、攝關傳四日ニ作ル、

〔西宮記〕臨時書事二　延長八年、貞信(忠平)公賜隨身勅書、公卿連署覆奏云々、

〔本朝文粹〕五表下付辭返隨身　爲貞信公、返隨身表、　後江相公

臣忠平言、伏奉今月四日勅命、賜內舍人二人、左右近衞各四人、以爲微臣隨身兵仗、伏惟鷰雀短心、不思冲天之翮、瓦石陋質、豈期照乘之輝、驚聽之寵、誰不反扈某(臣脫カ)中謝、臣承先帝之遺託、揔萬機於庸材、省躬揣分、何以克當、白章三封、頻抽瀝膽之讓、玄渙一出、不降收汗之恩、爰綸旨難逃、廻惶從事、朝露聚滴、何添宏海

之潮、夕螢積光、無助朗月之影、方今前祈不遂、後賞更加、憂懼兼懷、冰炭同器、身毛皆竪、寒似越鳥之畏霜、心魂共迷、熱於吳牛之喘月、況復器輕寄重、以榮爲慼、稟在羊質、雖存見革(鞏カ)之觀、飾以虎皮、猶動恐豺之意、伏望、憐此丹情、灑以玄波、停鶴樹(板カ)之冊、收虎賁之兵、然則聖主不遺假寵之謗、愚臣自免貪榮之名、無任至情、上表以聞、臣某誠惶誠恐、頓首頓首、死罪死罪、謹言、

延長八年十二月日　　左大臣正二位藤原朝臣上表

〔水左記〕承保二年十月廿四日、(藤原師實)關白殿、夜前有令問申右大(藤原師實)殿之事、予爲令傳申其子細、早旦參右大殿、令辭大將給勅答有無事也、○略中　宇(顯通)治殿欲令獻御辭狀給之時、令孝義朝臣、問故行成大納言給云、可有勅答歟、又可無歟如何、納言答申云、昭(基經)宣公、貞(忠平)信公等、被辭大將之時、無件勅答、○略中　而今引見柱下類林之間、已有昭宣公、貞信公等御度之勅答、如何候事乎者、○略中　廿七日、巳刻許依御消息參關白殿、頃之右大殿令參給、令申給云、一日所被尋仰昭宣公、貞信公等、被辭大將之時、無勅答之由、故行成卿申宇治殿云々、而今依或人說、件勅答、被仰在柱下類林之由、彼納言巳古賢也、何見誤乎者、仍右大殿召件類林引見給之處、猶無件勅答、誠如彼納言之說、是今人見誤申歟、頗可

勅答無シ
勅答アリトノ說

謂奇事矣、

八日、酉藤原顯忠ノ昇殿ヲ聽ス、

〔公卿補任〕五承平七年　參議從四位上藤顯忠、四十、(延長八年)十二月八日昇殿、

九日、戊戌醍醐天皇ノ國忌ヲ置キ、文德天皇及ビ太皇太后藤原順子ノ國忌ヲ除ク、是日、十陵八墓ヲ定ム、

〔日本紀略〕醍醐天皇　十二月九日、公卿上奏、請省除文德天皇八月廿七日國忌、勅許之、勅省除太皇大后宮藤原順子東寺國忌、置太上(醍醐)法皇九月廿九日國忌於西寺、

〔東寶記〕六法寶下　一八箇度御國忌○略中

九月廿九日　醍醐天皇　延長八年崩、御年四十八(六カ)

小野記云、於西寺行之云々、

〔撰集祕記〕十二月荷前事　延長八年十二月九日、定十陵八墓云々、

〔政事要略〕二十九年中行事　二十九　十二月下荷前事

太政官符、中務省

應(定脫カ)每年荷前山陵幷墓事

延長八年十二月八日　九日

九月二十九日西寺ニテ行フ太上法皇

中務省每年荷前ヲ獻ズ

十陵

一山陵十所

山階山陵近江宮御宇天智天皇、在山城國宇治郡、

後田原山陵平城宮御宇天皇、在大和國添上郡、高紹(光仁)天皇、

柏原山陵平安御宇桓武天皇、在山城國紀伊郡、

長岡山陵贈太皇太后藤原氏(乙牟漏)、在山城國乙訓郡、

八島山陵崇道天皇、在大和國添上郡、

深草山陵仁明天皇、在山城國紀伊郡、

鳥戸山陵贈皇太后藤原氏(澤子)、在山城國愛宕郡、

後田邑山陵光孝天皇、在山城國葛野郡、

小野山陵贈皇太后藤原氏(鳥子)、在山城國宇治郡、

後山階山陵後太上天皇(藤原胤子)、在山城國宇治郡、

後太上天皇八墓

一墓八所

大和國一所多武峯、

山城國七所

一所贈太政大臣藤原氏(忠仁公)、在愛宕郡、

一所贈一品太政大臣仲野親王、在葛野郡、

一所贈正一位(中野親王第)當宗、在葛野郡、

一所太政大臣贈正一位藤原氏(昭宣公)、在宇治郡、

一所贈太政大臣正一位藤原氏(高藤)、在宇治郡、

一所贈正一位(列子)道氏、在同所(郡イ)、(班子女王)

一所贈正一位王(忠平)、在同所(郡イ)、

右左大臣宣、奉勅、依件定之、自餘停止者、省宜承知、依件行之、符到奉行、

延長八年十二月九日○別本符宣抄、次第同ジ、江

十三日、壬寅、荷前、

〔政事要略〕二十八年中行事二十八、十三日定荷前使參議以上事、十二月上

西宮記、十三日、點元日

擬侍從及荷前使事、延長八年十二月十三日、文、不定擬侍從、依諒闇也、

諒闇ニ依リテ擬侍從ヲ定メズ出御アラセラル

〔小野宮年中行事〕十二月荷前事

諒闇荷前幷出御等例、○中略

延長八年等出御、○中略

以上故實朝殿御記、

平忠則等荷前使ヲ奉仕セズ

〔類聚符宣抄〕四荷前帝皇

從五位下平朝臣忠則　源朝臣公輔　藤原朝臣滋茂

延長八年十二月十三日

右被左大臣宣偁、件等人、闕去年荷前儲使、仍不可預今年位祿、幷來十一月大
嘗會祿者、

諒闇ニ依リ慶賀ヲ受ケズ

延長九年二月六日　大外記伴宿禰久永奉

先例唯慶ヲ大内ニ奏ス

十七日、丙午、除目、右大臣定方ヲ左大將ニ、彈正尹代明親王ヲ中務卿ニ、上
野太守重明親王ヲ彈正尹ニ任ズ、尋デ、直物アリ、

〔西宮記〕十二月班幣　荷前　吏部記云、延長八年十二月略○中十七日、除目、授彈重明正尹、前彈正尹爲中務卿云々、十九日、臺忠已下來進見參、辭重不受慶賀之、由還、是日中務卿親王送書、其趣云、還官慶賀事、惟不可有之、但右衛門尉藤原成國、補藏人之時、舊時藏人等云、唯大内許可奏云々、文書中有所見哉、汝所思定如何、一同而可宜、又奉參山陵之九親王、及高明源氏皆有此事、○註略ス、右兵衛佐師輔來、依奏慶有疑、即令諮左大臣、爰師輔陳云、大臣語次曰、昔先妣喪内、故左時平大臣授中納言、余拜右大辨之時相定、唯奏慶内、不及他處、又先日所命袍色事、諮左大臣、即報云、可服著橡色、前日所案内也、廿一日、右兵衛佐師輔送書云、奏慶事問大閤、報云、於不奏无殊事、○中略依是等說不奏慶、○下略

〔公卿補任〕四

右大臣從二位藤定方、五十六、右大將、十二月十七日轉左大將、○古今和歌集目錄同ジ、
大納言正三位藤仲平　按察使、十二月十七日兼右大將、按察如元、○古今和歌集目錄同ジ、
中納言從三位藤恆佐　右衛門督、十二月十七日轉左衛門督、
同保忠　十二月十七日任、
同兼輔　十二月十七日任、兼右衛門督、○古今和歌集目錄、三十六人歌仙傳異事ナシ、
同邦基、五十七、十二月十七日任、民部卿如元、
參議從四位上藤扶幹　太宰大貳、中宮大夫、十二月十七日兼左大辨、止大貳、大夫、

〔公卿補任〕承平七年五　參議從四位上藤顯忠、四十、同十七日右中辨、
〔公卿補任〕天慶二年五　參議從四位上藤敦忠、三十四、同十二月十七日右門佐、
○三十六人歌仙傳同ジ、
〔公卿補任〕天慶四年五　參議從四位下藤在衡、五十、同十二月十七日式部少輔、

〔公卿補任〕五 天暦七年　参議従四位上大江朝綱、六十八、十二月十七日兼民部少輔、（延長八年）

〔外記補任〕二　大外記外従五位下春淵良規　十二月十七日任越中權介、少外記大藏中貫　十二月十七日任、元勘解由判官、

〔敍位除目執筆抄〕朱雀院延長八年受禪、幼主也、大臣不可候執筆歟、　延長八十二月十六日京宮、十八日入眼、　執筆、廿一日、左大臣（忠平）參、行直物、

〔外記補任〕二　大外記朝原三行　十二月轉大、

○朝原三行ノ任官、便宜合敍ス、

二十日己酉、御佛名、

〔北山抄〕二年中要抄下　十二月十九日御佛名事　同八年（延長）十二月廿日、近衛府始奏時、又有名對面、廿三日止之、○撰集祕記同ジ、

二十九日、戊午、天醍醐皇ノ諸皇子、後山階陵ニ詣デ、荷前ヲ奉ラル、

〔西宮記〕十二月　荷前　班幣　吏部（裏書）記云、延長八年十二月十七日、右兵衛佐師輔來、即以先帝山陵親王等可奉荷前哉否、諮左大臣（忠平）、○中略廿一日、右兵衛佐師輔送書云、奏慶事問大閤（忠平）、報云、○中略又御荷前事、中宮親（成明）王亦有疑、未被一定故、問遣南院（敦子）内親王（貞子）、太宰帥親王（清和御後）、共申奉由、故今日被一定可被奉之由、依是等說、○中略及奉拜山陵可奉荷前之、廿三日、中務卿（代明）親王示云々、中宮親王依幼少、不奉荷前云々、至成人者、奉之無妨乎、廿九日云々、午時參拜山陵、於南釘貫外、兩段再拜、無知例人、准荷前式也、未剋拜山階墳墓、是日朝服、

〔小右記〕長元元年十二月一日、辛酉、○中略天暦三年八月、貞信公薨給、十二月廿五日、荷前、著堰座令行給、其外無所見、○中略荷前之幣者、可准神道歟、而不忌穢依幣墳墓歟、○中略見重明親王記、延長八年、有奉之由、

〔左經記〕長元元年十二月廿四日、甲申、天晴、宮御荷前可被立日、可令勘之由、申關白殿、仰守道令勘申、卅日可被立之由奉勘文、去廿日余申殿云、故殿御料荷前、從今年可令獻給、延喜（長）八年故重明親王尋先例、奉荷前之由見彼記、准彼例者、從今年可令獻給也者、

是月、齋宮柔子内親王、御退下アラセラル、

〔日本紀略〕醍醐天皇　十二月□日、伊勢齋内親王柔子退之、

清和天皇皇子ノ先例ニ依ル

幼親王荷前ヲ奉ラレズ朝服ヲ著セラル

名謂アリ

皇子等荷前ノ議有無

是歳、臨時仁王會、

〔西宮記〕○臨時一前田家大永鈔本　臨時仁王會　内裏(裏書)有穢時、被修仁王會例、

延長七年三月廿四日、被修仁王會、但石清水、松尾、賀茂上下、山城國令修之、同八年○中略云々、

主殿頭源等ヲ大宰大貳ニ任ズ、

〔公卿補任〕五天暦元年　参議從四位上源等六十八、任大宰大貳、(延長八年)

〔二中歴〕二官局歴　大夫史　錦野春蔭延長八、

○錦野春蔭任官ノ事、便宜合敍ス、

左衞門權佐從五位上平中興卒ス、

〔勅撰作者部類〕自帝王至庶人之部　中興　五位左衞門權佐、右大辨平季長男、至延長八年卒、

〔古今和歌集目錄〕庶人　平中興　正五位下行内膳正忠望王二男、實右大辨秀(季)長一男、母[　]、昌泰元年十二月八日補藏人、(二ヵ)三年二月十五日補文章生、父讓、三年八月任少内記、同月廿日轉大内記、延喜三年正月十一日兼近江權少掾、四年正月七日敍從五位下、廿五日任遠江守、十年正月十三日任讃岐守、十五年正月七日敍從五位上、給國、十二日任近江守、閏二月昇殿、十九年正月十八日任左衞門權佐、廿二(二ヵ)年正月卅日任美濃權守、

世系　平季長ノ男

〔尊卑分脈〕平氏

季長

中興　左衞門權佐、正五下、歌人、

女子　歌人、

〔尊卑分脈〕源氏　光孝天皇孫

忠望王

中興　播磨守、從五上、古今作者、(文)(藏)

元規　左門尉、從五下、(藏)

女子　後撰、新勅作者、

忠望王ノ子トナル

〔後撰和歌集〕十五雜歌一　外吏にしはべりまかりありきて、殿上おりて侍りける時、兼輔の朝臣の許に遣はしける、平なかき

屢國司ト爲ル

よと共に峯へ麓へおり登り行く雲の身は我にそ有りける

〔權中納言兼輔卿集〕平のなかきかはりまよりのほり、さたすること有て、いまゝてまいらぬといひたる返事に、

播磨任中藤原兼輔ト往復ス

時鳥なきまふ里のしけゝれは山へに聲のせぬもことはり

〔江談抄〕四　欲識滔々流出處、南陽平氏是清源、賦置酒如淮、江相公、

北堂感讃州平刺史贈物作也、此詩注云、坤元錄云、淮水出南陽平氏縣、故云、

刺史者平中興也、爲讃岐守之時、招秀才以下學生以上、於本堂羞膳黃昏頒紙、相公（朝綱）爲秀才作此句、中興朝臣感此句、同車歸宅、授女子云々、

中興大江朝綱ノ秀句ニ感ジ其女ヲ與フ

〔勅撰作者部類〕自帝王至庶人之部　中興○中略　古今集雜體、二、　後撰集雜戀三、一、雜一、一、

〔古今和歌集〕十九　誹諧歌　雜體　題しらす、　平中興

歌什

あふ事の今ははつかに成ぬれは夜深からてはね月無かり鳬　なかき

雲はれぬ淺まの山のあさましや人の心を見てこそやまめ

俳諧歌

○中興女ノ事蹟、便宜左ニ附載ス、

〔勅撰作者部類〕女部　平中興女　後撰集三戀四、　新勅撰集一戀四、

平中興女ノ傳

〔大和物語〕上　中興の近江のすけかむすめ、ものゝけにわつらひて、去やうさう大とくをけんしやにしけるほとに、人とかくいひけり、なをしもは

中興ノ女ト淨藏ノ交情

たあらさりけり、忍ひてありへてのち、人のものいひなともうたてあり、猶よにへしとおもひいひてうせにけり、くらまといふところにこもりて、いみしうおこなひをり、さすかにいとこひしうおほえけり、京をおもひやりつゝ、よろつの事いと哀におほえて行ひけり、なく〳〵うちふして、かたはらを見れは、ふみなんみえける、なそのふみそとおもひてとりてみれは、此わかおもふ人のふみなり、かけることは、

後撰戀四　墨染のくらまの山にいる人はたとる〳〵もかへりきなゝん

とかけり、いとあやしく、たれしてをこせつらむと思ひをり、もてくへきたよりもおほえす、いとあやしかりけれは、又ひとりまとひきにけり、かくて又山にいりにけり、さてをこせたりける、

からくして思ひ忘るゝ戀しさをうたて啼つる鶯の聲かへし、

さても君忘けりかし鶯の啼おりのみや思ひ出へき

となんいへりける、又去やうさうたいとく、

我爲につらき人をはをきなから何の罪なきよをや恨ん

中興女ト淨藏ノ贈答歌

父宮闕ニ仕ヘシメントシテ果サズ

ともいひけり、此女は、になくかしつきて、みこたちかんたちめよはひ給へと、みかどに奉らんとて、あはせさりけれと、このことといてきにけれは、おやもみすなりにけり、

父ノ歿後流浪ス

〈大和物語〉上　近江介平中興かむすめを、いといたうかしつきけるを、おやなく成て後、とかくはふれて、人の國にはかなき所に住けるを、あはれかりて、かねもりかよみてをこせたりける、

中興女ト平兼盛ノ歌贈答

後撰雑二　遠近の人めまれなる山里に家ゐせんとはおもひきや君

とよみてなんをこせたりけれは、見て返事もせて、よゝとそなきける、女もいとらうある人成けり、

中興女ト元良親王ノ贈答歌

〈新勅撰和歌集〉戀十四歌四　女に遣しける、　兵部卿元良親王

淺くこそ人は見るとも關河のたゆる心はあらしとそ思ふ

返し　平中興女

關川の岩間をくゝる水を淺み絶えぬへくのみ見ゆる心(はイ)を

〈後撰和歌集〉戀十二歌四　つらくなりにける男のもとに、今はとて裝束なと返し遣はすとて、　平なかきか女

中興女ト源宗城ノ贈答歌

今はとて梢に懸る空蟬のからを見むとはおもはさりしを

かへし　源宗城

忘らるゝ身をうつ蟬のから衣かへすはつらき心なりけり

〈後撰和歌集〉戀十二歌四　心さしおろかに見えける人につかはしける、　なかきか女

またさりし秋はきぬれと見し人の心はよそになりも行哉

かへし　源是茂朝臣

君を思ふ心なかさは秋の夜に何れまさると空に去らなむ

中興女ト源是茂ノ贈答歌

年末雜載

竹生島社ニ法華三昧堂ヲ建立ス

神社、

〔竹生島縁起〕同八年（延長）、越前大丞（掾イ）出雲貞行、奉爲國家建立法花三昧堂、奉安置五尺皆金色釋迦如來像一躰、幷三尺四天王、則入六口之沙彌、令修三昧、

佛寺、

〔仁和寺記錄〕十八眞俗雜聞集　九條右丞相日記弘法大師御事、

延長八年八月十七日、蓮丹語云、圓仁和尚存生日、或法師等、彼大師前和談曰、高野大師眞言、上古可荒凉云々、還去、其夜慈覺大師夢見空海大師、弟子康修來告云、爲謁和尚眞言之師已來於斯云々、慈覺卽束帶出、逢求彼弘法大師、庭中只有一莖蓮花、其上有五貼金剛杵、更无人、慈覺大師驚怪、求弘法大師、康修卽指彼金剛杵、是吾大師云々、現其收（攸カ）文、已上九條右丞相日記、

僧蓮丹空海ノ事ヲ談ズ

生死、

〔紀貫之集〕九哀傷部　延長八年九月日、京極（藤原兼輔）中納言の、諒闇のあひたに、はゝのふくになりて、

ひとへたにきるは侘しき藤衣かさぬる秋をおもひやらなん　貫之返歌

藤原兼輔ノ母伴氏死ス

〔公卿補任〕四延喜廿一年　參議從四位下藤兼輔、四十五、右中將利基六男、母伴氏、略ス、

延長年中

國司ノ裝束行程明年ニ及ブ者ハ、明年ヲ以テ初任ト爲サシム、

〔北山抄〕十 計歴事 吏途指南 任臨時闕之者、多申計歴、仍延長起請云、裝束行程及明年者、以明年爲初任云々、然而有故障、遲著任之者、間被許之、或前司稱有可行畢事、指月申停新司著任、又是雖有例、非理之事也、若被許計歴者、可失一年調庸、仍聖明之代、殊被禁之、

延長起請

計歴ヲ許セバ一年ノ調庸ヲ失ス

賀茂祭男女使等ノ馬歸渡セズ

神今食祭ニ辨少納言ノ事ヲ兼行フ

賭弓ニ麴塵袍ヲ著御アラセラル

内宴ニ近衞次將二人列立ス

觸穢中乞巧奠ヲ行フ

延長年中雜載

神社、

〔西宮記〕四月 警固 賀茂祭事 天皇御南殿、略○中 男女使馬手振次第渡、主人不渡、入自日花門、出自月花門、内藏、近衞、衞府有隨身、馬寮宮々男使、命婦、藏人宮々使、闈司等馬從渡、舊例渡後歸渡、延長略○中不歸渡、

〔中右記〕天永三年十一月十四日、丁卯、今夕新嘗祭、上卿宰相中將家政、右中辨爲隆朝臣著行云々、少納言三人故障、○註略ス、先被尋例之處、延長略○中之比、神今食無少納言、辨兼行也、於新嘗祭日、已無所見之由、外記所勘申也、

公家、

〔伏見宮御記錄〕利三 行成卿記 長保五年正月十九日、己酉、略○中 參内、賭弓也、略○中 出御弓場、上服麴塵、宰相中將云、今日不著給麴塵、可給著黃、略○中 引見舊記、東部記、醍醐御時、延長年中御麴塵云々、

〔小右記〕正暦四年正月廿二日、辛亥、今日有内宴、略○中 藏人右少將明理出陣召公卿、内大臣以下、近衞次將、登朝等也、頼親、明理、大内記爲時□等、著靴列立東庭、先例、近衞次將二人列立云、□三人列立失也、延長、天、德之□雖二人列立、彼時議云、猶稱之失、□

〔西宮記〕七月 乞巧奠事、穢時尙祭、延長例、

〔年中行事祕抄〕七月乞巧奠事　觸穢時乞巧奠事

江記云、寛治八年七月六日、乙巳、自院判官代季安奉仰示送云、觸穢時、乞巧奠可被行否如何、卽令申云、西宮抄、穢時尙祭、延長例、

〔中右記〕永長元年七月廿九日、左大臣以消息被仰下云、相撲召合令停止者、則仰大夫史祐俊了、依女院御惱重也、〇中略

相撲被尋例、〇中略

永延二年、無御前內取、被行召合由、權中將顯實朝臣所被談也、是延長年中例者、大略見彼家記歟、

相撲ノ御前內取ヲ止ム召合ノミヲ行フ

〔小野宮年中行事〕正月三日行幸事　典侍灌子朝臣申云、延長年中、供奉行幸之時、乘御輿之後、內侍進置御劔等、而年來之間、不因斯例、先置御劔、是尤說也者、

乘輿ノ御後ニ御劔ヲ置ク

〔西宮記〕九月九日宴　九記云、〇中略同五年（天曆）十月五日云々、〇中略予爲貫首、引列著座、見殿上裝束、有相違去年之事、一者在（座カ）前置硯事、二者御前南廂中央間東西、各立金銅花瓶樹菊花、式部卿重明親王云、延長御代、花瓶者高大也、如圖書御讀經間、立御前之瓶、今日瓶者、是尋常隨時節、覽時花之瓶云云、

重陽宴ニ高大ノ花瓶ヲ御前ニ立ツ

〔西宮記〕正月下　給官　除目　公卿子二合、任京官三分已上、外國介後、任六位受領、人々停兼國、申自

顯官預爵者、守、介、諸王權守、王卿已下兼國、依外記勘文及臨時恩、已上延喜延長大間抄所注、

御拜ナシ　御藥ヲ供ズ　諸節會ヲ停止ス

宜陽殿ニテ小飲アリ　祿法ハ十六日ニ准ズ

代始ニ依リテ非侍從見參ニ預ル　諸司奏ヲ內侍所ニ付ス

承平元年辛卯

正月小　庚申盡　朔

一日、庚申、四方拜、諒闇ニ依リテ、朝賀、小朝拜及ビ節會ヲ停ム、

〔日本紀略〕朱雀院　正月一日、庚申、止朝賀小朝拜、依諒陰也、諸節會等停止之、

〔西宮記〕正月上四方拜　延長九年正月一日、掃部奉仕四方拜御裝束、立御屏風八帖、鋪御座三枚於其內云々、（于時不拜四方仍不著此座）次諸司供御藥如常、（但內膳司供御膳七種之後、左近權中將伊衡朝臣、）內藏饗殿上及內房、諒闇之間、諸節會始自今日停止也、（魚イ）申豕肉不供之由、

〔貞信公記抄〕正月一日、庚申、拜天地四方、大納言以下來拜、又（非侍從預見參）帥（貞恵）親王入坐、停止節會、又無小朝拜、親王公卿陣頭聊有飲食、非侍從大夫皆預見參、其祿法准十六日、是嘉祥三年十一月十九日例也、

〔北山抄〕一年中要抄上正月元日宴會事　延長九年正月一日、依諒闇無宴會、大臣以下就宜陽殿、有小飲、外記進侍從以上見參、（於本所取之、非侍從亦預、依代始也、）祿勘文、後日給之、嘉祥三年例也、諸司奏、付內侍所、

〔江次第〕一正月四方拜事甲　幼主設座不拜、（承平元年、）

〔後撰和歌集〕二十哀傷歌　先帝（醍醐）おはしまさて、又の年の正月一日におくり侍

承平元年正月一日

定方ト藤原兼輔ノ贈答歌

りける、

徒らに今日や暮れなむ新らしき春のはしめは昔なからに

三條右大臣（定方）

かへし

兼輔朝臣

なく涙ふりにし年の衣手は新らしきにもかはらさりけり

かさねて遣はしける、

三條右大臣

人の世の思ひに叶ふ物ならは我か身は君に後れましやは

三日、壬戌、左京一條災ス、

〔日本紀略〕朱雀院　正月三日、壬戌、夜東京一條有失火、

六日、乙丑、大風、

〔日本紀略〕朱雀院　正月六日、乙丑、大風、終日不止、

七日、丙寅、諒闇ニ依リテ、叙位及ビ節會ヲ停ム、

〔妙音院相國白馬節會次第〕七日節會　諒闇年留節會事

延長九年正月七日、丙寅、叙位幷白馬止、依諒闇也、御弓奏諸司付内侍所、

御弓奏ヲ内侍所ニ付ス

八日、丁卯、後七日御修法、

〔東寺長者補任〕一　長者權律師濟高　後七日法、

御修法ヲ法性寺ニ行フ

〔貞信公記抄〕正月八日、丁卯、大内御修法於法性寺行、仁觀義海爲阿闍梨、

九日、戊辰、雪見參

女官見參ニ預ル

〔貞信公記抄〕正月九日、白雪滿庭、雪見參取女官、先度只取男官、不取女官故也、〇前田家本西宮記同ジ、

廿七日、朔日、雪見參等事、仰高堪、

〇元日及ビ雪見參ノ祿ニ、大宰府ノ綿布ヲ充ツルコト、二月二十一日ノ條ニ見ユ、

十二日、辛未、地震、

〔貞信公記抄〕正月十二日、退出宿家、夜地震、

十三日、壬申、前齋院敦子内親王薨ズ、

清和天皇ノ皇女

〔日本紀略〕醍醐天皇　延長八年正月十三日、前齋院無品敦子内親王薨、清和第五皇女、

〔賀茂齋院記〕敦子内親王　清和天皇第十皇女也、母神祇伯良近女也、元慶元年ト定、延長八年正月十三日薨、

〔一代要記〕陽成天皇齋院　敦子内親王　清和二女、元慶二年（元）ト定、四年退之、延長九年正月十三日薨、

〔西宮記〕十二月班幣荷前　吏部記（裏書）云、延長八年十二月十日、右兵衛佐師輔來、即以先帝山陵親王等可奉荷前哉否、諮左大臣（忠平）、○中略廿一日、右兵衛佐師輔送書云、奏慶事問大閤、報云、○中略又御荷前事、中宮親王亦有疑、未被一定故、問遣南院（齊）内親王（敦子）、太宰帥（貞亂）親王、清和御後、共申奉由、

御世系

〔本朝皇胤紹運錄〕

清和天皇

敦子内親王　齊院、母同貞平、○神祇伯良近女、

内親王ト爲ラル

〔三代實錄〕二十三清和天皇　貞觀十五年四月廿一日、乙卯、是日、定親王八人、○中略皇子貞保、母女御藤原氏、故中納言長良之女、○中略皇女敦子、與貞保同母、竝爲親王、

賀茂齋院ト爲ラル

〔三代實錄〕三十陽成天皇　元慶元年二月十七日、己未、卜定伊勢、賀茂齋内親王、○中略賀茂齋敦子内親王、竝卜食、

御告文

廿四日、丙寅、遣使於賀茂神社奉幣、告以定齋内親王、告文曰、天皇我詔旨止、掛畏岐賀茂大神乃廣前爾申賜倍止申、忝以拙劣天、天日嗣乎受賜利、恐美懼利大坐須、皇太神乃厚護爾依天、天皇朝廷波、平久無事久有倍之、自今以後毛、助賜比護賜牟爾依天之、食國乃天下波、愈益爾平久可有岐、又前爾侍之儀子内親王波、身乃安美重岐爾依天、太上天皇乃御時爾令退出天岐、今新爾嗣位天波、相替天可令奉仕岐物奈止、利爲天毛、敦子内親王乎卜定天、阿禮乎度女爾進狀乎、參議刑部卿正四位下兼行勘解由長官近江守菅原朝臣是善乎差使天、宇豆乃大幣乎令捧持天進良久乎、恐美恐美毛申賜波久止申、

儀子内親王ノ御替

阿禮乎度女ト稱ス

〔三代實錄〕三十七陽成天皇　元慶四年四月十一日、甲午、賀茂齋内（敦子）親王、臨於鴨水解禊、即便入紫野院、公卿及所司供奉如常式、三年齋之後、去年可入野宮、緣穢而停、非緩也、

紫野院ニ入ラル

〔三代實錄〕三十九陽成天皇　元慶五年四月廿日、丁酉、賀茂祭、内藏權頭從五位上兼行讚岐介良岑朝臣晨直奉承祝詞、向社宣旨、其祝詞尾曰、辭別申久、前年爾進禮留齋王波、重喪爾遭太留依天、退出志女天岐、今須波諒闇波天乃後、占定天進（无カ）天、其間波、皇我朝庭乎、平介久安良久、幸賜比護賜倍止、申賜波久止申、

○敦子内親王ノ薨日、日本紀略、賀茂齋院記等、延長八年正月十三日ニ作ル、今、一代要記、西宮記等ニ據リテ掲書ス、

十四日、癸酉、御齋會内論義、

諸衛手番ヲ行フ
謝座セズ
紙ヲ修ス

〔貞信公記抄〕正月十四日、論義如例、風吹、
十七日、丙子、諒闇ニ依リテ、射禮ヲ停ム、
〔江次第鈔〕三射禮　正月丙　諒闇年無射禮、
延長九年吏部王記、正月十七日、是日、公家廢射禮、今年諸衛手番唯一度而已、
又射畢不謝座云々、諒闇之例也、唯左近衛二度手番、右兵衛佐師輔說、
今案、諒闇年王卿不參行、雖然諸衛依例手番歟、
御願ニ依リテ、神寶ヲ造ル、
〔貞信公記抄〕正月十七日、雪、神寶造始、卽經(往カ)日御願也、令神祇(官脫カ)行祓事、非大祓、
二十一日、庚辰、海賊ノ事ヲ奏ス、
〔貞信公記抄〕正月廿一日、海賊文付公忠朝臣、
法皇、御書ヲ左大臣忠平ニ賜フ、
〔貞信公記抄〕正月廿一日、右大(仲平)將來、有院御消息、統茂等事也、
廿六日、右大將來、有院御消息等、
○二十六日、法皇更ニ御書ヲ忠平ニ賜フコト、便宜合敍ス、
二十三日、壬午、外記政始、

米二千石ヲ春カシム

〔貞信公記抄〕正月廿三日、外記政始、
二十七日、丙戌、法皇ニ、綿二千屯ヲ進上アラセラル、
〔貞信公記抄〕正月廿七日、又進院綿二千屯之事(ナシイ)同(高明)仰、
二十八日、丁亥、雷鳴、臨時交易絹未進、及ビ春米スベキ國々ヲ勘ヘシム、
〔日本紀略〕朱雀院　正月廿八日、丁亥、乾方雷鳴、
〔扶桑略記〕二十五裏書　朱雀天皇　正月廿八日、丁亥、雷鳴四五度、諸人驚之、
〔貞信公記抄〕正月廿三日、從今夜台山所々令供灯祈願、爲除事(祭カ)也、
廿八日、中宮(伊尹)大夫來、仰宣旨、臨時交易絹未進、又可春米國等勘事、○中略雷鳴、
二月廿七日、左大(扶幹)辨來、令見可春米國々不動穀勘文、卽仰可令春二千石米之狀、又左中辨來、覽臨時交易絹勘文、

二月大己丑朔盡

三日、辛卯、大原野祭、

〔貞信公記抄〕二月一日、己丑、大原野使内侍洽子、俄申穢由、仍令參明子内侍、三日、今日祭饗家行、后宮依御服也、大原野奉幣事、依有所疑令占、不吉也、仍河頭解除、

左獄東町災ス、

〔日本紀略〕朱雀院　二月三日、辛卯、亥刻左獄東町失火、

四日、壬辰、祈年祭、

〔貞信公記抄〕二月四日、祈年、

穢ニ依リテ女使ヲ代フ

中宮御服ニ依リテ忠平祭饗ヲ行フ

少僧都基繼寂ス、

〔貞信公記抄〕二月四日、基繼僧都卒、

〔歷代皇紀〕朱雀天皇裏書　興福寺別當　少僧都基繼元、承平元年二月四日卒、八十二、治十八年、

〔日本紀略〕朱雀院　二月十六日、甲辰、少僧都基繼卒、

〔興福寺略年代記〕基繼　延喜十五年十二月日任、于時已講、越前國人、紀氏、

官歷

越前ノ人紀氏

承平元年二月十六日入滅、八十二、〔興福寺務次第〕興福寺本同ジ、

〔僧綱補任〕〇興福寺本　權律師基繼　延喜十六年四月五日任、法相宗、興福寺別當、已講勞「七十二、昌海和尚弟子」（朱書下同ジ）延長三年正月廿二日轉正「八十一」同六年閏八月廿八日任小僧都「八十四」承平元年二月十六日入滅「八十七」

〔興福寺別當次第〕乾　基繼少僧都或記、昌海和尚弟子、　延喜十五年任、俗姓紀氏、越前國人也、法相宗、寛平七年立義、年十一、同長者宣、延喜九年維摩講師、年十六、同長者宣、同十六年四月六日任權律師、延長三年四月八日轉正、同六年閏八月廿八日任少僧都、同八年二月四日卒、生年十二、八或書云、承平元年二月十六日卒、又云、延長六年之比、爲別當、治十七年、

〔三會定一記〕一　同九年去年十一月十九日宣、講師基繼六十五興福寺、法相宗、　同十六四六任律師、延長六閏八廿八任少僧都、同九二六卒、八十七才、越前國人、紀氏、

〇基繼ノ寂日、日本紀略、僧綱補任、興福寺略年代記等、十六日ニ作リ、三會定一記、六日ニ作ル、今貞信公記抄、興福寺別當次第、歷代皇紀等ニ據リテ掲書ス、

六日、甲午、大炊寮ノ死穢ニ依リテ、寮外ノ御稻ヲ供御ト爲ス、尋デ、大祓ヲ

供御院宮内省ニテ寮外ノ御稲ヲ春カシム

諸司ヲシテ炊ギ進メシム

五體不具ノ死穢

祿ヲ賜フ

忠平馬ヲ贈ル

行フ、

〔日本紀略〕朱雀院　二月六日、甲午、大炊寮申、今夜犬咋死童於供御院、仍仰宮内省、以寮外御稲、令備供御、

〔貞信公記抄〕二月六日、大炊寮有死兒、腰以上相連者、春御稲事、於宮内省行之、所々熟食付便宜、諸司令炊進、右金吾來相、

七日、依昨日死穢、令大祓、

〔左經記〕長元四年二月二日、己卯、天陰微雨、依召參殿、仰云、右府穢猶可被忌卅日也、其故者、延長、承平間、首腹相連、無四支之兒穢被定、以彼准之、此度猶重、仍可忌卅日之由、令頭辨示右府、

〔樗囊抄〕年中行事大祓　依諸司穢被行、

承平元三六、大炊寮犬咋入死、七日建禮門祓、齋月、

七日、乙未、大宰大貳源等ノ赴任ヲ奏ス、

〔貞信公記抄〕二月七日、公忠朝臣、大貳奏赴任、内令賜白大衣一重、

十五日、大貳來、勸酒、被物送馬、

○源等ヲ大宰大貳ニ任ズルコト、延長八年正月二十九日ノ條ニ見ユ、

辨代外記代ヲ定ム

諒闇ニ依リテ饗宴ヲ儲ケズ樂人ヲ召サズ

藤原時柄ヲシテ、天文道ヲ學バシム、

〔日本紀略〕朱雀院　二月七日、乙未、仰藤原時柄、令學天文道、

八日、丙申、春日祭、

〔春日祭歷名部類〕春日祭　承平元年二月八日、丙申、祭、辨、外記等不參、大史爲辨代官、小史爲外記代官、

〔康富記〕文安五年二月廿八日、甲申、晴、春日祭也、○中略　外記史不參、用代官例、

承平元年二月七日、乙未、明日春日祭、辨、外記各煩咳病不參、以見參大夫爲辨代、以史可爲外記代之由、左大臣（忠平）仰大外記久永畢、

京師群盜多キニ依リ、近衞、衞門及ビ檢非違使等ヲシテ夜警セシム、

〔扶桑略記〕二十五裏書　朱雀天皇　二月八日、召仰左右近衞、衞門等、檢非違使等可夜行之由、近日群盜滿京、掠人物之故也、

十一日、己亥、列見、

〔西宮記〕二月列見　延長九年二月十一日、列見云々、先例著廳上饗座、而此度依諒闇不儲饗幷宴座、不召樂人、又三局史生饗儲文殿云々、

〔貞信公記抄〕二月十一日、列見、今日參入、左右金吾（祐俊・清蔭）、大藏卿（秩躬）、左大辨也、刑部卿（立上）

不參者多シ　已刻政ヲ始ム

從東門退出者、式部輔丞皆稱病不參、召代官間、已四點政始、可免近衞官人勘事、可始御書吉日、可候瀧口人々事等仰頭、

四角祭

十二日、庚子、臨時御讀經、

〔貞信公記抄〕二月十二日、大內御讀經行十寺、依人夢也、四角祭行之、

丹波守源忠卒ス、

〔貞信公記抄〕二月十二日、丹波守忠朝臣卒、

官歷

〔古今和歌集目錄〕庶人　源惠（忠）　大納言弘之孫、但馬守弼一男、延喜四年二月廿六日任主殿助、八年正月七日敍從五位下、當八年院御給、十二日任信濃守、宇多院給、十五年正月七日敍從五位上、給（治カ）國、十二日任伊豆守、廿年九月廿一日任治部大輔、廿一年正月卅日兼山城守、延長元年四月十日兼齋院長官、六月廿二日任右衞門權佐、山城兼、任、停輔、四年正月十（七）日敍正五位下、伊豆山城（治カ）兩給國、六年正月廿五（九）日任丹波守、九年卒、

〔尊卑分脈〕源嵯峨氏

世系

弼

使ホトコス　忠丹波守、正五下、左權佐、古今作者、佐母、

歌什

治筑後守、從五下、母、

〔勅撰作者部類〕自帝王至庶人之部　忠五位、丹波守、但馬守源弼男、　古今集、物名、

〔古今和歌集〕十物名　桂の宮　源ほとこす

秋くれと月のかつらの實やはなる光をはなとちらす計を

雷鳴陣ヲ立ツ　忠平參內シテ解陣中宮登華殿ニ御ス

十三日、辛丑、雷鳴氷雨、雷、修明門前ノ樹ニ震ス、是日、穢ニ依リテ、園、韓神祭ヲ延引ス、

雷公修明門陣座ニ入ルトノ說

〔日本紀略〕朱雀院　二月十三日、辛丑、午時雷大鳴、

〔貞信公記抄〕二月十三日、園、韓神、依有穢疑、問定間停止、雷鳴陣起、左（定方、仲平）右大將依病不參入、仍參上釋陣、修明門前樹霹靂、

〔新儀式〕五臨時下雷鳴陣事　延喜（長）九年二月十三日、未刻大振、同三尅陣立、中（穆子）宮御登華殿、有勅仰左右近衞陣相分遣立、

〔扶桑略記〕二十五裏書朱雀天皇　同（二月）十三日、辛丑、園、韓神祭、依穢疑停、午刻天顏暗冥、雷鳴氷雨、風烈、可謂異、修明門陣座雷公入、直舍人等迷惑無害、

○園、韓神祭ヲ追行スルコト、本月二十五日ノ條ニ見ユ、

十五日、癸卯、伊豫國、損戶ヲ奏ス、

諸衛御馬蒭等未進ノ事ヲ勘ヘシム

〔貞信公記抄〕二月十五日、伊豫損戸解文付春蔭、

十六日、甲辰官奏、

〔貞信公記抄〕二月十六日、有官奏、左中辨、

十七日、有官奏事高堪朝臣、左馬寮申、諸衛御馬蒭糒、煎豆未進等可勘事、仰同辨、

加賀解文

廿日、加賀解文四枚給助繩、有官奏、公忠朝臣、去年依忿用、所仰國々、在下絹布宣旨、不待民部勘、見物可行狀、公忠朝臣申仰了、

廿一日、有官奏、顯忠朝臣、任國之責申文、卽給春蔭令勘、

廿三日、有官奏、高堪朝臣、

○十七日以後ノ官奏ノコト、便宜合敍ス、

十八日、丙午大極殿鷺怪ニ依リ、七寺ヲシテ、誦經セシム、

〔貞信公記抄〕二月十八日、大極殿鷺怪、七寺誦經、爲息災也、

十九日、丁未季御讀經、

請僧定

〔貞信公記抄〕二月十六日、梅壺定季御讀經請僧、

十五僧御前ニ分候ス

十九日、季御讀經始、十五僧分候御前、雖物忌勘文也、依殿上公卿不參入、祇候御前、

結願度者ヲ給フ

廿二日、御讀經了、給度者各一人、

二十一日、己酉元日及ビ雪見參ノ祿ニ、大宰府ノ綿布ヲ充ツ、

〔貞信公記抄〕二月廿一日、元日雪見參祿以太宰綿布可行事、仰春蔭、

○雪見參ノコト、正月九日ノ條ニ見ユ、

二十五日、癸丑園韓神祭ヲ追行ス、

〔貞信公記抄〕二月廿五日、園韓神祭、左大辨來、上達部皆稱障、依此送消息刑部卿（公上）令參、

○穢ニ依リテ、園韓神祭ヲ延引スルコト、本月十三日ノ條ニ見ユ、

法琳寺別當元忠寂ス、

〔法琳寺別當補任〕第六阿闍梨元忠　治十七年、延喜十五年九月廿三日宣下　延喜、朱雀二代人也、自延喜十五年至于廿二年、延長八年、同九年二月廿五日入滅、

〔柳原家記錄〕百九　太元祕記　延喜朱雀　別當次第事　第六阿闍梨元忠　承平元年二月廿五日入滅、勤行十六年、

二十六日、甲寅左大臣忠平、上表シテ、攝政ヲ辭ス、

勅答アラセラル

〔貞信公記抄〕二月廿六日、奉辭攝政表、

〔西宮記〕臨時二勅書事　承平元年、貞信公上表、勅答有御畫日、今案、給所司勅書、依令文無御畫日歟、又勅答有畫日歟、是若依事、猶有畫日歟、慥可尋也、

○忠平、屢上表シテ、攝政ヲ辭シ、勅答ヲ賜ヒテ、其請ヲ斥クルコト、延長八年十月二十日ノ條ニ見ユ、

三月大己未朔盡

二日、庚申、地震、

〔日本紀略〕朱雀院　三月二日、庚申、子刻地震、○扶桑略記裏書同ジ、

〔貞信公記抄〕二月廿九日、朝小雪、又聞始（如カ）地震音、

四日、壬戌、春米ノ穀數ヲ定ム、

〔貞信公記抄〕三月四日、左大辨（扶幹）來、定春米穀三千石也、

五日、癸亥、大藏ノ幄、主殿ノ班幕ヲ諸家ニ貸與スルコトヲ禁ズ、

〔貞信公記抄〕三月五日、左金吾（恒佐）來、左大辨、左中辨、右少辨等申政、大藏幄、主殿班幕、不可借諸家宣旨、仰左中辨、

十二日、庚午、承香殿ニ於テ、御修法ヲ行フ、

〔貞信公記抄〕三月十二日、丙御修法、於承香殿行、

十三日、辛未、除目、

〔公卿補任〕五　參議從四位下藤實賴、三十二、九年（延長）、三月十三日任參議、○職事補任同ジ、

〔公卿補任〕五承平四年　參議從四位上紀淑光、六十六、同九（延長）三十三、兼勘解由長

忠平病ニ依リ除目チ行フ能ハザルチ奏スル狀

官、

〔公卿補任〕五承平五年　參議從四位下藤師輔、二十八、同延長九三十三右近權中將、

〔公卿補任〕五慶二年　參議從四位上藤敦忠、三十四、同延長九三十三左近權少將、〇三十六人歌仙傳左近衛少將ニ作ル、

正四位下藤忠文、六十七、同延長九三十三丹波守、

〔公卿補任〕五曆四年　參議正四位下大江維時、六十三、同延長九三十二兼備後介、

〔公卿補任〕五曆六年　參議從四位上藤朝忠、四十三、同延長九三十三右衛兵佐、〇三十六人歌仙傳同ジ、

〔公卿補任〕五曆八年　參議正四位下源兼忠、五十四、同延長九三十三左兵衛佐、

〔公卿補任〕五德二年　參議從四位上藤朝成、四十二、同延長九三十三侍從、

〔貞信公記抄〕正月廿八日、仰左中辨（淑光）依病不能行除目事之狀、令同辨奏院、（文書）

廿九日、大學事別當博士紀辨來、有院御消息、又越前生江、常陸是房等勞書等、

二月廿九日、進（經イ）奥州報書積薪愁勘前例可進退云々、階事也、可有申文、

三月四日、畫所申、內匠長上春實、任主殿之替文付同辨（左大辨）、又仰藥院醫師死闕、狛野包生任事、

除目議忠平ノ病ニ依リテ延引ス

受領ノ治績チ議定ス

十一日、除目議、梅壺始行、依予病、此儀于今延引、仍諸卿相定云、待平損事、其程難知、不如雖不出議所早始行者、招大納言（伊尊）、中宮大夫等、簾前行大祓事、

十二日、有議、

十三日、除目、丑四剋、議畢、定受領間、招左衛門督（信孝）、其後爲問良氏、行垂等能治之由、招右大辨（時望）、

涼闇中ハ奏慶セズ

〔西宮記〕二〇前田家本　正月下　除目　過正月後行外官除目例、

承平元年二月、

〔伏見宮御記錄〕利四行成卿記　寛弘八年十二月廿六日、乙丑、四條亞相被送書狀云、〇中略涼闇年、或說、公私皆不拜、近則今年除目時、或拜或不拜云々、仍尋舊例、清慎（實賴）公承平元年任參議、奉拜殿下云々、

法皇御書チ忠平ニ賜フ雷鳴

〔敍位除目執筆抄〕承平元三十一縣召、十三入眼、執筆、左大臣忠平、

十五日、癸酉、官奏、是日、僧平源ヲ興福寺別當ニ、僧仁數ヲ鵤寺別當ニ補ス、

〔貞信公記抄〕三月十五日、有官奏、公忠朝臣、又給雜宣旨、以平源爲興福寺別當、以仁數爲角（鵤）寺別當、宣旨仰高堪朝臣、依院御消息、所任人々書出、付左中辨令奏、雷鳴、

忠平米鹽ヲ施ス

廿五日、有官奏、

〔歴代皇紀〕二朱雀天皇裏書　興福寺別當　平恩大僧都弟子、承平元年三月十五日補、

〔興福寺寺務次第〕平源勢州人、麻績氏、新院本願、　于時已講大僧都、承平元年辛卯三月任、○興福寺略年代記同ジ、

○二十五日ノ官奏、便宜合敍ス、

十八日、丙子、政アリ、

〔貞信公記抄〕三月十八日、可行雜事、○中略造寺司、僧綱召、○中略怪事、宅直、○中略醍醐僧供年分等事、

十九日、丁丑、位祿定、

〔貞信公記抄〕三月十八日、可行雜事、○中略位祿事、

十九日、所勞不平、無便參入、仍乍在私第、定位祿事、左大辨來、○西宮記ニ以テ校ス、

二十日、戊寅、御修法ノ僧仁觀等ニ度者ヲ賜フ、是日、京中ニ賑給ス、尋デ、西院、崇親院、左右獄、所々悲田等ニ物ヲ施ス、

〔貞信公記抄〕三月廿日、御修法僧等廿一人、施度者各一人、仁觀施二人、伊豫守留京宣旨仰左中辨、以內給所、中宮職等錢、家米鹽、賑給京中餓者、惣五十石程也、

廿三日、以先日遺物、送西院、崇親院、左右獄、所々悲田等、各有差、

廿四日、令延昌施北山修行者、

二十二日、庚辰、不堪佃田使定、

〔貞信公記抄〕三月廿二日、左大辨來、令見不堪佃使定文、

二十四日、壬午、大神宮及ビ諸社ニ奉幣シテ、御卽位ノ由ヲ告グ、

〔日本紀略〕朱雀院　三月廿四日、壬午、奉幣於伊勢大神宮以下六社、告御卽位之由、

〔貞信公記抄〕三月廿四日、曉參入、○中略卽注幣帛使出立、但有別奉神寶之社、左金吾行事、

二十五日、癸未、直物、

〔貞信公記抄〕三月十八日、可行雜事、○中略直物、位祿事、○中略出羽、越中等掾可直事、

廿五日、有○中略直物、內印等、直物廿四人、

二十八日、丙戌國忌御齋會司ヲ任ジ、復任ノ宣旨ヲ下ス、

〔貞信公記抄〕三月十八日、可行雜事、國忌齋會司、

廿八日、又任國忌御齋會司、下京官復任宣旨、式部大輔奉宣旨、又給二合停任等文、

〔西宮記〕十二　臨時己　凶事　延長九三廿八、丙戌、左大臣召二省於梅壺、給復任宣旨、　復任事　○前田家本

二十九日、丁亥、尾張守祕樹姓闕、赴任ス、

〔貞信公記抄〕二月廿一日、左大辨（扶幹）持來、祕樹朝臣被免遲赴、

三月十八日、可行雜事、○中略　祕樹事、

廿五日、祕樹申文、公方勘文合四枚、令公忠朝臣於陣定申、左金吾（佳佐）、右大辨（時望）等定曰、赦後給裝束、及依病假百廿日可免遣者、依議免了、

廿六日、祕樹申文奉二月中云々、其文入左大辨（扶幹）手者、赦後滿百卌日也、但廿二日左大辨持來、然而依入官所免也、

廿九日、大輔又來、奉宣旨、尾張守祕樹朝臣申赴任之由、仍被物、兩大納言（仲平、保忠）、民部卿等來、

病假百二十日

忠平餞別ス

一分召奏

三十日、戊子、一分召、所々預ヲ補ス、

〔貞信公記抄〕三月廿八日、定一分奏等、

卅日、大輔來、又奉宣旨、一分召、內豎官人代給惟扶、酒頭預給明子掌侍、神泉預給、民（邦基）部卿、惟扶朝臣所傳也、卽預等宣旨、仰惟扶朝臣、

四月小　己丑朔盡

一日己丑旬、是日、大納言藤原保忠(藤原保忠)ヲ興福寺院別當ニ補ス、

〔貞信公記抄〕四月一日、己丑、八條大納言爲興福寺院別當、仰高堪、陣頭厨家聊儲饗、不取見參、仁和例也、○陣頭以下北山抄同ジ、

饗アリ　仁和ノ例ニ依リ見參ヲ取ラズ

二日庚寅、官奏、敍位、

〔貞信公記抄〕四月二日、有官奏、高堪、內印左金(恒佐)、賀茂上禰宜、女藏人親子等敍位、女官二人入內、

女官入內　伊豫調丁賀茂社修理大宰春米

三日、有官奏、公忠朝臣、左大辨(扶幹)來、有伊豫調丁事、賀茂社修理等事、又太宰春米可給責符事、

十三日、有官奏、內印左金、

十七日、有官奏、

廿五日有官奏、右中辨大(ヽ)度止殿下藏人所名簿、令維時朝臣等見帖(ヤ)字事、

○三日以降ノ官奏ノコト、便宜合敍ス、

僧泰舜ヲ法琳寺別當ニ補ス、

〔法琳寺別當補任〕第七阿闍梨泰舜　治十四年、延長九年四月二日宣下、

〔柳原家記錄〕百九太元祕記別當次第事　朱雀第七阿闍梨泰舜　承平元年四月二日任、

五日癸巳、雜宣旨ヲ辨官ニ下ス、是日、檢非違使ヲ補ス、

〔貞信公記抄〕四月五日、雜宣旨給公忠朝臣、勘解由撿校宣旨又以添、右弼等爲檢非違使、左(恒佐)金吾奉行、

女官衣服內敎坊月料米

七日乙未、擬階奏、是日、信濃諸牧別當ノ任限、及ビ諸司女官等ノ月料ノコトヲ辨官ニ命ズ、

〔貞信公記抄〕正月廿六日、女官衣服宣旨國指、又內敎坊申、衣服月料米事、仰高堪朝臣、

四月七日、奏成選短冊事、行(仰カ)久永宿禰、院召少將、仰云、信濃諸牧別當郡行任可延二年者、仰公忠朝臣、但先可勘四年爲限官符、又可勘依三合官符、又可給諸司仕丁、采女、內敎坊等一月料、女官、主殿縫殿等半月料、以穀可給、仰同辨、

內藏寮ノ井中ニ死人アリ

十一日己亥、直物、是日、禁中ノ觸穢ヲ占ハシム、

〔貞信公記抄〕四月十日、內藏寮有入井死人、

(頭書)「攝政著陣有直物事」十一日、於陣有直物事、又令神祇官、陰陽寮占申、穢氣入禁中否、而無穢之由、同占申也、是依中明從彼寮昨朝參入、爲有疑所占也、

十二日、先昨日直物、今日令給、

十二日、庚子、皇大神宮ノ正殿開カザルニ依リテ、御トヲ行フ、

〔貞信公記抄〕四月十二日、依伊勢正殿不開有御卜、

〔扶桑略記〕二十五裏書　朱雀天皇　四月十四日、壬寅、召官寮令占申、去月廿六日、被奉神寶之日、依穢氣神殿不被開也、

○扶桑略記裏書十四日ニ作ル、今貞信公記抄ニ據リテ掲書ス、

十三日、辛丑、大神祭使ヲ發遣ス、是日、法皇、攝政忠平ニ、度者等ノコトヲ命ゼラル、

〔貞信公記抄〕四月十三日、右大將（仲平）來云、院（宇多）仰、右近府生有闕者、可補給、又例度者名符進、何承諾、大神使立、

十四日、壬寅、御書始、

〔貞信公記抄〕四月十四日、有奏、左中辨、○略中御書始、仍候御前、

十五日、癸卯、位記ヲ召給フ、

〔貞信公記抄〕四月十五日、位記召給、左（恒佐）金吾爲上日、

十六日、甲辰、伊勢奉幣、

神寶ヲ奉ル日穢氣アリ

忠平御前ニ候ス

〔貞信公記抄〕四月十五日、又明日宣命草案、賜伊勢太宰等官符、同上奏聞、兩平宰相、左大辨來、

宣命草案ヲ奏聞ス

十六日、有伊勢幣事、大納言行事、

十七日、乙巳、勅使ヲ宇佐宮ニ遣シテ、卽位ノ由ヲ告ゲシム、

宇佐使和氣雅文

〔日本紀略〕朱雀院　四月十七日、乙巳、差筑後守和氣雅文於宇佐宮、告卽位之由、

〔西宮記〕臨時一　○前田家本　進發宇佐使事　永鈔本　承平元年四月十七日、（宣書）○略中殿上記云、是日、宇佐使筑後守雅文參入、卽給祿、白單袿衣一襲、

〔北山抄〕六　宇佐使立事　備忘略記　延長九年○略中四月十七日、發遣御卽位由奉幣使、筑後守和氣雅文參宇佐宮、於陣頭給宣命、進後町廊（軒ノ）下給御衣退出、立自內藏寮、外記記、

陣頭ニ於テ宣命ヲ賜フ　祿ニ御衣ヲ賜フ

〔貞信公記抄〕正月廿二日、可參向宇佐狀仰雅文、（遣）

（頭書）「諒闇、立宇佐使之時從諸司發遣」

四月十七日、宇佐使立、前例御前行之、而依御在所裝束諒闇之儀、與右大將（仲平）相定、從所司進發、但宣命祿等、召使禁中賜之如例、

諸國司等正稅ノ交易ヲ勤メズシテ、之ヲ臨時ノ雜用ニ充ツルコトヲ禁

勅使ニ祿ヲ賜フ

ズ、

〔符宣抄〕別本

左中辨紀朝臣淑光傳宣、左(忠平)大臣宣、年來之間、諸□(國)之吏、不勤正稅之交易、輙宛臨時之雜用、偏稱□□除例納、論之政途、理不可然、自今以後、□□□□用申省例交易、若有言上其文者、卽□□□□申者、

延長九年四月十七日　左大史錦宿禰□□□□(家)

十九日、丁未警固召仰、

〔貞信公記抄〕四月十九日、雨、警固召仰、

二十日、戊申賀茂祭前齋ニ依リテ、郡司讀奏ヲ延引ス、

〔貞信公記抄〕四月廿日、讀奏、依祭間延之、左(扶幹)大辨來、令見依三合後閏月在、今年可愼官符案、

三合ノ災

○郡司讀奏ヲ追行スルコト、二十七日ノ條ニ見ユ、

二十一日、己酉賀茂祭、

〔貞信公記抄〕四月廿一日、今日行列、無命婦藏人、只有騎馬女一人、又典侍車無下仕者、不催出命婦藏人、是尤違失也、但見衆歸後、兩女追參云々、

女騎一人命婦藏人ヲ出サズ

〔西宮記〕臨時十祭使事　九記云、承平元年四月、祭使權中將納言也、使近衞等、皆著例摺袴云々、

寬校擧狀

二十三日、辛亥法皇、大宰府春米等ノコトニ依リテ、御書ヲ忠平ニ賜フ、

〔貞信公記抄〕四月廿三日、右中辨來、有院御消息、太宰府春米、寬校擧狀等也、

山崎ノ橋ヲ修理ス、

〔貞信公記抄〕正月廿二日、左中辨來、申○(中略)山崎橋所申雜事等、

四月廿三日、夜參入、山崎橋材木曳事、仰左(扶幹)大辨、依高堪朝臣再三申也、

二十六日、甲寅承平ト改元ス、

〔日本紀略〕朱雀院　四月廿六日、甲寅、改延長九年、爲承平元年、

〔改元部類〕自承平至寬治　李部王記　延長九年四月廿六日、詔書改元承平、先是、左(忠平)大臣仰大內記大江朝臣朝綱、文章博士同維時、擇定年號字、(文章博士三善文江朝臣、依重服不預吉事云々、)

大江朝綱等元號ヲ擇ブ

陣定ヲ行フ

外記日記　延長九年四月廿六日、甲寅、左大臣幷諸卿就左仗座、召中務大丞源泉、給改延長九年四月廿六日爲承平元年詔書、

〔改元部類〕自承平至觀應　不知記　延長九年四月廿六日、甲寅、物忌閉門、此日有

詔改年號云々、其詔云、古之帝王、北辰正位、南面嚮明者、何嘗不變(脫アルカ)徵章、而叶天心、改正朔而易民聽、故披宿霧於連山、革故之風不墜、酌流例於魯史、體元之訓已傳、前事不忘、後代之師也、朕以弱齡、嗣登天位、道德未洽於九縣、寒暑猶乖於四時、懍乎若朽索馭六馬、夫周誦踵武、不開姬發之晨、漢弗守文、已建始元之號、非開鳳曆、何纂鴻規、方今玉琯移灰、珠胎換月、踰年號令、今則其時、宜廸仍舊之蹤、以宣鼎新之化、可改延長九年爲承平元年、主者施行、

〔元祕別錄〕一 勘文部 改元事　延長九年四月廿六日改元、承平、代始、

文章博士江維時、大內記同朝經(綱)、

式部大輔闕、權大輔元方不進、博士文江重服、此兩人勘文草不見、但左大臣(仲平)、大內記大江朝繩(綱)、文章博士同維時、擇定年號字、文章博士三善文江、依重服、不預吉事、

大江維時等勘文ヲ上ル

〔貞信公記抄〕四月十三日、右中、召朝綱朝臣、仰可作改元詔書事、并年號可定、十四日、又維時仰改元事、

朝綱詔書ヲ作ル

(頭書)「攝政大臣著陣定年號」廿六日、改元詔書出、有內印、今日於陣、令諸卿定年號字、

內印アリ

〔扶桑略記〕二十五 朱雀天皇　四月廿六日、改爲承平元年、

〔一代要記〕朱雀 天皇　承平元年辛卯五月二十二日、改元、依御卽位也、

○改元ノ日、一代要記、五月二十二日ニ作ル、今日本紀略、扶桑略記、貞信公記抄等ニ據リテ揭書ス、歷代編年集成、皇代曆、皇代記、皇代略記、公卿補任、愚管抄等異事ナキヲ以テ略ス、

抄寫四人覆勘二人

左大臣忠平、文章博士大江維時ヲシテ、內御書所ノ御書ヲ擇バシム、

〔改元部類〕自承平 至寬治　李部王記　延長九年四月廿六日、○中略 是日、左大臣(忠平)令文章博士維時擇申畢(行カ)先帝御時、撰造(遇カ)未畢功之內御書所御書、維時卽擇舊候彼所者之中、抄寫四人、覆勘二人令奉仕、維時說也、初先帝之御時、維時預其事、故大臣命、

御匣殿別當藤原貴子、飛香舍ニ移ル、

〔改元部類〕自承平 至寬治　李部王記

當貴子朝臣、移住飛香舍云々、

二十七日乙卯、改元詔書覆奏、郡司讀奏、

〔貞信公記抄〕四月廿七日、郡司讀奏、左(佐)金吾行之、詔書覆奏左金、

〔左經記〕脫漏 追加　長和六年四月廿二日、庚寅、○中略 改元詔書被覆奏之程、可勘申者、文義令覽外記日記狀云、○中略 又貞信公御曆記云、延長九年四月廿六日

改元、七日覆奏者、

○郡司讀奏延引ノコト、本月二十日ノ條ニ見ユ、

二十八日、丙辰官奏、

〔貞信公記抄〕四月廿八日、有官奏、高堪朝臣、右中辨、美作解文、度者改名等事、

美作解文度者改名

五月大戊午朔盡

一日、戊午官奏、

〔貞信公記抄〕五月一日、戊午、有官奏、左中辨、(親光)

四日、有官奏事、

七日、有官奏、左中辨、

九日、有官奏、高堪朝臣、

廿日、有官奏、公忠朝臣、

廿五日、有官奏、左中辨、茂實申不退寺官符、

廿八日、有官奏、右中辨、內印、

不退寺ノ官符

內印アリ

○四日以降ノ官奏便宜合敍ス、

三日、庚申祈雨奉幣使ヲ發遣ス、

〔貞信公記抄〕五月一日、戊午、民部卿來、陣定(於脱カ)祈雨使、

祈雨使ヲ定ム

二日、於陣定祈雨使、又有申文、

陣定ヲ行フ

三日、祈雨幣使立、今日雨降、終夜不休、左金吾(佐)行事、

雨終日休マズ

五日、壬戌中納言藤原恆佐ヲ東大寺俗別當ニ補ス、

承平元年五月一日　三日　五日

〔正倉院文書〕一櫃第四卷（東南院文書）

「到來（別筆）閏五月十九日」

太政官牒東大寺

中納言從三位兼行左衞門督藤原朝臣恆佐

右中納言從三位兼行右衞門督藤原朝臣兼輔宣、奉勅、件人宜定彼寺別當者、寺宜承知、依宣行之、牒到准狀、故牒、

承平元年五月五日　　從五位下行左大史兼紀伊介錦部宿禰（自署下同ジ）「麦丸」牒

從四位上行勘解由長官兼左中辨參河權守紀「朝臣」

奉行之

別當「寬救」　　都維那「智仁」

上座

寺主「會安」印（○本書、太政官印十顆ヲ踏ス、）

〔東大寺別當次第〕俗別當中納言從三位兼行左衞門督藤原朝臣恆佐　承平元年十一月五日、（五カ）

七日、甲子、鑄錢司ヲ譴責ス、

新良貞雄先祖以來務ヲ掌ル寺

尼除棄ノ字ヲ寺司三人本寺上座ヲ執當ト爲ス貞雄ノ子孫ヲ檀越職ト爲ス定額僧ヲ寄住セシム

〔貞信公記抄〕五月七日、左大辨（扶幹）來、使仰可給責官符於鑄錢司事、

東安寺ヲ以テ、醍醐寺別院ト爲ス、

〔慶延記〕十三　醍醐雜事記十三　免除證文下　一東安寺

太政官符治部省

應爲醍醐寺別院、東安尼寺事、

在山城國宇治郡小野郷、（字小野寺、）

右得散位新良貞雄去年十月廿五日解偈、件寺是貞雄先祖也、子孫相承、知寺家務、申成定額、申官位司、代々相傳來、於今月十日、先帝山陵被安斯地、僧（亀脫カ）交來无使（煖カ）行事、但有是亦先帝御願寺也、醍醐與山陵、專不隔堺、東安尼醍醐寺、宜爲綱維、加以名號尼寺、本（衍カ）自今以後、除棄尼字、寺司唯用三人、立以爲例、不聽衆任、卽寺家雜務、將聽本寺分、以本寺上座、爲執當之司、以貞雄之子孫、定壇（檀）越職、後爲例法、望請蒙官裁、依件被裁下、然則先帝山陵、不斷念佛之音、國家鎭護、彌增熾盛之力者、又彼寺解偈、件寺近在御在所、停却破之煩、令定額僧等、遞以寄住、奉誓聖靈、誠得穩、永（脫アルカ）爲寺家別院、近奉莊嚴山陵、遠奉祈朝廷、職（脫アルカ）者專簡用先師門徒中、准眞言天台寺別院之例、寺家立爲恆例、以所有田園等、依舊將令宛修

治料、然則東安伽藍以存興隆、西方寶刹(脫アルカ)飛慈雲、奉導聖靈者、左大臣(忠平)宣、依請承知、依宣行之、符到奉行、

從四位上行勘解由長官兼左中辨參川(ヵ)權守紀朝臣淑光從五位下行左大史兼紀伊介錦部宿禰春蔭

承平元年五月七日

奉行　十月十三日

參議卿藤原朝臣　讀申少錄櫟井

大輔藤原朝臣　大丞　闕

小輔　闕　少丞藤原

大錄安部　在判　少錄箭集

僧供料米

定額僧

遺詔ニ依リ、近江ノ正稅ヲ以テ、醍醐寺ノ僧供料ニ宛テシム、

〔慶延記〕三下醍醐雜事記三

一太政官符近江國司

應永宛醍醐寺定額僧、僧供料米事

定額僧拾口　料白米每日肆斗陸升日別四升六合、

座主

三綱

住僧

精代春功運賃

悠紀近江神崎郡　主基丹波氷上郡　檢校行事ヲ定ムルヲ郡ヲトシ

座主一口

三綱三口

住僧六口

右大納言正三位兼行右近衛大將陸奥出羽按察使藤原朝臣仲平宣、奉勅、件供料米、宜以國正稅、永令春宛之者、國宜承知、依宣行之、仍須每月計日在前運送、其精代春功運賃、依例宛之、不得闕怠、符到奉行、

從四位上行勘解由長官兼左中辨參河權守紀朝臣淑光從五位下大史(行左脫カ)兼紀伊介錦部宿禰春陰

承平元年五月七日(醍醐)

〔醍醐寺雜事記〕李部王記云、(醍醐寺新要錄、醍醐寺要書同ジ、)○中略　訪、語次○中略又問、先皇顧命、有醍醐寺置年分度者、可施供米仰、未審右丞相申其由哉、答、其事近會定行已了云々、

八日、乙丑、大嘗會ノ國郡ヲト定ス、

〔日本紀略〕朱雀院　五月八日、乙丑、定大嘗會國郡等、悠紀近江國神埼郡、主基丹波國氷上郡、

〔貞信公記抄〕(頭書)攝政著陣定大嘗會事但不卜合依有前例也　五月八日、於陣定大嘗會國郡檢校行事、但卜郡不卜國、是依寬

テ國チトセズ　平例所行也見神祇官文簿、

忠平著陣　〔北山抄〕五大嘗會事　承平元年、左大臣(忠平)著陣、令大辨書每國二郡、卜畢、令左中辨淑光奏、

代明親王　醍醐寺圖及ビ鑄鐘支度ヲ呈セラル　延賀ノ申文　鑄鐘料錢二十三萬餘　一親王二十八人源氏ノ知識錢　九日、丙寅、前齋宮柔子內親王ニ、去冬ノ衣服料等ヲ給ス、

〔貞信公記抄〕五月九日、左中辨申、前齋宮去年九月以後、十二月以前料絹布綿米等、依前例、可行彼家之狀、可給官符、○中略又有白(マヽ)少宣旨、

十日、丁卯、彈正尹重明親王、鑄鐘料錢ヲ醍醐寺ニ納メラル、

〔醍醐寺雜事記〕李部王記云、○中略延長九年四月廿日、中(代明)務卿親王、使右衞門尉藤原成國、呈醍醐寺圖、及同寺鐘支度、同寺上座延賀申文曰、近曾右衞門督兼輔卿、經過陳云、公家營造醍醐寺、欲畢功於先帝御周忌御齋會以前、諸事繁多、非無事煩、就中鴻鐘、非衆事忽難成歟、凡鑄鐘例、多引知職(識)、矧是寺鐘、親王源氏等共令奉鑄、頗可宜、卽答曰、事甚宜也、乃至今依延賀法師支度、惣計雜物、可用錢廿三萬餘、而有親王廿一人、源氏八人、准去年御七々日諷誦例、親王各出一萬、源氏出五千、自可叶其數等云々、

五月十日、奉送鑄鐘料錢一萬於醍醐寺云々、

御周閑切迫ス　諸國不堪ト稱シテ材木ヲ進メズ　近江ノ不動交易ヲ徵ス　民部省封戶充文ヲ奏ス　十九日、丙子、內裏穢アリ、

瘍胎穢

〔貞信公記抄〕五月十九日、右(定方)大臣家有瘍胎穢、而先入內裏、

二十日、丁丑、醍醐寺ノ造立延滯スルニ依リ、木工寮ヲシテ之ヲ作ラシム、

〔貞信公記抄〕五月廿日、仰木工寮可令作醍醐寺事同(公忠)辨、

〔醍醐寺雜事記〕李部王記云、○中略延長九年○中略六月○中略廿四日、左大臣來訪、語次陳云、先帝御周閑、期月迫近、而醍醐寺造構、難可忽濟、甚以歎息、形勢未一定、延滯至今、又諸國皆稱不堪、不採進材木、仍仰近江國、以不動交易進、而公卿不朝、近日初下其官符、是遲留忽難叶期、余問云、制造形勢一定如何、答云、依先年圖可奉造、

左大臣忠平ニ隨身兵仗ヲ賜フ、

〔公卿補任〕五　左大臣正二位藤忠平、五十二、五月廿日賜內舍人隨身、左右近衞四人、

二十一日、戊寅、賑給使及ビ施米等ノ事ヲ定ム、

〔貞信公記抄〕五月廿日、但明日可仰令戶部定賑給使、兼施米事、民部省奏封宛文、便付內侍返給、

二十二日、己卯、內印アリ、

〔貞信公記抄〕五月廿二日、己卯、九坎、有内印、

二十三日、庚辰、大嘗會行事始、

〔貞信公記抄〕五月廿三日、大嘗會行事始、

〔園太暦〕觀應元年八月廿五日、

大嘗會延引例

朱雀院、承平元年五月廿三日、行事所始、

祭主大中臣奥生ヲシテ、止雨ヲ祈ラシム、

〔日本紀略〕朱雀院　五月廿三日、庚辰、降雨、令祈止雨之由、

〔貞信公記抄〕五月廿三日、令齋主祈申止霖雨、可無損害之狀、檢前例、嘉祥四年、元慶九年等、五月霖雨之間、有奉幣雨師二社祈止雨事、而依宮中穢、宮中ノ穢ニ依リテ奉幣セズ（○十九日ノ條参看、不能奉幣、）

山陰道諸國ヲシテ、傜人ヲ差シ、大嘗會所ノ雜物ヲ運バシム、

〔符宣抄〕別本

太政官符山陰道諸國司

應差傜人運大嘗會所雜物事

右被大納言正三位兼行右近衛大將陸奥出羽按察使藤原朝臣仲平宣�constant、會料雜物、宜差傜人令運者、諸國承知、依宣行之、符到奉行、

從四位下行右中辨藤原朝臣　　正六位上行左少史坂上宿禰經行

二十五日、壬午、出雲神社使、諸國佃田官符等ノコトヲ辨官ニ命ズ、

〔貞信公記抄〕五月廿五日、茂實申、（○中略）出雲神社使、諸國佃官符等事仰同辨、（左中辨）

香御辛櫃事仰公忠朝臣、（香御辛櫃）

二十六日、癸未、度者百人ヲ定ム、

〔貞信公記抄〕二月十四日、左中辨來、（○中略）又千人度者符案、（○中略）給同辨、（千人度者符案）

五月廿六日、定千人度者内百人、

二十八日、乙酉、京職ノ請ニ依リ、悠紀、主基兩所ノ夫功ニ義倉料ヲ借用シ、調錢ヲ以テ返納セシム、

〔貞信公記抄〕五月廿八日、左中辨云、悠主兩所夫功無由、京職有申、須借用義倉料、以調錢可返納者、

二十九日、丙戌、直物、是日、悠紀、主基兩所等ノ請ニ依リ、米錢等ヲ給與ス、

錢百貫
米二百石
正税稻一
萬束
御齋會造
寺所ニ錢
各百貫ヲ
給ス

〔貞信公記抄〕五月廿九日、著陣、有直物四人、右（金綱）金吾奉行、悠主兩所請申、錢各百貫、米各貳百石、正税稻各一萬束、御齋會、造寺所申、各百貫、又米竝可仰諸國雜物等、依請、

閏五月（小盡　戊子朔）

三日、庚寅、地震、

〔日本紀略〕（朱雀院）閏五月三日、庚寅、大雨、地震、

五日、壬辰、造東大寺長官等ヲ補ス、是日、受領赴任ノ後、加階ノ例ヲ勘ヘシム、（頭書）「攝政著陣定受領赴任之後加階」

〔貞信公記抄〕閏五月五日、壬辰、雅文還來、於陣問定受領赴任之後加階之例、又任造東大寺長官、主典等、

攝政忠平著陣

七日、甲午、霖雨ニ依リテ、御卜ヲ行フ、是日、官奏、正倉院ノ垣ヲ修理セシム、

〔扶桑略記〕（二十五裏書　朱雀天皇）閏五月七日、召官寮有御卜、依霖雨也、

〔貞信公記抄〕閏五月七日、有官奏、公忠朝臣、使作正倉垣破事、依霖雨久降、諸人多愁、令占若有祟歟、占申云、依穢艮坤方神社所致歟者、遣檢非違使令見檢、十日、丁酉、令實檢方合諸社、比叡社近邊有死、（人脫カ）

諸人愁多
檢非違使
ヲシテ實
檢セシム

〔北山抄〕（六軒廊御卜事　備忘略記）

穢、各於○江次第令ニ作ル、本司卜之、○中略　貞信公、（記脫カ）（頭書）承平元年閏五月七日、大納（仲平）言令卜霖雨由、依內裏

九日、丙申、散位良忠（姓闕ク）ヲ造率川社使ト爲ス、

〔貞信公記抄〕閏五月九日、造率川社使散位良忠、

忠平弟仲平ト昇殿ノ人ヲ定ム

僧二十口ヲ請ス二十一寺若ニ大般若経ヲ転読セシム

施穀僧名等ヲ定ム

十一日、戊戌常平所ノ貯穀賣却ノコトヲ定メシム、是日、藤原師輔ヲ藏人頭ニ補シ、小野好古等ノ昇殿ヲ聽ス、

〔日本紀略〕朱雀院　閏五月十一日、戊戌、被定常平所穀可賣事、

〔貞信公記抄〕閏五月八日、右(仲平)大將談說之次、略定昇殿人、

十一日、左(扶幹)大辨來、有常平所事、昇殿人々、頭宣旨等、仰中明、

〔公卿補任〕五承平五年　參議從四位下藤師輔、二十八、承平元閏五十一藏人頭、

〔公卿補任〕五天暦元年　參議從四位下小野好古、六十四、承平元閏五十一昇殿、

〔公卿補任〕五天慶四年　參議從四位下藤在衡、五十、承平元閏五七(十一カ)昇殿、

○職事補任、五月十一日ニ作ル、

二十七日、甲寅臨時御讀經ヲ弘徽殿ニ修ス、

〔日本紀略〕朱雀院　閏五月廿七日、甲寅請廿口僧、於弘徽殿令讀經、又於廿一寺轉讀大般若經、

〔貞信公記抄〕閏五月廿日、招左(扶幹)大辨、定諸寺御讀經諸僧(請カ)並施穀事、又御前臨時御讀經僧名等事、

廿七日、七大寺、東、西、延暦等寺、始從今日至晦日、令讀大般若、同寺々又自餘寺

二十七寺ニ御息災ヲ祈ル尼寺法性寺

合廿七寺、令讀仁王經、一箇日爲御息災也、但尼寺任各可讀、臨時御讀經行弘徽殿、大般若廿僧也、法性寺令轉讀金剛經三箇日也、

〔西宮記〕九月季御讀經　九記云、承平元年(閏)五月廿七日云々、臨時御讀經、發願前出居、次上達部、次僧、先例不昇殿、上達部不參臨時御讀經、至于季御讀經、近衛召參上云々、中少將不昇殿者、不待召參入云々、出居、事了、僧等出云々、廿九日、結願、先例、第四日朝座御結願、而明日依可供忌火御飯、今日了云々、○江次第同ジ、

〔江次第〕五季御讀經事二月　竟日、第四日、承平元年五月廿七日始之、廿九日結願、依明日忌火也、

○本書、臨時御讀經ノ明文ナシト雖モ、西宮記ニ據リテコヽニ收ム、

上達部ハ臨時御讀經ニ參ラズ

六月一日忌火御飯ニ供ズルニ依リ第三日結願トス

六月小丁巳朔盡

一日丁巳左京正四位上太詔戸神ニ從三位ヲ授ク、

〔日本紀略〕朱雀院　六月一日、丁巳、奉授左京坐正四位上太詔戸神從三位、

三日己未遺詔ニ依リテ、醍醐寺ニ年分度者二人ヲ置ク、

〔醍醐寺要書〕

太政官符治部省

應置醍醐寺年分度者二人事

三論宗一人

可習學法花經一部　最勝王經一部

仁王經一部

眞言宗一人

可習學孔雀經一部　尊勝眞言一卷

三十七尊禮懺一卷

右彼寺座主十禪師傳燈大法師位貞宗(樂)奏狀偁、法鏡圓明、照三世而澄影、玄門方廣、通八正而導迷、故挹其流者、罕測淺深、向其路者、難識遠近、无得而稱、其唯

太政官符

三論宗一人

眞言宗一人

座主貞崇奏狀

醍醐天皇醍醐寺ヲ建テ給フ新額ヲ定ム

堂舍ト住侶

國忌ノ日ニ得度セシム

本願聖靈及ビ今上ノ寶祚ヲ祈ラシム

正覺歟、(屋脚)先帝雖居萬乘之尊、深信三車之喩、東山之脚、建一仁祠、不改名號於舊峯、遂定醍醐於新額、貞宗、猥蒙勅命、勾當寺家、爰堂舍既成、僧徒亦住、坐禪之輩、觀月輪於山窓、讀誦之僧、送日車於松逕、方今堯雲難隱、舜焰益明、若忘紹隆於此時、恐悔退轉於後世、望請天裁、被准代々御願例、置年分度者二人、每年試練、當於先帝登遐之日、授沙彌戒、得度之緣、登壇受戒之後、住於伽藍、勤各本業、先奉飾本朝(願カ)聖靈、兼奉護今上寶祚、然則千福步下、寶蓮之花早開、九重宮中、金鏡之光長朗者、大納言正三位兼行右近衛大將陸奥出羽按察使藤原朝臣仲平宣、奉勅依請者、省宜承知、依宣行之、符到奉行、

承平元年六月三日○醍醐寺初度具書、醍醐寺新要錄同ジ、

僧綱牒

僧綱牒醍醐寺司

應置年分度者二人事

三論宗一人　眞言宗一人

牒、玄蕃寮牒偁、治部省符偁、被太政官今年六月三日符偁、彼寺座主十禪師傳燈大法師位貞宗奏狀偁、云依件(な脫カ)行之者、僧綱寮狀者、牒送如件、寺宜承知、依件

玄蕃寮牒

行之、故牒、

承平元年七月廿一日

少僧都　　從儀師峯住
權律師　　權威儀師 在判
權律師　　威儀師
權律師會理　　威儀師
律師延喜（善イ）　　威儀師
權律師　　威儀師
律師　　威儀師
權律師　　威儀師永有

〔醍醐寺雜事記〕李部王記云、○中略延長九年○中略六月○中略廿四日、左大臣（忠平）來訪、語次○中略又問、先皇顧命、有醍醐寺置年分度者○中略仰、未審右丞相申其由哉、答、其事近曾定行已了云々、

名僧チ遣シテ三日間祈ラシム

四日、庚申、白虹、承明門ニ見ハル、是日、七社ニ讀經シテ、御息災ヲ祈ラシム、

〔日本紀略〕朱雀院　六月四日、庚申、承明門艮角虹見、○扶桑略記裏書同ジ、

〔貞信公記抄〕六月四日、庚申、京邊七社遣名僧、始自今日三个日、讀經奉拜、令祈御息災、虹立承明門下、

白虹ノ怪及ビ天文ノ異アリ

十二日、戊辰、禳災祈雨ノ爲メ、臨時奉幣使ヲ發遣ス、是日、宜陽殿ニ怪アリ、

〔貞信公記抄〕六月十二日、幣使立間、雨快下、臨時使立、是爲吉（ヂカ）、白虹怪可慎給、又有天文異、兼祈雨等也、右（仲平）大將爲上、宜陽殿板敷鳴怪、可慎子午年公卿、

〔古今著聞集〕十七變化　承平元年六月廿八日、未の刻に、衣冠著たる鬼のたけ一丈あまりなるか、弘徽殿のひかしの欄のほとりに現して、やかてうせにけり、或は夢想とも人申けり、一定をゝらす、其比十个夜はかり曉に及ひて、八省院と中務省の東の道とのあひたに、人馬の聲東にむかひておほく聞えけり、まことにはなかりけり、是も鬼のゝわさにや、

鬼弘徽殿ニ現ハルトノ說

○弘徽殿及ビ八省院等ニ怪異アルコト、便宜合敍ス、

八省院ト中務省トノ間ニ怪アリ

十九日、乙亥、攝政忠平、陣座ニ於テ、外記請印ヲ行フ、

〔貞信公記抄〕（顯書）攝政著陣有申文　六月十九日、參入、陣有申文、問外記政有無、左（扶桑）大辨答云、從去八日以來、依上（冒脫カ）不參入無政者、可捺內印倉事、今日請印者、右（仲平）大將令奏內案、

八日以來外記政ナシ仲平內案ヲ奏ス

二十日、丙子、天變、

〔日本紀略〕朱雀院　六月廿日、丙子、圓靈如鏡、

虹長樂門内ニ見ハル

社寺ニ奉幣讀經ス軒廊御ト行ハズ

二十三日、己卯、虹、承明門及ビ太政官正廳等ニ見ハル、因リテ、御卜ヲ行フ、

〔日本紀略〕朱雀院　六月廿三日、己卯、申刻虹見承明門艮角、並太政官正廳、

〔貞信公記抄〕六月廿三日、虹立長樂門内、

〔扶桑略記〕二十五裏書　朱雀天皇　同（六月）廿三日、己卯、申刻承明門艮角、并官正廳東二間虹立、寮占申官怪處凶由、

〔中右記〕寛治六年六月七日、己未、○中略　申時禁中堀川院、殿上小庭并南池東頭有虹見事、則召外記、被問先例、大外記定俊勘申前例、承平○中略　年中、度々禁中虹立、隨御卜趣、或奉幣、或讀經者、但不被行軒廊御卜也、

七月　大丙戌盡朔

三日、戊子、大宰府警固所ノ驚怪ヲ占ハシム、

〔日本紀略〕朱雀院　七月三日、戊子、令占太宰府警固所驚集事、占云、西方可有兵賊事、

文章博士大江維時ノ昇殿ヲ聽ス、

〔公卿補任〕五天暦四年　參議正四位下大江維時、六十三　承平元七三昇殿、

五日、庚寅、法皇ノ御惱ニ依リ、諷誦ヲ七寺ニ修ス、尋デ、度者六十人ヲ上ル、

〔日本紀略〕朱雀院　七月五日、庚寅、法皇御病、修諷誦於七寺、

〔貞信公記抄〕七月二日、近日、法皇重煩給、其御病血痢也、依有所勞、不能參候者也、示達京極（褒子）、

七日、右（仲平）大將來、有院度者申給事、卅三人也、○中略　度者六十人、奉法皇、依御藥重也、

御病血痢

七日、壬辰、月、心星ヲ犯ス、是日、復任ノコトヲ行フ、

〔貞信公記抄〕七月七日、月犯心星、○中略　右（定方）大臣陪殿上、元方、季方朝臣等、又右近將曹復任事奉行、